第1節　総　　記

文学部の沿革については、既刊の『京都帝国大学文学部三十周年史』(1935年)、『京都帝国大学史』(1943年)、『京都大学文学部五十年史』(1956年)、『京都大学七十年史』(1967年)にそれぞれ要を得た記述があるので、重複をさけ、ここではできるだけ簡略にとどめた。

第1項　文科大学時代

1. 創　　設

京都帝国大学に文科大学が開設されたのは明治39(1906)年9月11日のことである。同年6月4日、勅令第135号をもって文科大学に設置される講座の種類およびその数が定められ、6月11日の文部省令第10号によって9月11日から文科大学を開設することが布告された。7月には、4月以後開設委員を嘱託されていた狩野亨吉(倫理学)、谷本富(教育学教授法)、狩野直喜(支那語学支那文学)、松本文三郎(印度哲学史)、桑木嚴翼(西洋哲学)に松本亦太郎(心理学)を加えた6名が教授に就任、狩野亨吉が初代学長に任ぜられた。次いで8月には文科大学規程が制定され、9月11日、予定どおり文科大学の開設を見るに至ったのである。

もっとも文科大学の創立はこの時期に及んで初めて企図、決定されたものではない。本学は明治30(1897)年6月18日の勅令第209号によって開設されたが、その勅令において京都帝国大学は法、医、理工、文の各分科大学を有

＊扉の写真は、文学部旧館の正面左側部分。

するものとされており、各分科大学の設置の期日については文部大臣が別にこれを定めることとなっていた。すなわち文科大学の設置は京都帝国大学創立の当初から予定されており、初代総長木下廣次のもとでその準備も早くから進められていたのである。明治30(1897)年創立時の理工科、明治32(1899)年の法科・医科の開設の後、文科大学の創設が遅延したについては、日露開戦に至る当時の国内情勢によるところが大きい。しかしその戦争も日本の勝利のうちに終わり、国内の文運興隆の時至って、ついに明治39(1906)年、関係者の尽力により文科大学開設の運びとなったのである。文科大学はその創設に当たって哲・史・文の3学科編成をとったが、同年まず哲学科が開講され、翌明治40(1907)年9月に史学科が、さらに翌明治41(1908)年9月文学科が開講されて、ここにようやく3学科並存の体制が完成、整備されることとなった。

2. 研究体制

文科大学の創設に当たっては、既に存在する東京帝国大学のそれに対していかなる特色を出すかについて苦心が払われた。そのことは学科・講座の編成の上にもよく表れている。講座は明治39(1906)年6月から明治41(1908)年5月にかけて予定の大部分が開設され、その後若干が増置されて、明治45(1912)年5月までに当初企画されたような研究体制がほぼ整備された。その設置の状況を表示すると、表2-1のとおりである。

これらの講座の設置については、当時の東京帝国大学文科大学のそれに比べて、次のような点に大きな特色が見出される。第1に東大では心理学が論理学・倫理学と合併して置かれたのに対し、本学では独立の講座として存在する。第2にいわゆる「支那学」として知られる支那哲学・東洋史学・支那文学が、それぞれ哲・史・文の3学科に分属する別の講座として設けられ、特に東洋史学に3講座が置かれたことである。これは東洋学の発展に重きを置くとの本学創立時の一方針が具体化されたものといえよう。さらに第3に特筆されるべきは、地理学が人文地理学を主とし、しかも独立講座として史

表2-1　文科大学講座設置年月表

講座＼設置年月	明治39年6月	明治40年5月	明治41年5月	明治42年5月	明治45年5月
哲学哲学史					
第1(哲学・西洋哲学史)	○				
第2(印度哲学史)	○				
第3(支那哲学史)				○	
第4(西洋哲学史)					○
心理学	○				
倫理学	○				
教育学教授法	○				
支那語学支那文学	○				
国史学					
第1		○			
第2				○	
東洋史学					
第1		○			
第2			○		
第3				○	
史学地理学					
第1(西洋史学)		○			
第2(地理学)		○			
第3(西洋史学)				○	
宗教学		○			
社会学		○			
西洋文学					
第1(独逸文学)		○			
第2(英文学)			○		
国語学国文学			○		
言語学			○		
梵語学梵文学			○		
美学美術史				○	

学科に組み入れられたことである。これは創設期の史学科に多大の功績をなした内田銀蔵教授の見識によるといわれているが、当時としては斬新卓抜な

構想であって、第2次世界大戦後の新制大学にあっては、これに倣って人文地理学を史学科に組み合わせた大学が多く見られる。

その後大正5(1916)年9月には史学科に考古学講座が設置されるが、これもこの時期になって突然企画されたものではない。わが国の大学における最初の考古学講座の設置は後述する陳列館の設備とともに史学科開設の当初から企図されており、明治42(1909)年9月には将来の担任者として濱田耕作が講師に依嘱され、関係標本の蒐集に着手している。これも本学開設時の構想の独創性を示すものといえよう。

教官の人選にも次のような特色が示されている。その頃東京帝国大学では教授の任に当たる者は必ず帝国大学の卒業生であることを条件とし、かつ職歴を重視していたが、本学においてはあまりこれらの条件に拘泥しなかった。東洋史の内藤虎次郎(湖南)が新聞界から、国文学の幸田成行(露伴)が文学界からそれぞれ迎えられたように、わが文科大学はいわゆる「野に遺賢を求むる」の態度を世に示したのである。病気や本人の都合のために実現せずに終わったが、ほかに高山林次郎(樗牛)や夏目金之助(漱石)もそれぞれ美学・英文学の教授に迎えられることに決していた。

西洋文学の教授に外国人を招かなかったことも1つの見識である。初め木下総長は外国人教師に適任の人がないため、西洋文学講座の設置には躊躇したらしいが、むしろ外国人によらない外国文学の研究を唱導し、独逸文学に藤代禎輔、英文学に夏目に代わって上田敏(柳村)が来任することとなった。

3.　授業の体制

講座の編成や教官の選考方針に示された創意工夫は、あたかも日露戦争後における日本の勃興期にふさわしい清新で自由濶達な学風の育成を目指したものであるが、そのことはまた学生に対する授業の体制の上にも多くの特色となって表れている。

まず各学科には、それに属する正科目と副科目とがある。当初の精神を知るために、明治39(1906)年8月16日制定の文科大学規程によって以下にそれ

を示そう。

一　哲　学　科

正　科　目　哲学　西洋哲学史　印度哲学史　支那哲学史　心理学　倫理学　教育学教授法　美学美術史　宗教学　社会学

副　科　目　生物学　生理学　精神病学　文学概論　国文学　支那文学　経済学　統計学　教育行政法　英語　仏蘭西語　独逸語　梵語　希臘語　羅甸語

二　史　学　科

正　科　目　国史　支那史　東洋史　西洋史　最近世史　史学研究法　地理学

副　科　目　古文書学　哲学概論　心理学　教育学教授法　美学美術史　社会学　文学概論　国文学　支那文学　英語　独逸語　仏蘭西語　露西亜語　支那語　朝鮮語　希臘語　羅甸語

三　文　学　科

正　科　目　文学概論　国語学　国文学　支那語学支那文学　英文学　独逸文学　仏蘭西文学　梵語学梵文学　言語学

副　科　目　英語　独逸語　仏蘭西語　露西亜語　支那語　朝鮮語　アイヌ語　梵語　羅甸語　希臘語　哲学概論　心理学　教育学教授法　美学美術史

正科目の講義は普通講義・特殊講義・演習の3種よりなるが、各学科の所属学生はまず所定の正科目の全部にわたってその普通講義を必修し、さらにそれらのうちから1科目を選んで専攻科目とし、その特殊講義と演習を必修する規定である(ただし、英文学・独逸語・仏蘭西語・梵語学梵文学にあっては、専攻としない科目の普通講義はその1を選ぶ)。普通講義は概説的なもので、原則的に1回生に履修させる。特殊講義は専攻学生のため、特殊な問題につき教官が研究成果を講義するもので、学生に事実の知識を授けるとともに研究の範例を示すことを目的とする。一般的には普通講義を履修した2回生以上

の学生が聴講する。演習は主として卒業論文の作成に当たる3回生を対象に、専攻学生に任意の問題を研究させ、あるいは教官が出題して報告を提出させ、これを教官が指導批判して実地に研究方法を会得させる。すなわち学生には第1年度は哲・史・文の3学科に分属させるのみで、その専攻はいまだ分かたず、関係学科の知識を広く修得して他日専門研究に携わるべき基礎を固めさせ、第2年度は専攻科目を定めて研究方法を会得させ、第3年度はその専攻科目に関する研究に従事せしめて論文を提出させるのである。学年制こそ施行されていないが事実として学年制度であり、順を追って学問研究に進ませるための深い配慮がなされている。

このような教育体制において特に注目すべきは、1回生に学科所定の正科目全部の普通講義を必修させた点であろう。それは専攻を早く定めて偏狭に流れるよりは、関係諸学の知識を豊富にすることを目標としたからであり、今日においても深く省みるべき点を含んでいる。そのことはまた自由選択科目としての副科目を幅広く設けたことにも共通している。これもまた研究が早くから専門に偏する傾向を是正し、多角的な研究が行われることを期待したものにほかならない。

4. 研究施設

文科大学の学制が着々と整備されたのに対し、教室・研究室などの建物施設は粗末であった。当初明治39(1906)年に哲学科が発足した際には文科大学専属の建物はなく、わずかに旧本館(大正元年に焼失した理工科大学の建物)の一部(3室)を借用して当座をしのぐ始末であった。翌明治40(1907)年7月にようやく木造の1棟が、現在の法経本館と文学部本館との間の道路上にできあがり、明治41(1908)年10月には心理学実験室が、さらに明治42(1909)年春には木造2階建て1棟が落成して、ここに教室・研究室・事務室などを含む一応の建物ができあがった。このうち研究室は明治42(1909)年9月の研究室規程に趣旨が示されたごとく、教官に限らず学生にも平日は午後4時頃まで開放され、学生と教官の常時交流の場となった。この制度は内田教授の創意

に基づくものであるが、こうした研究室のあり方を通じて新しい学風が醸成され、また学生にとっては卒業後も思い出深いところとなったのである。

文科大学の施設としてさらに特筆されるべきは、その後明治44(1911)年10月に起工され、大正3(1914)年4月に落成を見た陳列館である。そもそも文科大学に陳列館を附置することは京都帝国大学創設時の構想に含まれており、したがって明治30年代に入ると関係品の蒐集も始められていたが、明治39(1906)年いよいよ文科大学が創設され、翌明治40(1907)年史学科が開設されると、この構想に文科大学の特色を表すべく、関係の各科の人々は直ちに活動を開始した。すなわち三浦周行講師による古文書の蒐集、濱田講師による考古学資料の蒐集、小川琢治教授の地理学関係資料の蒐集がそれであり、さらには内藤教授によって中国関係資料の増加も図られた。これらの資料は早くから設けられていた古文書室と地理学・美学美術史の両教室にそれぞれ臨時に分置されていたが、火災等の危険に備えた安全な保存施設の確保が急務となり、明治44(1911)年、図書館の北側に耐震耐火の2階建ての建物(煉瓦造り)が建設されることとなったのである。竣工なった陳列館には日本・東洋・西洋にわたる考古学・古美術関係の陳列室や古文書の収蔵室が設けられ、史学科の研究室も挙げてここに移った。蒐集資料の記録・整理・保存に加え、研究者の利用についても規程が設けられ、日本における最も整備されたこの種の研究の中心がここに誕生したのである。陳列館は昭和61(1986)年、4階建ての近代的な展示・収蔵施設の新築を機に、文学部博物館としてその面目を一新したが、当初の建物もなお博物館旧館として引き続き使用されており、往時の堂々たる姿を今に伝えている。

5.　学会・機関誌・出版物

明治40(1907)年2月の教育学会を皮切りに、各講座に関わる学会が相次いで発足したが、それらについては各講座の沿革を述べた後節に委ね、ここでは文科大学もしくは各学科の全体にわたるものについてのみ述べる。文科大学の代表的な学会は「京都文学会」である。これは明治43(1910)年2月、哲

学・史学・文学の研究を進める共通の場とし、かつそれらの普及を図る目的をもって組織されたもので、4月には機関誌として『芸文』が発刊された。『芸文』の名は『漢書・芸文志』からとったもので、広く時代の文化を表すとの意味を持っている。『芸文』は大正時代に入っても、引き続き各分野の研究を載せて本学の学風を代表したが、一方で次に述べる「史学研究会」「京都哲学会」の活動もあり、次第に当初意図された総合的色彩を失い、昭和6(1931)年5月、22年間にわたる偉大な使命を果たして終刊となった。

「京都文学会」より早く、史学科には開設まもない明治42(1909)年2月に「史学研究会」が発足し、大正5(1916)年11月、機関誌『史林』を発行して現在に至っている。この『史林』は史学科の講座構成を反映して、日本史・東洋史・西洋史のほか、人文地理学・考古学をも含む総合学術誌である点に大きな特色があるが、その点は平成4(1992)年、地理学講座が新設の文化行動学科に移行した後も変わらずに維持されている。また大正3(1914)年11月には哲学科を中心に「京都哲学会」が創立され、大正5(1916)年4月には機関誌『哲学研究』が発刊された。爾来80有余年、なお創刊当初の自由な創造的精神を貫いて今日に至っている。

その他『文科大学叢書』の刊行も、わが国斯学の研究に大きく寄与している。これは稀覯書の覆刻、図書の校勘などによって研究資料を広く学界に供給することを目的とするもので、まず第1巻として羽田亨(はねだ)講師による『大唐西域記』の校訂本が明治44(1911)年10月に刊行され、以後も研究資料として重要な書籍が数多くこの叢書中に収められて続刊されている。

第2項　旧制文学部時代

1. 大　正　期

大正8(1919)年2月、帝国大学令の改正によって従来の各分科大学はそれぞれ学部と改称され、わが文科大学も京都帝国大学文学部と称せられることになった。一方、わが国の産業・経済の発展を背景として第1次世界大戦の

頃から国民の間に高等教育に対する要望が高まり、それまで8校にすぎなかった高等学校に同年9月、新たに4校が加えられ、以後次々と新設されて、大正15(1926)年には官私立合計34の高等学校が並立するに至った。また高等学校令の改正とともに7年制高等学校案が初めて実施され、中学校第4学年終了をもって高等学校への入学の道が開かれる一方、大正10(1921)年3月には、それまで高等学校・大学を通じて9月新学年開始、翌年7月学年終了としていた学年制度が、4月新学年開始、3月終了に改められた(その結果、この時期に在学した学生はみな在学3年に満たず卒業することになった)。これは中学卒業後高等学校入学までの無用の期間を省き、修学年限を短縮しようとしたものであるが、これら一連の施策により、各大学とも収容学生の数が激増することとなった。文学部の入学者は大正の初年以来、本科・選科合わせて毎年60名内外であったが、大正11(1922)年以後年を逐って100名、140名、236名、304名、330名と飛躍的に増加し、大正15(1926)年には学部全体の在学生総数は700名を超えるに至った。文科大学から文学部への移行は何よりもこの学生数の増加によって特徴づけられる。

学生数激増の影響は直ちに施設の狭隘となって現れた。これよりさき史学科研究室が陳列館に移っていたことは先述したが、新たな事態はこれらの施設をもってしても如何ともしがたく、ついに大正12(1923)年から3カ年の継続事業として、哲学科・文学科の研究室や書庫・閲覧室に当てる鉄筋コンクリート造り2階建ての建物が新築された。また同時に陳列館についても東面(煉瓦造り)および東北隅部(鉄筋コンクリート造り)の増築が行われた。

このように学生数の増加は結果として研究施設の拡充をもたらしたのであるが、この時期にはまた講座においてもその一層の充実が図られた。すなわち大正8(1919)年の学制改革に際しては、6月に国語学国文学第2講座と支那語学支那文学第2講座が増設され、さらに大正11(1922)年5月には宗教学第2講座(基督教学)、大正15(1926)年6月には宗教学第3講座(仏教学)、また大正14(1925)年5月には西洋文学第3講座(仏蘭西文学)がそれぞれ増置された。その結果講座総数は30、骨格においてほぼ平成5(1993)年度現在と大

差ない規模が大正末期には備わることとなったのである。

2. 昭　和　期

昭和期の前半は、日本がいわゆる満州事変に始まる日中15年戦争、さらには太平洋戦争へと突入し、ついに敗戦に至るという未曾有の変転を経験した時期である。文学部もまたひとりこの国家的・社会的大変動の圏外にあることはできなかった。

この時期には文学部から相次いで総長が選出されているが、困難な時局の中で、国家権力を背景とする国家主義・軍国主義者たちの圧力によく抗し、戦時下の大学の組織・施設の拡充と伝統維持のために懸命に力を尽くしている。まず昭和8(1933)年3月、教授小西重直は学内の信望を得て文学部出身の最初の京都帝国大学総長に選出されたが、就任後まもない5月に京大事件、いわゆる瀧川事件――法学部教授瀧川幸辰の休職をめぐる事件――が起こった。昭和6(1931)年の満州事変後ますます盛んとなった国家主義・軍国主義は自由主義を排撃し、自由な学問研究を建学の精神とする京都大学もその攻撃の対象となったのである。事件の顚末については総説編あるいは法学部史に譲り、ここではふれないが、この事件は国家権力の横暴に対し、身職を賭して大学自治の伝統――大学における学問・研究の自由――を守ったものとして、その意義は高く評価されねばならない。難局に当たって総長小西は、瀧川に辞職を勧告したり、または休職の手続きを取ることには同意しがたいとして、一貫して文部当局の不当な要求を拒否し続けた。にもかかわらず文部省による瀧川の休職処分が発令されるに及び、法学部教授団は大学の自治を擁護すべく総辞職を決行し、小西もその具申が容れられなかったことを遺憾として辞職を決意したのである。

次いで昭和12(1937)年6月、本学部教授濱田耕作が総長に就任したが、7月の盧溝橋事件を皮切りに戦火が中国全土に拡大する中、昭和13(1938)年7月、総長濱田は現職のまま病没した。このとき文部大臣荒木貞夫は、これまで帝国大学において施行してきた総長の選挙方式は、天皇の官吏任免権を拘

束するものであることを名分として、総長の任免権を文部当局の手に収めんと図った。後にはさらに学部長、教授、助教授の候補者推薦に関しても同様のことが追加して要求された。たまたま総長選挙を目前にひかえた本学は、文学部長小島祐馬（おじますけま）・法学部長宮本英脩を連絡委員とし、他の5帝大との緊密な連携の下に文部当局の企図を挫折させ、国家権力の不当な圧力をはね返して大学自治の伝統を守った。この間本学連絡委員として超国家主義者たちの主張と戦った小島の心労は並大抵のものではなかったのである。かくて昭和13(1938)年11月、総長濱田の没後を受けて、本学部教授羽田亨が総長に選出された。羽田総長は昭和17(1942)年に再選され、昭和20(1945)年8月の敗戦後、11月に辞職するまで、困難な時代の大学の運営に力を尽くした。

一方、戦局は拡大長期化し、文部省は諸学校に報国隊を結成するように指示したため、本学もついに昭和16(1941)年9月、総長を隊長とする「京都帝国大学報国隊」を組織し、発足させた。これは一朝有事の際、防衛団として一定区域の防衛に当たることを目的としたものである。また同じ9月には、生産力・兵力の増強のため、学生の修学年限を3カ月間短縮し、12月卒業とすることが決定された。さらに12月、米・英を敵とする太平洋戦争への突入とともに、翌昭和17(1942)年の卒業は更に繰り上げて9月とすることが決定された。以後敗戦まで卒業は9月に行われ、学生は2年半の教育で戦時下の社会へ送り出されたのである。しかし昭和18(1943)年以降は、この不十分な期間さえもまったく維持できない情勢に追い込まれた。すなわち昭和18(1943)年10月2日、法文系学生の兵役徴集延期が停止され、いわゆる学徒出陣となったのである。これによって文学部の残留学生は在籍者数の3割ほどに激減したが、彼らとても学問のみに専念することは許されなかった。学徒勤労報国隊を組織して、あるときは海軍工廠に、またあるときは陸軍工廠に、さらにある者は耕地整理や道路の改修作業に教官付添のもとに出動して、生産増強の労働に従事させられた。敗戦に至る昭和期は、このように文学部にとっても困難を極めた時代であったが、この期にも組織・施設の拡充は見られる。特に日中戦争が泥沼化する昭和12(1937)年以前は大正末の情勢

を引き継ぎ、文学部の組織の上からは発展期に相当するといえ、昭和2(1927)年10月には哲学哲学史第5講座(西洋哲学史)が、昭和9(1934)年7月には西洋文学第4講座(英文学)がそれぞれ増置されている。施設面においても昭和4(1929)年に陳列館北面の増築が行われ、12月には中庭のある瀟洒な2階建ての建物が完成した。また昭和10(1935)年3月には本館の東面、昭和11(1936)年10月には同南面の増築が完了し、やはり中庭を持つ2階建ての本館が完成した。さらに昭和10(1935)年11月には本館の東側に3階建て鉄筋コンクリート造りの東教室の工事に着手し、昭和11(1936)年9月に竣工を見ている。

その後も昭和14(1939)年1月に西洋古典語学西洋古典文学が正科目に編入され、専攻学生を置くこととなり、翌昭和15(1940)年12月には全国の大学中唯一の伊太利語学伊太利文学が設置されるなど、若干の組織の拡充が見られた。また昭和12(1937)年12月には、国家主義興隆の時勢の下、日本精神史講座が設置せられたが、これは他の諸講座とは異なり、3学科共通の正科目として置かれ、文学部全学生の必修科目とされたのである。

第3項　新制文学部時代

昭和20(1945)年8月15日、日本の降伏をもって太平洋戦争は終結し、わが国はマッカーサーを司令官とする連合軍によって占領された。国内の天皇制的諸体制は一掃され、特に教育界に対しては、従来のわが教育制度を根底から変革する意図のもとに、同年10月GHQ(連合軍最高司令官総司令部)「日本教育制度ニ対スル管理政策」なる覚書が日本政府に手交された。この覚書に基づき文部省は、昭和21(1946)年5月「教職員の適格審査をする委員会に関する規程」を定め、文部省・各都道府県・大学に教職員の適格審査委員会を設けて審査を開始することを指示した。教育機関の関係者のうち、戦時中その言論や研究等を通じて国策に積極的に協力したとみなされる者の罷免を指令したのである。本学部でも適格審査委員会を設けてこの問題の処理に当た

ったが、若干名の教官は審査の条項に該当するものと判定されてその地位を去った。

1.　新制大学の設置

占領政策は教育行政の面にも大きな変容をもたらし、本学も昭和24(1949)年5月から新教育制度に則る新制大学に改組されることとなった(昭和22年に京都大学と改称)。ところが新制大学は旧制大学とはまったく異なる性格のもので、教養課程をかかえた4年制大学であったから、その切り替えは困難を極めた。大学の組織も教科課程も全面的に検討し直さなければならなかったが、本学部では昭和27(1952)年度に至って一応全課程の整備を完了した。なお新制大学の設置とともに問題となったのは、旧制大学の学生の処置であった。これは旧制高等学校との関連を考慮し、旧制の学生募集は昭和25(1950)年3月をもって打ち切られることとなった。したがって旧制学生は昭和28(1953)年3月ないし昭和29(1954)年3月に卒業させることとし、若干の残留学生は新制に編入して旧制は廃止された。

新制大学が開設されてからは、新制高校の激増とともに大学への入学志望者は急激に増し、従来のように各学部個別に入学試験を行うことができなくなったため、大学本部に入学試験委員会を設け、大学全体の問題としてこれを行うこととなった。しかし試験科目は外国語・国語・社会など大部分が文学部関係の学科であるため、本学部の多くの教官(特に史学科・文学科)はこの新制大学入学試験の出題・採点に動員され、新旧制下の学生の卒業論文の審査および口頭試問、大学院の修士論文の審査および口頭試問、大学院の入学試験が重なる学年末には、まったく多忙を極めることとなった。この点は近年に至っても何ら緩和されることなく、むしろ昭和54(1979)年の共通1次試験導入以来の入試制度改革の結果、学年末の行事日程はますます過密となり、さらに平成6(1994)年度からは課程博士の学位審査もそこに恒常的に加わってくるので、その多忙さはもはや物理的な限界を超えつつあるといってもよい状況である。

新制大学の設置に伴い、新制大学院も発足した。本学の新制大学院は昭和28(1953)年5月から発足し、文学部は文学研究科を設置した。文学研究科の組織は2年制の修士課程とその上に3年制の博士課程を置き、その専攻分野は次のとおりである(括弧内は専攻内の分科)。

哲学(哲学・倫理学・中国哲学史・印度哲学史・西洋哲学史)・宗教学(宗教学・仏教学・基督教学)・心理学・社会学・美学美術史・国史学・東洋史学・西洋史学・地理学・考古学・国語学国文学・中国語学中国文学・梵語学梵文学・フランス語学フランス文学・英語学英米文学・ドイツ語学ドイツ文学・言語学(言語学・西洋古典語学西洋古典文学・イタリア語学イタリア文学)

単位については、修士課程では専攻に属する科目16単位を必修し、ほかに指導教授の許可を得て14単位を自由選択し、計30単位以上を取得しなければならない。かつ研究論文を提出し、それが研究科会議を通過して修士の学位を授与される。博士課程は修士課程を修了した者がさらに研究を進めるために在籍する課程で、専攻に属する科目12単位を必修するほか、指導教授の許可を得て8単位を自由選択し、計20単位以上を修得しなければならないこととなっていた。博士課程を終えて研究論文を提出し、それが研究科会議を通過すれば、当該大学の名を冠した博士の学位を授与される。

以上のように規定の単位数の取得、研究論文の提出が義務付けられているところに新制大学院の1つの特色がある。文学研究科修士課程、博士課程の予算定員は昭和39(1964)年度まではそれぞれ70名、35名であったが、その後増員されて平成6(1994)年度現在ではそれぞれ94名、55名となっている。なお大学院のうち修士課程への入学に関しては、他大学からの志願者と同等の条件で入学試験を課し、博士課程への進学にも外部からの編入を認めているが、現在なお在学生の大部分は本学の出身者が占めている状況である。

2.　講座・学科の増設

旧制以来の講座はほとんどそのまま存続することを認められたが、教育学教授法講座は昭和24(1949)年に教育学部が新設されるや、同学部の第1講座

として昭和28(1953)年8月、本学部から教育学部に移管された。また当時の国策に沿って設置された日本精神史講座は、昭和21(1946)年3月、京都帝国大学令の改正により廃止された。

一方、戦後さらに哲学史第6講座(中世哲学)が昭和22(1947)年7月に増置されたのをはじめとして、その後現在に至るまでにいくつかの講座が増設され、講座組織は一段と整備された。平成元(1989)年度までに増設された講座を表示すれば以下のごとくである。

昭和29年8月	西洋古典語学西洋古典文学講座
昭和31年4月	美学美術史第2講座(美術史)
昭和35年4月	アメリカ文学講座
昭和41年4月	現代史学講座
昭和44年4月	西南アジア史学講座
昭和48年4月	心理学第2講座
昭和51年4月	比較社会学講座(大学院、客員)
昭和55年4月	フランス語学フランス文学第2講座
昭和61年4月	社会人間学講座
平成元年4月	地域環境学講座

さらに平成4(1992)年4月には第4学科として文化行動学科が新設され、哲学科から基礎心理学(旧心理学第1講座)、実験心理学(旧心理学第2講座)、社会学、社会人間学、比較社会学の計5講座、史学科から地理学、地域環境学の計2講座が移行したほか、新たに言語科学、科学哲学科学史の計2講座が増設された。ここに文学部は4学科計44講座(他に大学院講座1)の体制を整えるに至ったが、さらなる飛躍を期して学部改組の大規模な再編が計画され、平成7(1995)年度には1学科6系16大講座からなる新組織へと移行した。翌平成8(1996)年度からは大学院の組織もこれと呼応して再編される予定であるが、従来とは大きく異なる体制への船出であり、今後の試行錯誤も当然予想される。これら新組織の内実化が緊要の課題である。以下にその新たな学部組織を示しておくこととしよう。

表2-2　文学部人文学科組織図

系・大講座	分　　野
〔東洋文献文化学系〕	
国語学・国文学	国語学、国文学
中国語学・中国文学	中国語学、中国文学
東洋古典学	中国哲学史、サンスクリット語学サンスクリット文学、インド哲学史、仏教学
〔西洋文献文化学系〕	
西洋古典学	西洋古典学、古典文化学
ヨーロッパーアメリカ語学・ヨーロッパーアメリカ文学	スラブ語学スラブ文学、ドイツ語学ドイツ文学、英語学、英文学、アメリカ文学、フランス語学、フランス文学、イタリア語学イタリア文学
〔思想文化学系〕	
哲学・宗教学	哲学、西洋古代哲学史、西洋中世哲学史、西洋近世哲学史、倫理学、宗教学、キリスト教学、日本哲学史
美学・美術史学*	美学・芸術学、美術史学、比較芸術史学
〔歴史文化学系〕	
日本史学*	日本古代史、日本中世史、日本近世・近代史
東洋史学*	朝鮮史、中国古代・中世史、中国近世・近代史、内陸アジア史、西南アジア史学
西洋史学*	西洋古代史、西洋中世史、西洋近代史
考古学*	考古学、先史学
〔行動文化学系〕	
心理学*	基礎心理学、実験心理学、基礎行動学
言語学*	言語学、言語科学、行動言語学
社会学*	社会学、社会人間学、比較文化行動論、比較社会学(客員)
地理学*	地理学、地域環境学、環境動態論
〔現代文化学系〕	
現代文化学	科学哲学科学史、情報・史料学、二十世紀学、現代史学、現代日本論

注　*は実験講座、＿＿＿は新設分野。

3. 研究施設

本学部の建物は昭和11(1936)年に本館(2階建て)が完成し、続いて同じ年東館(3階建て)の第1期工事がなって以来、年とともに窮屈さを加えてきたが、戦時中のこととて増築は望み得べくもなかった。そのため新制大学開設後入学者が激増すると、たちまち狭隘となり、講義にも支障を来すようになった。しかし戦後の財政難のため、本館の増築は容易に実現しなかったが、歴代学部長の奔走・努力により、昭和39・40(1964・1965)年度に中庭を囲む4階建て東館(第1期工事の西側3階には1階継ぎ足し)が完成し、これまで陳列館にあった史学科の研究室も、考古学を除いて全部ここに移転することとなった。この東館中庭の造園費は本学部の同窓会である「以文会」の厚意によるものである。

ここに本館・東館2棟からなる文学部の建物がようやく整い、以後現在に至るのであるが、当初からなおも手狭であることに変わりはなく、その後の講座の増設もあって、時の経過とともに種々の不便を来すようになった。なかでも図書の増加は著しく、3学科各閲覧室の書庫の狭隘は深刻の度を加えた。一方、本館の老朽化が進み、特に文学科閲覧室や哲学科閲覧室のある西面(第1期工事)・北面(第2期工事)部分は築後60年以上を経て危険な状態にあったので、やむなく哲・史・文3閲覧室の図書の一部を梱包したまま大学の各所に預けることを余儀なくされた。

このような状態にあって、近年再び建物の増改築のことが焦眉の急となったのであるが、法・経・教育各学部との協議が整い、平成6(1994)年に文系4学部共同棟が文学部本館西側に完成、これを臨時の移転先として使用しながら、本館の改築が進められることとなった。完成時には鉄筋コンクリート造り一部8階建ての建物となり、旧来の3閲覧室もここに統合される予定であるが、あくまで改築にとどまり、改組に伴って教官数も増えるなか、絶対的なスペースの不足は一向に解消されそうもない。

一方、大正3(1914)年から昭和4(1929)年にかけて、数度の増築を経て完

成した陳列館(昭和30年、文部省より博物館相当施設に指定)も、早くからその老朽化が指摘され、貴重な収蔵史料の雨漏り等による破損が心配される状態にあった。したがってその改築のことは長年の懸案であったが、歴代学部長をはじめ関係者の努力により、ついに昭和61(1986)年、鉄筋コンクリート造り4階建ての近代的設備を持つ文学部博物館として装いを改めるに至った。新築なったのは同年6月、昭和62(1987)年秋には第1回の公開展示「日本の中の京都」が開催されたが、以後毎年春秋2期には関係研究室による特別展示が2階の展示室を使って行われ、大学の博物館による高度な研究成果を反映した展示として、常に高い評価を得ている。また特別展開催時には、1階展示室における常設展「日本古代文化の展開と東アジア」も併せて公開されている。ただその維持・運営に当たっては、1学部の予算・人員の範囲では困難な点も多く、その手当てが望まれるところである。なお博物館の新営に当たって旧陳列館の西面・北面部は取り壊されたが、南正面部と東面部は博物館旧館として、新館の東南側に寄り添うような形で存続し、今日も使用されている。新旧両建物の外観はよく調和し、そこに醸し出される清浄で学問的な雰囲気は、本部構内でも最も閑静な一画を形づくっているといえよう。

また昭和41(1966)年4月には、羽田亨の学問的業績を記念するため、羽田家に隣接する京都市北区大宮田尻町の地に羽田記念館(内陸アジア研究所)が開設された。同館は三島海雲記念財団と武田長兵衛の寄贈にかかるもので、以後文学部の附属施設として、北アジア、中央アジア、西アジアの歴史・民族・言語などに関する研究の振興に大きな役割を果たして今日に至っている。

4.　学会・機関誌・出版物

新制大学下の本学部において発刊された研究機関誌としては『京都大学文学部研究紀要』がある。昭和27(1952)年3月に第1冊が刊行され、以後平成6(1994)年3月までに33冊を数える。また学会としては、旧制以来の「史学研究会」「京都哲学会」が敗戦前後の混乱期をよく乗り越えて、その機関誌

である『史林』『哲学研究』とともに、ますます隆盛に赴きつつある。なお、これらの古い伝統を持つ学会・機関誌のほかに、戦後本学部の各研究室員を中心に多くの新しい学会・機関誌が始められるに至ったが、それらはいずれも本学部に直接関係する機関誌ではなく、かつ紙幅の都合もあるので割愛する。

次に戦後本学部から公刊された研究報告・資料などの出版物としては、『考古学資料叢刊』第3冊(唐鏡大観、梅原末治、1948年)、『考古学資料叢刊』第4冊(支那古玉図録、梅原末治、1955年)、『京都大学文学部陳列館考古図録新輯』(1951年)、『考古学叢書』第1冊(法隆寺建築綜観、浅野清、1953年)、『考古学叢書』第2冊(朝鮮磨製石剣の研究、有光教一、1959年)、『考古学叢書』第3冊(朝鮮櫛目文土器の研究、有光教一、1962年)、『博物館考古学資料目録』第1部(1960年)、『博物館考古学資料目録』第3部(1963年)、『博物館考古学資料目録』第2部(1967年)、『慶陵』Ⅰ・Ⅱ(田村実造、小林行雄、1953・1954年)、『明代満蒙史料』全18巻(田村実造編、1954～59年)、『明代満蒙史研究』(田村実造編、1963年)、『元史語彙集成』上中下(田村実造編、1961～63年)、『五體清文鑑訳解』上下(羽田記念館刊、田村実造・佐藤長・今西春秋共編、1966・1967年)などがあげられる。また昭和62(1987)年からは『博物館の古文書』が出版社の協力を得て刊行され、平成6(1994)年8月現在11輯に及んでいる。

5.　大学紛争と文学部

昭和45(1970)年の日米安保条約改定期をひかえ、昭和43(1968)年頃から学生運動が激化したが、それは単に政治的・党派的なものにとどまらず、大学の体質それ自体を問う運動として、多くの学生を巻き込み、全共闘運動はまたたくまに全国的広がりを見せるに至った。京都大学、そして文学部もその埒外にあることはできず、昭和44(1969)年1月16日には全寮闘争委員会を名乗る学生集団が学生部を封鎖、そのような事態を憂慮して出された同月19日付の文学部教授会の見解をめぐり、文学部でも2月3日に無期限ストに突

入、さらに3月13日にはL共闘によって文学部全館が封鎖されるに至った。この間、長尾雅人(がじん)学部長や教授会は学生に対して冷静な行動を呼びかける一方、提起された問題を深刻に受けとめ、教授会のあり方、その自治や運営への反省の上に立って文学部改革案検討委員会(第2委員会)を発足させ、あるべき大学像を目指して具体的な改革に取り組んだが、事態は好転せず、昭和44(1969)年度の大学院修士課程入学試験は4月9日、10日の両日、学外に会場を確保して行われるという異常な事態となった。文学部建物の封鎖は結局9月21日、京都大学に機動隊が導入されるまで続いたが、この間文学部の教育・研究機能は麻痺し、建物施設も荒廃した。11月7日からは授業も再開されたが、平常な事態への回復は一朝にしてならず、その後も数年にわたって一部学生による学部長室の占拠や、いわゆる「無期限スト」などが繰り返された。

このように文学部のかぶった大学紛争の波も甚だ大きいものがあったが、その中で大学の体質の改革が真剣に模索されたことは重要である。文学部では紛争のさなか「文学部改革草案」が作成されたが、大学自治を堅持し、そのあり方を不断に問い続けようとする精神は今後にも生かされていかねばならない。なお紛争の過程で大学院の単位制度は、修士課程が先述したところから「修士課程に必要な30単位のうち、各専攻に属する科目12単位は、必修とし、その他の単位は、自由選択とすることができる」へ、博士課程のそれは「博士課程に必要な20単位のうち、各専攻に属する科目8単位は、必修とし、その他の単位は自由選択とすることができる」へと改められたが、その後昭和52(1977)年度から博士課程が博士後期課程と改称されたのに伴い、同課程の単位制は廃止されて今日に至っている。

第2節　各講座の歴史

第1項　哲　学　科

1. 哲　　学

本講座は明治39(1906)年9月に、文科大学創設とともに開設され、初代の担任教授桑木嚴翼(1874～1946)は、哲学概論と西洋哲学史を講じた。明治45(1912)年第4講座の増設に伴って、哲学と哲学史の講座は分離したが、しかしその後も、哲学研究と西洋哲学史研究は研究方法および内容に関して、今日に至るまで常に密接な関係を持ち続けている。哲学史研究に裏づけられた哲学諸問題の探究というこのあり方は、本講座90年の歴史を通じて見出される著しい特色であるといえる。

桑木は開設の翌年の明治40(1907)年欧州に留学し、同年7月に朝永三十郎(1871～1951)が助教授として着任、西洋哲学史を講じた。明治42(1909)年には桑木が帰国し、代わって朝永が3年間ドイツに留学することになった。さらに、明治43(1910)年8月に、西田幾多郎(1870～1945)が倫理学講座所属の助教授として来任し、以後哲学概論と倫理学とを兼ねて担当した。西田は大正2(1913)年8月に宗教学講座担当教授となったが、翌大正3(1914)年桑木が東大に転任し、同年西田が本講座の担当教授となった。桑木の研究はカントおよび新カント派の思想を中心としたものであったが、西田は西洋哲学の概念や理論を用いて東洋的な思想を表現することに努め、特に「自覚における直観と反省」(1917年)と題された特殊講義の頃から、後に西田哲学と呼ばれるようになった独自の哲学思想を構築、発表していった。西田の退官は昭和3(1928)年9月であり、その最後の特殊講義は「哲学の究極的問題解決の

一企図」であった。

西田退官の前年、昭和2(1927)年11月に、助教授田邊元(1885～1962、大正8〈1919〉年8月着任)が教授に昇任し、本講座を担当することになった。田邊は行為的弁証法の論理を用いて心身関係、歴史、絶対知など幅広い主題を論じたが、同時に科学哲学の分野でも独自の業績を残した。田邊の退官は昭和20(1945)年3月、その最後の講義は「懺悔道」であった。田邊時代からはまた、諸講師に専門分野の研究講義を依頼することも行われるようになった。

第2次世界大戦後今日までの間に、本講座が迎えた主任教授は6代にのぼる。以下順に記すと、まず、昭和21(1946)年3月に、助教授高山岩男(1905～93、昭和13〈1938〉年着任)が教授に昇任した。高山は西田哲学を継承するいわゆる京都学派の代表者の1人であったが、戦争の遂行に積極的に協力したとして、同年8月に退官し、代わって教授山内得立(とくりゅう)(1890～1982)が哲学哲学史第5講座(西洋哲学史)から転じ、本講座担任となった。山内は昭和28(1953)年4月退官、翌昭和29(1954)年4月に東北大学より教授三宅剛一(1895～1982)を迎えた。三宅は昭和33(1958)年1月に退官し、同年3月には教授野田又夫(1910～)が哲学哲学史第4講座から本講座に転じた。野田は昭和49(1974)年3月に退官したが、同年10月には同じく第4講座より、教授辻村公一(1922～)が本講座に転じた。辻村の退官は昭和60(1985)年3月、昭和63(1988)年4月に助教授木曽好能(よしのぶ)(昭和48〈1973〉年12月着任)が教授に昇任し、現在に至っている。なお平成3(1991)年4月には、伊藤邦武が助教授に着任している。

これら戦後6代の教授のもとで行われた講義、研究は極めて多岐にわたっている。山内はギリシア哲学を専門とするかたわら、現代の現象学にも通じ、論理の問題を包括的に論じた(主著『ギリシアの哲学』1944～47年、『ロゴスとレンマ』1975年)。三宅は山内と同じくフライブルク大学において学んだ現象学的考察を基調としつつ、「歴史的存在論」「人間存在論」等を講じた(主著『人間存在論』1966年、『学の形成と自然的世界』1973年)。一方、野田は西洋近世哲学史全体に関する広範かつ卓越した理解を基礎に、論理学や科学

についての最新の知識を導入して、視野の広い合理主義に立脚した哲学研究の成果を示した(主著『野田又夫著作集』全5巻1981～82年)。また辻村は特にドイツ観念論とハイデガーの思想を専門とし、同時にこれらの思想と東洋の思想との対話あるいは対決を目指すという独自な研究を行った(主著『ハイデッガー論攷』1971年、『ハイデッガーの思索』1991年)。木曾はイギリス経験論の厳密な解釈を提示するとともに、現代の記号論理学の成果を駆使して、認識論と存在論双方の諸問題についての明晰な分析を行った。伊藤はプラグマティズムと分析哲学を専門にしている。

第2次大戦後の本講座の研究はこのように幅広く多様な分野にわたるため、この50年間の成果の中に、戦前の京都学派のような比較的まとまった1つの思潮を見出すことはできない。しかし、このことは一方で、現代の世界の哲学研究の非常に多様なあり方を本講座もまた具体的に体現していることを意味するとともに、他方で、より客観的かつ厳密な哲学史の知識に裏打ちされ、より自己批判的な方法意識に基づいた哲学探究のあり方が重視されている、ということを意味しているともいえる。本講座では昭和22(1947)年以来ギリシア語、ラテン語の習得が必須とされており、また昭和26(1951)年以降わが国としてはいちはやく記号論理学の講義を基本的講義の1つに加えて今日に至っている。これらの基礎的な教育に加えて、歴代の教授によるドイツ、フランス、イギリス、アメリカ等の近現代の哲学に関する本格的な分析ならびに対話、および多数の専門家による特殊講義に接することを通じて、学部学生の教育および大学院生の独創的な研究の育成、指導がなされてきており、その成果は卒業論文、あるいは大学院生を主体とした研究誌『哲学論叢』(1974年発刊、哲学哲学史第4講座と共同で編集)の発表論文によってうかがうことができる。

また本講座の大学院を修了した後に様々な海外の大学院に留学する学生の数は多く、同時に、海外から本講座に、特定の日本思想家に限らず広く哲学一般の研究を求めて留学してくる学生も近年ますます多くなっている。このことは本講座が世界の哲学研究の一翼を担ったものであることを示している

であろう。

本講座が関係する学会には「京都哲学会」「関西哲学会」「日本哲学会」等があり、それぞれに対して本講座はこれまで多くの貢献をなしてきている。山内は在任中「関西哲学会」の結成に努力し、その初代委員長を務め、野田も長く同学会の委員長を務めた。また三宅は「日本哲学会」の委員長を務めている。「京都哲学会」は大正5(1916)年以来本学部哲学科を母体として今日に至っているが、その機関誌『哲学研究』には本講座の歴代教授の代表的な論文が掲載されてきた。さらに、海外の学会との交流も一貫して活発であり、昭和28(1953)年ブリュッセルにおける第11回国際哲学会への日本代表としての野田の参加をはじめとして、本講座教授の国際学会出席の例は数多い。また野田、辻村は国際学術雑誌の編集顧問を務めており、辻村は日本学士院会員、国際哲学協会正会員(フランス)でもある。他方、本講座において講義ないし講演を行った外国人学者は枚挙にいとまがなく、その国籍、テーマともに多様である。

2.　西洋哲学史

西洋哲学史講座の歴史は、正式には明治45(1912)年5月、哲学哲学史第4講座の開設とともに始まったと見ることができる。しかしまず、そこに至るまでのいわば前史にふれておかねばならない。明治39(1906)年の文科大学開設以来、西洋哲学史は哲学科の正科目の1つとして哲学哲学史第1講座において講ぜられることになり、教授桑木嚴翼と助教授朝永三十郎が6年間にわたり西洋哲学史の講義、演習を互いに交代しつつ担当した。このことは、哲学といえば通常は西洋哲学を意味し、しかも哲学研究と哲学史研究は内容的にも方法上も常に密接な関係と交流を持つという、この学問の独自性を考慮し反映したものと思われるが、こうした理解は、哲学と哲学史が講座として分離した後も、現在に至るまで基本的には変わっていない。

さて上述のように、明治45(1912)年5月哲学哲学史第4講座が、哲学哲学史第2講座(印度哲学史)、哲学哲学史第3講座(支那哲学史)に次ぐものとし

て開設され、これによって西洋哲学史は、哲学の体系的研究を主とする第1講座に対して、その歴史的研究を主眼とする独立の講座を持つこととなった。大正2(1913)年1月、朝永が教授に昇任してこの講座の担任となり、西洋哲学史はここで講じられた。朝永の同講座への在任は昭和6(1931)年3月まで18年に及んだが、その間同講座の整備充実に努め、講義において広く近世哲学史の、とりわけデカルトやドイツ観念論の研究を進めるとともに、『近世に於ける我の自覚史』(1916年)をはじめとする数多くの著作によって声価を高めた。その明晰な講論と温厚篤実な人格は、今日まで本講座の学風と伝統に影響を与えている。朝永の退官後、大正15(1926)年以来助教授として朝永を助けていた天野貞祐(1884～1980)が、昭和6(1931)年3月教授に昇任し、同講座を担任した。天野の講義と研究はドイツ観念論、ことにカント哲学に集中され、多くの業績を残したが、昭和10(1935)年3月に倫理学講座に転じたので、その後の詳細は倫理学講座の記述に譲る。

他方それに先立って、昭和2(1927)年には、哲学哲学史第5講座が西洋哲学史の第2番目の講座(古代中世哲学史)として増設された。最初しばらくは西田幾多郎が兼担したが、昭和4(1929)年4月に山内得立(1890～1982)が講師として来任し、昭和6(1931)年4月からは教授に昇任しこれを担任した。山内の同講座への在任は、昭和22(1947)年哲学哲学史第1講座に転ずるまで及んだが、その間ギリシア哲学の諸問題、特に論理的な問題を講じるとともに、トマスを中心として中世哲学をも論講した。その成果は、代表作『ギリシアの哲学』(1944～47年)ほか、数々の著述となって表れた。

一方第4講座は、昭和4(1929)年4月講師として来任し、昭和8(1933)年3月助教授となっていた九鬼周造(1888～1941)が、昭和10(1935)年3月教授に昇任し、天野の後を受けてこれを担任し、近世哲学史を講じた。九鬼はそれまで比較的閑却されていたフランス哲学の研究に精力を傾注するとともに、現代哲学の紹介にも尽力し、その成果は『偶然性の問題』(1935年)、『人間と実存』(1939年)などに残された。しかし不幸にも、九鬼は昭和16(1941)年5月、病によって急逝した。第4講座は一時山内が兼担したが、昭

和17(1942)年4月からは人文科学研究所教授の高坂正顕が授業担当し、この体制は太平洋戦争末期から戦後にかけて続けられた。その緊迫と混乱の中、昭和22(1947)年いわゆる教職追放事件が生じ、本学部の陣容も少なからぬ変動を余儀なくされた。結局、山内は哲学哲学史第1講座に転ずることになり、高坂は辞職した。

こうして本講座は大きな転換の時期を迎えたが、昭和22(1947)年、陣容も一新して、戦後の新たな出発をすることになった。まず同年5月、野田又夫(1910～)が大阪高等学校より助教授として迎えられ、第4講座(近世哲学史)を担任し、次いで7月には田中美知太郎(1902～85)が東京文理科大学より助教授として来任し、第5講座(古代哲学史)を担任、さらに同年7月に新たに増設された第6講座(中世哲学史)には、広島大学より高田三郎(1902～94)が助教授として着任し、これを担任した。かくして本講座は、3講座がそれぞれ古代・中世・近世という哲学史上の3つの時代区分に対応して分担するという、他に例を見ない充実した体制を確立した。ことに古代哲学史と中世哲学史がそれぞれ独立の講座を持ったことは、同時にギリシア、ラテンの両古典語が必須科目とされたことと相まって、従来不十分であったこの方面の研究を充実させ、戦前とは異なる特色を本講座の全体にもたらしてきた。なおこれら3講座は、昭和38(1963)年以降、それぞれ時代順に哲学哲学史第2講座(古代哲学史、もと第5講座)、哲学哲学史第3講座(中世哲学史、もと第6講座)、哲学哲学史第4講座(近世哲学史)と改称され、現在に至っている(以下、改称後の講座名を用いる)。

さて第2講座(古代哲学史講座)は、田中が昭和25(1950)年2月に教授に昇任して担任した。田中は古代哲学史の講義のほか、研究講義においてプラトン、アリストテレス哲学の諸問題、ギリシア精神史の諸問題を講じ、また演習にもプラトン、アリストテレスを中心とするギリシア哲学の諸著作のほか、広くギリシア悲劇や歴史の古典をテクストに用いた。その際、原典の分析・解釈に文献学的厳密さを期することが求められたが、この態度は他の2講座にも共通するところであった。田中はまた「関西哲学会」「日本西洋古

典学会」の委員長として学会の発展に貢献し、昭和40(1965)年3月停年退官した。その広範な分野に及ぶ業績は、『ロゴスとイデア』(1948年)、『プラトン』全4冊(1979～84年)をはじめとして、『田中美知太郎全集』全26巻として残されており、昭和53(1978)年にはその大きな功績に対して文化勲章が贈られた。

次に第3講座(中世哲学史講座)は、昭和25(1950)年2月教授に昇任した高田が担任し、その整備充実に努めた。高田は中世哲学史の講義のほか、中世哲学上の主要思想家と主要問題について詳細かつ緻密な研究講義を行い、また演習にはアウグスティヌス、トマス、オッカム、スコトゥスらの著作が取り上げられた。その業績はアリストテレス『ニコマコス倫理学』の邦訳(1938年)などのほか、特にトマスの大著『神学大全』の翻訳の事業が彼の指導のもとに始められ、現在もその刊行が続けられている。高田はまた長らく「中世哲学会」の常任委員を務めるなど、わが国における中世哲学研究に指導的な役割を果たし、その間、昭和29(1954)年8月から2年間は文学部長としても尽力し、昭和41(1966)年3月に停年退官した。

さらに第4講座(近世哲学史講座)は、既に助教授として着任していた野田が、昭和28(1953)年7月教授に昇任して担任し、近世哲学史の講義のほか、デカルトをはじめとするフランス哲学、さらにライプニッツやドイツ観念論に関する研究講義を行い、演習では広くフランス・イギリス・ドイツの古典的なテクストを用いた。昭和33(1958)年3月、野田は哲学哲学史第1講座に転じたが、近世哲学史の講義は引き続き担当した。野田の業績およびその後の詳細は、哲学講座の記述に譲る。

野田の転じた後昭和33(1958)年3月よりは、代わって宗教学第1講座より教授西谷啓治(1900～90)が転じ、第4講座を担任した。西谷に関する詳細も宗教学講座の記述に委ねるが、第4講座担任後は、研究講義において「無神論の問題」「近世哲学における神の問題」等を講じ、演習ではキェルケゴール、ハイデッガーの著作を読むとともに、「西田哲学研究」において西田哲学に関して深い究明を行った。西谷は昭和38(1963)年2月に停年退官した

が、同年からは「関西哲学会」の委員長を務め、昭和57(1982)年には多年の学問的功績のゆえに文化功労者に選ばれた。

以上のように、西谷、田中、高田ら3教授の相次いでの退官により、ここに本講座も世代交代して、それぞれ後を受けた3名の助教授によって継承されることになる。まず第2講座は、藤沢令夫(1925～)が昭和38(1963)年4月九州大学より助教授として来任し、田中を助けていたが、昭和44(1969)年1月教授に昇任し、これを担任することになった。藤沢は昭和39(1964)年度から古代哲学史の講義を担当するとともに、研究講義においてはプラトン、アリストテレスを中心に、古代哲学の基礎的問題を幅広く究明し、演習でもプラトン、アリストテレス、ルクレティウスを取り上げた。その業績は、『イデアと世界――哲学の基本問題』(1980年)ほかの数々の著作や翻訳として現れているが、ことに先任者田中との共同編集による『プラトン全集』全15巻および別巻(1974～77年)の刊行は、重要な成果である。藤沢は昭和49(1974)年から2年間、極めて困難な時期に文学部長の大任を果たし、平成元(1989)年3月停年退官したが、既に昭和61(1986)年より「日本西洋古典学会」「関西哲学会」の、さらに翌昭和62(1987)年からは「日本哲学会」の委員長を務め、現在もなお学界の指導的な役割を担っている。

次に第3講座は、山田晶(1922～)が昭和40(1965)年10月大阪市立大学より助教授として着任し、高田の退官後昭和41(1966)年度より中世哲学史の講義を行い、昭和43(1968)年8月には教授に昇任して、これを担任した。山田は研究講義においては、長年「創造の問題」を多面的に講じ、中世哲学の根本問題を幅広く探究するとともに、演習でもアウグスティヌスやトマスの諸著作を丹念に読んだ。山田の業績としては、アウグスティヌスやトマスの諸思想を論じた浩瀚な『中世哲学研究』4部作(1977～86年)のほか、アウグスティヌスやトマスの主要著作の翻訳がある。山田は昭和51(1976)年には文学部長をも務め、昭和60(1985)年3月に停年退官したが、その前後にかけて「中世哲学会」の委員長を務め、現在もわが国の中世哲学研究における指導的地位を占めている。

さらに第4講座は、西谷の退官に先立って昭和37(1962)年10月教養部より転じて助教授となった辻村公一(1922～)が、昭和38(1963)年度より野田に代わって近世哲学史の講義を行い、昭和42(1967)年5月には教授に昇任して、同講座の担任となった。辻村は研究講義において「近世における有の問題」「技術の本質への問」「ニヒリズム」等のテーマのもとに近世から現代にかけての哲学的基礎問題を講じ、また演習ではライプニッツ、カント、ヘーゲルらを読んだ。辻村は昭和49(1974)年、野田の退官の後を受けて哲学哲学史第1講座に転じたので、その後の詳細は哲学講座に譲るが、その業績はドイツ哲学、特にハイデッガーの研究者として知られ、『ハイデッガー論攷』(1971年)をはじめとする著作のほか、辻村を代表編集者として現在刊行中の『ハイデッガー全集』がある。

辻村は、第1講座に転じた後もしばらく第4講座を兼担したが、昭和50(1975)年10月、酒井修(1925～)が教養部より転じて教授に着任し、辻村の後を受けて第4講座の担任となった。酒井は昭和51(1976)年度より近世哲学史の講義を行うとともに、研究講義では「歴史的世界」「解釈学」「弁証法」等の近現代哲学の根本問題を様々な連関から論じ、また演習ではライプニッツ、カント、ヘーゲルらの主要著作を読んだ。酒井の業績は近現代哲学の広い範囲に及ぶが、特にヘーゲル哲学研究の諸論文が重要である。酒井は平成元(1989)年3月停年退官した。

さて本講座は、昭和60(1985)年から平成元(1989)年にかけての以上3教授の順次の退官によって、再び世代交代の時期を迎えた。それぞれの教授の退官に先立って、まず昭和59(1984)年4月、山本耕平が奈良女子大学より助教授として着任し、次いで昭和63(1988)年4月内山勝利が関西大学より、さらに同年10月、大阪市立大学より薗田坦がそれぞれ助教授として来任した。現在に至るその後の経過について、再び講座順に見ておく。

まず第2講座は、藤沢の後を受けて内山が昭和63(1988)年度より古代哲学史の講義を担当し、平成5(1993)年4月より教授に昇任して、同講座を担任している。内山は研究講義において、プラトン、アリストテレスのみなら

ず、前ソクラテス期のギリシア思想の研究にも精力を注ぎ、また演習ではプラトン、アリストテレスの主要著作を取り上げている。その方面の論文も多く、現在も狭義のギリシア古典期のみならず、初期ギリシアの思想や精神史にも強い関心を向けている。

次に第3講座は、山田の後を受けて山本が昭和60(1985)年度より中世哲学史の講義を行い、平成4(1992)年4月より教授となって同講座を担任している。山本は研究講義で「形而上学の諸問題」を講じ、演習においては特にトマスの主要著作を精力的に読んでいる。その専門分野はトマスを中心とする中世哲学の諸思想であり、それらに関する諸論文やトマスの新訳などが業績としてあげられる。

最後に第4講座は、酒井の退官後、薗田が平成元(1989)年度より近世哲学史の講義を行い、同年11月よりは教授として同講座を担任している。薗田の関心は主にルネサンス期思想および近世ドイツ哲学に向けられているが、研究講義ではクザーヌスや、近世初頭の自然哲学や自然科学の思想を論じ、また演習ではカントを継続的に読んでいる。『〈無限〉の思惟――クザーヌス研究』(1987年)のほか、いくつかの翻訳がその成果としてあげられる。

以上が、西洋哲学史講座の創設時より現在にまで至る経過の、ほぼ時代にそった概観である。既述のごとく、当初は1講座から出発し、後、順次に増設されて3講座となり(その間、講座名称の変更による整備が行われ)、哲学史上の古代・中世・近世をそれぞれ分担する充実した体制を保持しつつ現在に至っている。しかしまた3講座は常に相互に緊密な連携を取り合い、研究上また運営上でも互いの協力によって極めて有益かつ有効な交流が図られている。なお、先には専任担当教官の講義についてのみ述べたが、講義はこのほか毎年学外からも10名前後の講師に委嘱し、広範な哲学史の諸時代、諸分野をできるだけ覆うように努めている。

学生に関していえば、ここ20年来の状況を見る限り、学生数は必ずしも多いとはいえないが、いずれも高度な原典研究を着実に積み重ねる必要のあるところから、大学院に進学して研究を継続する者が大部分である。したがっ

て、将来的に哲学・哲学史関係の専門研究者として大学等に奉職する者の数も多い。

先にも述べたように、本講座はその出発の当初より常に哲学講座と密接な関係と交流を保ち、学会活動においても「日本哲学会」「関西哲学会」「日本西洋古典学会」「中世哲学会」等に共同して参加しているが、他方、本講座内においても、各講座を母体とする研究会が形成され、それぞれ熱心な研究活動が行われている。またそれらによって研究を推進するための研究雑誌として、第2講座を母体とする古代哲学会では『古代哲学研究 methodos』が、第3講座では京大中世哲学研究会により『中世哲学研究 veritas』が刊行されており、第4講座を母体とする京大・西洋近世哲学史懇話会でも近々刊行の準備が進められている。

西洋哲学史講座は、これまでの歴代の諸教授によって確立された基礎と伝統を着実に踏まえつつも、年々増加する外国人研究者との交流を通じて、国際的な視野を持つ研究展開への意欲を持ってさらに前進しようとしている。

3.　インド哲学史

本講座は明治39(1906)年文科大学開設と同時に設置され、開設委員であった松本文三郎(1869～1944)が教授となり本講座を担当した。大正15(1926)年に宗教学第3講座(仏教学)が創設されるまでは、仏教学も本講座において併せ講ぜられた。

松本は教義学的傾向の強い在来の仏教学を、厳密な史料批判を媒介とする近代の学問へと発展させた。『仏典の研究』(1914年)、『仏教史論』(1929年)など数多くの著書や、敦煌出土古写経に関する諸論文には、彼の透徹した史的識見、精緻な方法論が実証されている。経論成立の由来、思想教理の展開過程、仏教伝播史その他、彼の講義論述する主題は多岐にわたり、主として中国・西域の仏教史に関する諸問題を鋭く解明すると同時に、インド・日本の仏教にもその考察は及んだ。彼は常に仏教史学者としての学的態度を堅持しつつ、また仏教の哲学的教理を深く究明し、仏教以外のインド思想一般に

も絶えず関心を寄せて、希少ながら現存する漢訳文献や欧米学者の著作を講読して学生を啓発した。さらに仏教の本質を芸術的表現の中に追究して『印度の仏教美術』(1926年)等を著し、東洋文化の淵源の究明に努めつつギリシア・ローマ、エジプト文明にまで論及するなど、その豊かな学殖と卓れた識見によって本講座の基礎を築いた。

松本退官の昭和4(1929)年に本田義英(1888～1953)が講師となり、昭和9(1934)年に助教授、昭和10(1935)年には教授に昇任して本講座を担任した。欧米におけるインド古典文献の研究は、その頃既に1世紀半の歴史を閲して、各分野に目覚ましい成果をあげており、わが国のインド学も原典研究の方向に進んでいた。かかる内外学界の進展に応じて本田は梵語原典を演習に用い、インド思想の主潮流について講義した。彼はインド学的方法を強調し、仏典の研究にもインドの風土や伝統的思想・信仰・慣習が常に考慮に入れられるべきことを『仏典の内相と外相』(1935年)所収の諸論文に明示した。先に大正14(1925)年から昭和3(1928)年にかけてフランス・イギリス・ドイツ・インドに留学し、多くの史料を蒐集して帰国したが、その後も特に法華経写本の蒐集に努めた。その成果の一部は本田退官の際に『西域出土梵本法華経』(1949年)として公刊され、彼が在任中専心した法華経のインド学的研究は『法華経論』(1944年)に結実した。なお、本田は昭和18(1943)年印度文化研究所を創設し、研究会その他の事業を通じてインド学の発展に尽力した。

昭和23(1948)年本田退官の後松尾義海(1909～89)が助教授となり、昭和28(1953)年教授に昇任し本講座を担任した。わが国のインド学界にも漸次諸体系の詳細な研究が行われるようになったが、松尾は古典期の哲学諸派の学説を研究するためにはインド論理学の解明が不可欠の要件であることをつとに自覚し、インド古典論理学の体系を樹立したニヤーヤ学派の研究に専念した。昭和23(1948)年には、13世紀頃の学者ケーシャヴァミシュラの論理学綱要書『タルカ・バーシャー』を和訳し、それに学説史的観点から詳しい注記をほどこした『印度論理学の構造』(1948年)を公刊し、また、『印度の論理

学』(1947年)と題する概説書を著した。これらは、その後のわが国におけるインドの認識論・論理学研究の著しい発展を端緒づけるものであったが、その中でもとりわけ『印度論理学の構造』は、インド論理学説に関する要を得た解説として高く評価され、現在においても価値はいささかも減じていない。また彼は、『哲学研究』等の誌上に発表した論文において、論理学が真知を得るための実践としてのヨーガと密接な関連を持つことを明らかにし、以上の研究成果を総合した『印度論理学の研究』によって、昭和25(1950)年に文学博士の学位を授与された。

昭和36(1961)年には服部正明(1924～)が助教授となり、昭和48(1973)年に教授となって本講座を担当した。服部の研究はインド古典の諸分野にわたるが、特に認識論・意味論を中心とする古典期哲学体系の研究において優れた業績がある。研究の方法は、文献を土着の注釈に従って精密に解釈し、広範囲にわたる関連資料を併用しながら、哲学的宗教的概念の展開過程をたどり、著者・著作を思想史的に位置づけることを主とするもので、この方法による研究成果の代表的なものとして、ハーヴァード大学出版部から刊行された著書“Dignāga on Perception”(1968)がある。これは原典が散逸して現存しないディグナーガの『知識論集成』第1章(認識論)を、関連資料から蒐集した梵文断片およびチベット語訳によって再構成しつつ英訳し、文献学的・思想史的観点から詳しい注をほどこしたもので、国際的に高い評価を得ている。また、著書『認識と超越〈唯識〉』(1970年)、『古代インドの神秘思想』(1979年)ほかに見られるように、大乗仏教の唯識思想やインド思想の源流であるウパニシャッドなどに関しても彼の造詣は深く、その門下からはインド思想史の様々な分野を専門とする研究者が多数輩出した。彼はまた昭和50(1975)年以来、“Journal of Indian Philosophy”(Dordrecht, Holland)の編集顧問を務めるかたわら、海外の主要な諸大学に客員教授として招聘され、平成2(1990)年秋には紫綬褒章を授与された。服部の時代に本講座は、梵語学梵文学、仏教学講座との連携のもとに、特に論理学・認識論の分野で国際学界をリードするまでになった。彼はまた、昭和56(1981)年にインド思想史

研究会を組織し『インド思想史研究』を発行してきたが、平成5(1993)年にこの研究会を「インド思想史学会」へと発展的に解消し、わが国のインド思想史研究の発展のために努力しつつある。

昭和61(1986)年には徳永宗雄が助教授に就任、平成3(1991)年に教授に昇任して現在本講座を担当している。徳永は古代インドの神話・伝説、ならびに、主としてこれらのテーマを扱う叙事詩等の文献の研究を専門とし、昭和54(1979)年にはリグヴェーダの神話・伝説を注解した『ブリハッド・デーヴァター』の研究により、ハーヴァード大学から学位を取得した。本講座に着任して後は『ブリハッド・デーヴァター』の研究を継続し、叙事詩・医学文献などに見られる哲学思想を扱うとともに、コンピューターを用いた叙事詩文献の韻律分析などにも取り組んでいる。

講座創設以来平成5(1993)年度現在まで専攻生(学部)の数は137名を数える。初期には仏教学を修めるものが多かったが、仏教学が独立講座となってからはインド哲学・宗教を専門とするものが増え、インド正統派諸思想の文献実証的研究が主流となっている。近年、国際的にインド思想史研究の領域が拡大しつつあるのに呼応して、本講座でも、神話・伝説、祭式、自然科学の分野も含む広い意味の思想史研究が比重を増しつつある。学部卒業生の大半は大学院に進学するが、一般企業等に就職する者も最近では珍しくない。

4.　中国哲学史

明治42(1909)年5月に哲学哲学史第3講座(支那哲学史)として開設された本講座は、現在では、哲学哲学史第6講座(中国哲学史)となっている。

文科大学における中国哲学史関係の講義は、本講座開設以前より、支那語学・支那文学講座の教授狩野直喜(1868～1947)によって行われていた。明治40(1907)年、助教授高瀬武次郎(1868～1950)が最初の専任担当者として来任、高瀬は大正4(1915)年教授となり、昭和4(1929)年に退官した。狩野が、清朝考証学を継承した文献実証をその本領としたのに対し、高瀬は、宋明の哲学を主に考究した。

本講座の特徴の形成に大きな足跡を印した小島祐馬(1881～1966)は、大正11(1922)年助教授に就任、昭和6(1931)年教授となり、昭和16(1941)年退官した。小島は、考証学的方法に併せて、フランス社会学を摂取し、社会科学的観点に立つ中国思想史研究の学風を興した。大正9(1920)年、雑誌『支那学』の創刊に当たっては、本田成之・青木正兒と共に、その中心であった。小島はまた、文学部長や人文科学研究所(現人文科学研究所の前身の1つ)の所長を歴任したが、特に、昭和13(1938)年、文相荒木貞夫が帝国大学から人事権を奪おうとした「荒木改革」問題に対処して、大学自治の擁護に寄与すること多大であった。小島が、新年講書始めでの漢書進講を嘱されることがなかったのは、河上肇との交友などが因をなしたのであろうといわれるが、それは、「名誉」となるべき話柄であろう。小島は、後、日本学士院会員に推され、昭和41(1966)年没した。生前の著書に『古代支那研究』(1943年)、『中国の革命思想』(1950年)等、没後刊行されたものに『中国の社会思想』(1967年)、『中国思想史』(1968年)等がある。

小島の門下より出てその後継者となった重澤俊郎(1906～90)は、昭和17(1942)年に第三高等学校から助教授として来任、昭和25(1950)年教授となり、昭和45(1970)年退官した。重澤の主たる研究領域ははじめ先秦・漢代の思想・学術であったが、研究範囲は次第に拡大され、六朝・唐・宋・清などの各時代に及んだ。その学風は、精確な読書、考証に立脚しつつ、中国哲学史全体の潮流・法則といった根本的問題に意を注ぐことにあった。学問・思想の自由の擁護に強い関心を抱き続けたが、それは第2次大戦中の著作に既にうかがわれるところである。退官後、学術会議会員等としても活動、特に、中国との国交回復前において学術交流に尽力した先駆的功績は大きい。平成2(1990)年没。著書は、『周漢思想研究』(1943年)、『原始儒家思想と経学』(1949年)、『中国哲学史研究』(1964年)、『中国の伝統と現代』(1977年)等多数にのぼる。

昭和36(1961)年3月、山口大学より助教授として着任した湯浅幸孫(ゆきひこ)(1917～)は、昭和45(1970)年教授に昇任、昭和56(1981)年4月停年により退官し

た。湯浅の学問の特色は、白話や掌故に関する該博な知識を生かして筆記・小説までをも含む広範な資料を駆使し、時代風俗や各階層の規範意識などを社会思想史ないし精神史として論述したところにある。講義では様々な道徳観念の変遷を通史的に跡づけ、また宋明理学者の個別的研究などを行ったが、とりわけ清代の学術・思想の演習に力を注ぎ、本講座の伝統たる文献実証的学風を継承発展させた。その主要業績は退官の年に刊行された『中国倫理思想の研究』(1981年)に収められている。

昭和58(1983)年4月、湯浅の後任として、大阪大学より転じた日原利国(1927～84)は、漢代思想および春秋公羊学の研究者として著名であったが、着任後は『春秋穀梁伝』の研究に本格的に着手し、その春秋学研究のさらなる充実を図っていた。しかし、不幸にも翌昭和59(1984)年6月、病没した。在任わずか1年あまりでの急逝は痛恨の極みであり、また学界にとってもまことに大きな損失であった。主著としては学位論文『春秋公羊伝の研究』(1976年)のほか、死後、遺稿集として『漢代思想の研究』が関係者の手によってまとめられ、昭和61(1986)年に出版された。

日原の死去後、しばらく教授不在が続いたが、昭和63(1988)年4月、内山俊彦が山口大学より来任した。内山の主たる研究分野は先秦より漢魏六朝に至る思想史であり、なかでも中国思想における自然観・歴史意識等の問題について考究を試みており、著書に『中国古代思想史における自然認識』(1987年)等がある。

現在助教授の池田秀三は、昭和55(1980)年5月、人文科学研究所助手より昇任した。その主たる専攻分野は漢代儒学であり、経学を思想史として把握することを課題としている。なお、専任教官だけでは十分でない分野については、人文科学研究所、教養部(現：総合人間学部)の授業担当および学外の非常勤講師によってその不備を補っている。

本講座開設以来の卒業生の総数は、旧制88名、新制50名であり、また大学院修士課程修了者は43名(うち本学卒業生29名)、博士(後期)課程単位取得者および研究指導認定者は26名(うち本学修士25名)である。なお昭和43(1968)年

以降については、それぞれ44名、33名、21名となっている。その専攻分野は、以前は古代・中世思想が多数を占めたが、近年、時代・領域ともに非常に拡大し、中国哲学史のほぼ全分野にわたっている。特に学界全般の傾向を反映して、道教、天文・暦数・医学などの科学思想、芸術思想といった従来の哲学思想以外の領域の伸張が目覚ましい。卒業生の進路は、かつては大学院進学者が大半であり、また就職先もほとんどが教職関係であったが、昭和50年代より一般企業に就職したり自営業に就く者が増加し、卒業生の半ばを占めるようになってきている。

本講座関係の学会には、古くは「支那学会」があり、また昭和22(1947)年には卒業生と大学院生を中心として「中国哲学史研究会」が成立した。そのメンバーを主軸に、重澤の責任編集により、昭和25(1950)年以降、『東洋(後、中国と改題)の文化と社会』が発行されたが、大学紛争の影響などで13集で停刊のやむなきに至った。その後しばらく雑誌の発行ができないままであったが、昭和52(1977)年、研究室編として新たに『中国思想史研究』が創刊された。昭和63(1988)年度の11号よりは、「中国哲学史研究会」が再組織されてその機関誌となり、平成5(1993)年12月現在16集にまで達している。学界における同会・誌の声価も次第に高まり、平成5(1993)年度の蘆北賞を受賞した。

最後に記しておかねばならないのは、近年における国際化の急速な進展である。当研究室では、以前より中国(台湾を含む)との学術交流に努めてきたが、1980年代に入るやとみに盛んとなり、中国人学者による講演会が毎年のように開かれるようになった。また、留学生も増加し、最近15年間に大学院生・研修員・研究生として在籍した者は10名を超え、その出身地も中国本土のほか、台湾・香港・大韓民国・米国・カナダに及んでいる。一方、当研究室よりも2～3年に1名の割合で、博士課程の大学院生が中国に留学している。今後とも交流はより活発になるものと思われるので、その体制を充実させることが当面の課題である。

5. 倫　理　学

倫理学講座は明治39(1906)年文科大学の創設の際に、哲学科の1講座として設置された。創設期の歴代の担当教官は次のとおりである。狩野亨吉教授(在任明治39～41年)、友枝高彦助教授(在任明治41～大正3年)、桑木嚴翼教授(在任明治42～43年、哲学と兼担)、西田幾多郎助教授(在任明治43～大正2年)、藤井健治郎教授(在任大正2～昭和6年)、千葉胤成助教授(在任大正6～12年)。

創設期には、教官の欧米留学などに伴い担当教官の出入りが多かったが、藤井(1872～1931)の着任によって本講座の基礎が確立したといってよい。藤井はカントの道徳哲学に最も影響を受け、カント的人格主義の精神に基づく熱のこもった講義を行った。有名な『主観道徳学要旨』(1910年)を含め、教授の業績は『藤井博士全集』全8巻(1932～33年)に収められている。訳業としては『リップス氏倫理学の根本問題』(1921年)が最も有名である。藤井は、大正期から昭和初期にかけて成立するいわゆる「教養主義」に対して大きな影響を及ぼした。また、倫理学と社会科学の関連を重視し、社会主義、経済学、国家論、財産制や家族制度と倫理の関係などを取り上げた幅広い研究と教育を行って本講座の1つの特色となる伝統を築き上げた。

次に、昭和初期から第2次世界大戦までの時期を見よう。藤井が昭和6(1931)年1月に死去した後、大正14(1925)年より彼を助けてきた和辻哲郎(1889～1960)が教授に昇任し(昭和6年3月)、昭和9(1934)年に東京帝国大学に転ずるまで本講座を担当した。和辻の在任中の業績としては、日本精神史をその源流にまで遡る過程でまとめられた『原始仏教の実践哲学』(1927年)がまずあげられる。次に、人間存在の時間的側面だけでなく、人間を取り巻く環境と風土の問題を哲学的観点から論じ、新紀元を開いたことが特筆される。また、和辻の著書名としても知られる「人間の学としての倫理学」が、個人の良心の問題を超えた歴史的社会的な「間柄」の連関をとらえるべきだという思想もこの時期に打ち出された。さらに、広い視野と鋭い分析力をもって日本道徳思想史という新分野を開拓したことも忘れてはならない。

和辻の転任の後、天野貞祐(1884～1980)が哲学哲学史第4講座から転じて本講座の担当となった(在任昭和10～19年)。天野はカントの『純粋理性批判』の翻訳でも知られるカント研究の学徒であった。しかし、それだけにとどまらず、第2次大戦前の時期にヒューマニズムと合理主義の精神に基づいて時流を批判し、青年層に向けた評論活動も行った。『道理の感覚』(1937年)、『学生に与ふる書』(1939年)、『道理への意志』(1940年)などにおいて天野の一貫した見識が示されている。このうち、『道理の感覚』における軍事教練の批判が軍部を刺激して京都大学と軍部との対立をもたらし、この本は昭和13(1938)年には「自発的絶版」となった。しかし、終戦後再刊されて多くの版を重ねた。

天野の退官の後、昭和11(1936)年以来天野を助けてきた島芳夫(1902～85)が昭和21(1946)年に教授に昇任して本講座を担当した(昭和41年まで)。島の研究の特色は、第1に、従来の正当的哲学で軽視されてきた人間の情意的側面と道徳との関係に着目して、「哲学的人間存在論」の立場を築いたことである。第2に、倫理学と社会科学との相互関係も重視し、道徳哲学だけでなくデュルケム学派の道徳社会学の研究方法を取り入れた実証的倫理学にも精力を注いだ。著書には、『行為の全体的構造』(1943年)、『道徳史学』(1947年)、『人間性の倫理』(1948年)、『倫理学通論』(1950年)などがある。以上に加えて、島は戦後の激動期に新制大学と大学院の整備に尽力したほか、昭和25(1950)年には「関西倫理学会」を創設し昭和56(1981)年まで委員長を務めて学界に貢献した。なお、保田清(在任昭和25～26年)が一時本講座に所属し、教養部に移った後も長く学生の指導に貢献した。

島の後は、昭和40(1965)年に着任した森口美都男(1921～93)が、昭和42(1967)年に教授に昇任して昭和60(1985)年の退官まで講座を担当した。全国の大学を巻き込んだいわゆる「大学紛争」の時期に、森口は負傷がもととなって健康を損ねたが、大きな努力を払って学生の指導を続けた。しかし、講座の運営や教育指導上の支障は避けがたく、昭和49(1974)年には西谷裕作(1926～)が助教授として着任して講座の実質的な運営を行うことになった。

森口の研究はカントを中心として、英国経験論、ルソーやルター、さらにはシモーヌ・ヴェイユやオルテガ・イ・ガセトなど当時としては取り上げられることの少なかった思想家にも及び、独自の境地を開拓した。これらの研究は『哲学論集』全3巻に収められている。西谷はヨーロッパ哲学全般に及ぶ広い知識と語学力を生かして、森口の退官後も学生の指導に貢献し、平成2(1990)年に停年退官した。

平成2(1990)年4月には内井惣七が教授に着任した。内井の倫理学における主著は『自由の法則・利害の論理』(1988年)である。その特色は、分析倫理学の手法を活用して社会契約説と功利主義の系譜を検討し、経験主義的な倫理学説を体系化しようというところにある。内井は、その他論理学と科学哲学の分野における業績も多く、平成5(1993)年度には新設の科学哲学科学史講座に移り、1年間本講座をも兼担した。平成6(1994)年4月には加藤尚武が教授に着任し、現在に至っている。加藤の業績は、ヘーゲル研究をはじめとして、生命倫理・環境倫理など多くの分野にわたり、『ヘーゲル哲学の形成と原理』(1980年、1979年哲学奨励山崎賞)、『形の哲学』(1990年)、『環境倫理学のすすめ』(1991年)、『哲学の使命』(1992年、1994年度和辻哲郎文化賞)等、多数の著書がある。

最後に専攻学生の研究テーマに関するおおまかな事実を述べておきたい。残されている卒業論文題目の資料によれば、大正14(1925)年から昭和4(1929)年までは年当たり約4本の卒論が提出されている。題材として取り上げられるのはカントが多いが、リップス、コーエン、シュプランガー、シェーラーなども散見し、東西の宗教思想も取り上げられている。昭和5(1930)年から昭和11(1936)年にかけては卒論が年当たり約7本に増加する。テーマは、相変わらずカントをはじめとしN. ハルトマンなどドイツ系の哲学者が多い。しかし、英国のグリーン、フランスのギヨーも現れる。また、国家、社会、法、経済、性道徳など幅広い話題が扱われ、法然、王陽明、ニーチェ、パスカル、キェルケゴールの名前も見られる。昭和12(1937)年から終戦に至る時期には論文は年当たり約3本と減少する。

戦後すぐに卒論の数は増え始め、昭和24(1949)年には18本とピークに達するが、昭和28(1953)年から十数年間は極めて数少ない年が続く。ジンメル、ハイデガー、キェルケゴール、グリーンなどが戦後しばらくの時期に目立つテーマである。昭和40年代に入ると卒論や修論で分析倫理学系のテーマも時々見られるようになる。昭和40年代の後半から卒論と修論の数は再び増加し始める。昭和50年代以後は大学院生の数も増えて、大学院生の方が学部専攻生より数が多いことも珍しくない。最近20年ほどの論文の傾向としては、フッサールやキェルケゴールに関するテーマが比較的多く見られるほか、欧米の新旧の多くの哲学者、精神分析、分析哲学系と実に多様である。しかし、いつの時代にもカントが最も頻繁に取り上げられることには変わりがない。

本講座関係としての学会には、古くは卒業生を中心とした「京都倫理学会」があり、また昭和53(1978)年には大学院生を中心にして「実践哲学研究会」が発足し、会誌『実践哲学研究』が創刊された(平成5年度現在までで17号)。

卒業生の進路としては、大学の教員をはじめとする教職が過去には比較的多かったが、最近では一般の企業(メーカー・建設業・報道関係・ホテルなど)に就職した卒業生も少なくない。

6.　美学美術史学

本講座は、最初、1講座として発足した。その開設は明治42(1909)年5月であるが、後に本講座を担任した教授深田康算(1878～1928)は、当時なお欧州に留学中であったので、心理学講座担任教授の松本亦太郎が本講座の事務と学生の指導に当たり、西洋文学講座担任の教授藤代禎輔が美学の講義を担当し、武田五一、瀧精一、濱田耕作の各講師によって西洋および東洋の美術史が講ぜられた。明治43(1910)年帰朝し、直ちに教授となって本講座を担任した深田は以後、普通講義・特殊講義・演習を担当した。

深田は、毎年普通講義として美学概論(大正2年から大正10年までは普通講

義に西洋美術史概説を加える)を、特殊講義に西洋美術史・芸術批評史・近世美学史などを講じた。

大正8(1919)年には、文科大学が文学部と改称されたが、同年以来、助教授沢村専太郎(1884～1930)が、普通講義として日本美術史概論を、特殊講義としてインド・中国・日本の美術を講じ(大正12年5月から大正15年1月まで在外研究、昭和5年5月教授昇任)、講師植田寿蔵(1886～1973)が西洋の美術を講じた。植田は大正11(1922)年助教授に任ぜられ、大正14(1925)年5月から昭和2(1927)年11月まで在外研究、帰朝後直ちに九州帝国大学教授に任ぜられたが、深田死去の後を受けて、昭和4(1929)年4月本学教授に任ぜられた(昭和7年5月までは九大教授を兼任)。

植田は昭和21(1946)年7月停年により退官するまで、普通講義として美学序論を講じ、特殊講義には美学上ならびに東西美術史上の諸問題を取り上げ、演習にはテキストを定めて学生の研究を指導し、退官後も昭和21(1946)年度に限り、学部の懇請を容れて講師として美学序論の講義を担当した。植田が独自の美学体系と犀利な美術理解とに基づき、芸術の自律的研究の立場を樹立したことは、わが国美学史上に不滅の功績を印したものといえるが、その思想は数多くの著書にも展開されている。教授の在任中は、福井利吉郎・須田国太郎・源豊宗・中井正一・井島勉・上野照夫が順次1年ないし数年継続して講師を委嘱されて特殊講義を担当した。昭和12(1937)年以来その任にあった井島(1908～78)は、昭和18(1943)年5月助教授に就任、さらに植田の退官の後、昭和22(1947)年4月教授に昇任して本講座を担任した。

新制大学の発足は昭和24(1949)年である。引き続き井島は、講義として美学序説を、研究として美学上・美術史学方法論上の諸問題を講じ、演習として洋書講読や学生の研究指導に当たった。その間、上野照夫(1907～76)が昭和24(1949)年専任講師として教養部に就任し(昭和26年教養部教授)、文学部においても毎年日本やインドなどの美術に関する研究を講じた。学外からも多数の美学美術史学者が相次いで講師として迎えられ、逐次1年または数年にまたがって、各自の専門領域に関する研究もしくは講読を担当してきた。

昭和28(1953)年4月から開設された大学院文学研究科には、美学理論・東西美術史学を包括する独立の美学美術史専攻が設置された。最初は、井島が大学院演習を担当して学生の研究を指導し、一部の学部非常勤講師とともに各種の研究を講じた。本講座は個々人の専門的研究領域の発展を目指すものであるため、研究分野は極めて広汎多岐にわたり、また専攻学生も増加し、従来の1講座のみでは講座運営が極めて不完全であることが痛感され、講座増設の要求が出されていたが、ようやく昭和31(1956)年4月から美学美術史第2講座が開設されることになった。同年3月から7月まで在外研究員としてアジア・欧米各国の美術館・美術研究所の視察調査に赴いた井島の帰国を待って、昭和32(1957)年4月、当時奈良国立博物館学芸課長の任にあった蓮実重康(1904～76)が助教授に迎えられ第2講座を担任した(昭和35年教授昇任)。発足以来本講座では、理論研究と歴史的研究との密接な連繋の下での研究指導体制を目指し、芸術の諸問題に対して、あらゆる方向からのアプローチに対応できる体制を求めてきたが、第1講座美学理論(各種芸術学を含む)、第2講座東西美術史研究を車の両輪とする、本講座の体制の基礎が固められた。蓮実は就任後日本・東洋美術史の研究を講じ、また文献研究の指導に当たるとともに、本講座の特色である美術史実地指導を開始した(昭和43年3月停年退官)。

昭和43(1968)年4月、蓮実の後任として上野照夫が教養部より本講座に教授として着任し、第2講座を担任、第1講座担任の井島と共に学部・大学院演習を指導し、自らはインド美術史を中心に講義、研究を講じ、美術史学の現地指導に当たった(昭和46年退官)。

昭和43(1968)年4月、同志社大学より吉岡健二郎(1926～)が第1講座助教授に就任し、研究、講読、学部・大学院演習を担当した。

この年全国的に広がった大学紛争の波は本講座にも押し寄せ、美学美術史学研究の社会における意義をめぐって学生教員間で激しい議論が展開され、また一時講義や演習が行えない状態を迎えた。井島は当時(昭和43年1月～44年3月)学部長・研究科長の要職にあり、このため井島研究室は一時学生に

占拠される事態が生じた。大学院演習も学外で行われ、また貴重書は助手と学生有志によって他所へ運び出された。

昭和47(1972)年井島が停年退官を迎えた後、昭和48(1973)年に吉岡が第1講座教授に昇任し、講義、研究、講読、学部・大学院演習を担当した。吉岡は「近代芸術学の成立とその課題」により、昭和47(1972)年5月文学博士号を取得し、この成果は『近代芸術学の成立と課題』として昭和50(1975)年に出版された。

昭和46(1971)年4月、上野の後任として京都精華短期大学(現：京都精華大学)より清水善三(1931～)が助教授として迎えられ、第2講座の指導に当たることになった。清水は昭和54(1979)年「平安彫刻史の研究」によって博士号を取得し、昭和55(1980)年6月教授に昇任した。

また、昭和41(1966)年4月教養部講師として着任した新田博衛(昭和43年助教授、昭和53年教授昇任)は、文学部における講読や研究を担当し、吉岡が昭和51(1976)年3月より1年間在外研究員として出張の間は、本講座運営にも当たった(平成5年3月停年退官)。

昭和45(1970)年教養部助教授に就任した乾由明(昭和50年教授昇任)は、以後停年退官(平成3年3月)まで文学部において毎年西洋美術史学研究や講読を担当した。

昭和55(1980)年、吉岡は文学部長、研究科長に選出され、同年1月より1年間学部の発展のために行政的な面からも指導的役割を果たした。

昭和56(1981)年4月、文化庁より佐々木丞平が助教授として招かれ、日本美術史学研究を講じ、第2講座の指導に加わった。また昭和60(1985)年より人文科学研究所助教授曾布川寛(平成6年4月教授昇任)が毎年中国美術史研究を講じている。なお、佐々木は平成2(1990)年「円山応挙研究」によって博士号を取得し、平成3(1991)年3月教授に昇任した。

平成2(1990)年4月、停年退官となった吉岡(同年4月名誉教授)の後任に、京都市立芸術大学より岩城見一が第1講座助教授として就任した(美学・芸術学理論担当)。

平成3(1991)年4月に、乾の後任として教養部(現：総合人間学部)助教授に着任した岡田温司は、同年より文学部で西洋美術史学研究を講じ、併せて平成4(1992)年まで大学院演習の指導にも加わった。

西洋美術史を専攻する学生の増加するに伴い、平成5(1993)年4月、国立西洋美術館より中村俊春が助教授として招かれ、西洋美術史の指導に当たることになった。本講座に在籍する学生数は近年大幅に増え、また研究分野も極めて多様化していることから、本講座では常に非常勤講師を多く招き原則として各講師に2年連続の講義を依頼してきた。

本講座は理論研究と歴史的研究との密接な連関のもとに研究指導を展開させており、既に以前から第1講座(理論研究)と第2講座(歴史研究)とを分離することなく、相互関係を重視しつつ運営されてきた。この点で本講座は今日学問に求められている新しいあり方をわが国の他の大学に先駆けて模索してきたといえる。この伝統を踏まえた上で、多様な文化現象に一層柔軟に対応し得る研究教育体制の構築へ向け、他の諸領域との活発なコミュニケーションが可能となるようなより開かれた研究教育体制の構築を目指している。学生の関心も従来の知の枠組みを超えた問題へと向けられており、それは卒業論文・修士論文の題目にも端的に現れている。これら多様な学生の関心に応える上でこれまでの助手が果たしてきた役割も十分評価されねばならない。

在校生の多くが留学を経験し、また、海外からの留学生、研修員も近年数多く受け入れている。学内では演習授業の場で各自の研究成果を発表するほか、毎年発行している『美学・美術史学研究紀要』には、教官、卒業生、在校生が研究成果を発表している。同誌は昭和55(1980)年に創刊、現在15号に至り、広く内外の研究者、研究機関へ送られている。卒業生は大学等の研究機関、博物館、美術館等に就職し、研究発表の場としての美術史学会や美学会の運営にも深く携わっている。美学会は、昭和25(1950)年に当時本講座の主任であった井島と東京大学文学部教授竹内敏雄との協力によって創設され、西の事務局も創設以来本講座に置かれている。

美学美術史学講座は平成6(1994)年3月までに、旧制学部161名、新制学部370名、修士課程修了者116名、博士課程単位取得者74名の出身者を出している。

なお本講座出身の島田修二郎は、平成元(1989)年「松齋梅譜校定解題」によって国華特別賞を、さらに平成3(1991)年には、朝日賞を受賞した。またかつて本講座非常勤講師として日本美術史を講じた源豊宗は、昭和58(1983)年、長年にわたる優れた日本美術史研究と著作集出版により朝日賞を受賞した。これはわれわれにとり大きな喜びである。同時にわれわれは、今後の研究、教育への責任の重さを改めて感じている。

7　宗　教　学

本講座が設置されたのは明治40(1907)年5月であるが、それに先立って同年1月から3月にかけて来日中のイェール大学のラッド教授が、正規科目として「宗教哲学」の講義を行った。開設の当初はインド哲学史講座担当の教授松本文三郎が本講座を兼担したが、明治43(1910)年からは、倫理学講座助教授として着任した西田幾多郎(1870～1945)がこれを助けた。西田は大正2(1913)年教授に就任、宗教学講座の最初の専任の担当者になった。当時の西田の「宗教学概論」は『西田幾多郎全集』第14巻に収められている。しかし西田はその翌大正3(1914)年哲学哲学史講座に移り、本講座は再び松本の兼担となった。この状態は大正6(1917)年波多野精一(1877～1950)を教授として迎えるまで続いた。

波多野は綿密な哲学史研究によっても知られるが(例えば『西洋哲学史要』1901年)、その最も大きな業績は、『宗教哲学』(1935年)、『宗教哲学序論』(1940年)、『時と永遠』(1948年)の、宗教哲学に関する3部作であろう。その立場は「徹底的象徴主義」と特徴づけられる。一切の存在が、表現を超越する絶対的実在としての絶対他者の象徴として体験されること、言い換えれば「あなた」から時のただ中に将来する絶対他者との人格的な共同の中に生きることに、宗教的態度を認める立場である。波多野はこのような宗教本質論

を深い歴史研究と結び付けた典型論を、さらに独自の時間論を展開した。

波多野は特殊講義としては欧州宗教思想史、原始基督教、その神学思想などについて講じ、演習にはカント、シュライエルマッハー、ヘーゲルなどの書を用い、さらにギリシア哲学の古典を講読した。昭和12(1937)年に退官、玉川大学学長等を務めた後、昭和25(1950)年に死去した。

明治41(1908)年に松本教授の指導のもとに「宗教学会」がつくられたが、翌明治42(1909)年「印哲学会」と合同し、「印哲・宗教学会」として活動した。しかしこの時期に再び印哲と分離し、独立に茶話会を開くようになった。

波多野の後継者となったのは、わが国の宗教哲学を同じく世界的水準に高めた西谷啓治(1900～90)であった。西谷は昭和11(1936)年に助教授に就任、昭和18(1943)年に教授に昇任した。その厳密な原典解釈に基づく哲学史研究はプラトン、アリストテレス(『アリストテレス論攷』1948年)から、プロティノス、エックハルト(『神と絶対無』1948年)、そして近代哲学(『シュリングの自由意志論』1927年)、ニーチェやハイデガー(『ニヒリズム』1949年)に及ぶ。しかも単なる歴史研究にとどまらず、それぞれに独自の解釈を提示するものであった。それは『根源的主体性の哲学』(1940年)に最もよく表れている。このような極めて広範な哲学史に関する知識と、自らの禅体験とを背景に西谷は、西洋の科学技術文明と禅とを統合するという形で、ニヒリズムとして特徴づけられる時代状況を克服する道を探った。『宗教とは何か』(1961年)、『禅の立場』(1986年)はその最も大きな成果である。

西谷は昭和22(1947)年占領政策に基づき退官したが、昭和27(1952)年に復帰し、昭和33(1958)年には西洋哲学史講座に移った。その間、「宗教に於ける非合理性と合理性」「神秘主義の研究」「近代世界に於ける宗教」「宗教に於ける理性と実存」等のテーマで研究講義を行った。昭和57(1982)年文化功労者となり、平成2(1990)年死去した。

西谷が昭和22(1947)年いったん退官した後、武内義範(1913～)が昭和23(1948)年に助教授になり、西谷再任までの間、本講座を担ったが、その間同

時に久松真一(仏教学)、有賀鐵太郎(基督教学)がこの講座を兼担してその発展に寄与した。

武内は昭和34(1959)年教授となり、昭和51(1976)年停年で退官するまで本講座を担当した。その根本的な関心は、インド・中国・日本における仏教の展開を宗教哲学の立場から解明することにあった。最初の著作『教行信証の哲学』(1941年)は浄土教思想の哲学的解明として、浄土教研究に新時代を開くものであった。また原始仏教に関する諸論文は、仏教思想の原型を縁起説のうちに見るとともに、その構造と意義を、従来の仏教研究だけでなく、西欧の哲学をも媒介して究明するものであった。さらにこのような研究を基礎に、東西両思想を結び付ける独自の宗教学、宗教現象学、宗教哲学の研究を行った。

西谷もドイツ・ハンブルク大学、アメリカ・テンプル大学の客員教授を務めたが、武内もドイツ・マールブルク大学、アメリカ・コロンビア大学、ウィリアム・カレッジで客員教授として、原始仏教、日本の哲学、宗教について講義した。武内は現在もその思想的境位を深める論攷を発表し続けている。

武内の後、本講座の教授には上田閑照(しずてる)(1926～)が就任した(昭和52年)。上田の研究も多岐にわたるが、代表的なものとして、ドイツ神秘主義研究、ハイデガーを中心とする現象学・実存哲学研究、西田哲学研究、禅仏教の研究をあげることができる。ドイツ神秘主義研究(『魂のうちにおける神の子の誕生と神性への突破』1965年、独文)も世界的に高い評価を受けているが、西田哲学に関する研究(『西田幾多郎を読む』1991年)や禅仏教に関する研究(『禅仏教』1973年、『十牛図』1982年)によってわが国のみならず、欧米の学者にも西田哲学や禅仏教への接近の道を開いた業績も大きい。また最近は『場所――二重世界内存在』(1992年)等を通して独自の思想を展開しつつある。

平成元(1989)年上田が退官した後は、長谷正當(しょうとう)が本講座教授となった。長谷の研究領域は、主としてリクール、ヴェイユらのフランス宗教哲学と、実存現象学、浄土教思想である。現在、長谷とともに助教授藤田正勝(平成

3年着任、ヘーゲルをはじめとする近代ドイツ思想、西田哲学を専攻)が本講座の担当者として学生、大学院生の指導に当たっている。現在本講座に所属の学生、大学院生、聴講生は総数30名、その研究対象は、エックハルト、パスカルからハイデガー、レヴィナスに至るまで多様である。

最後に本研究室が母体になって昭和58(1983)年に「京都宗教哲学会」が結成されたことを記しておきたい。年2回の研究発表会を開催するとともに、機関誌として『宗教哲学研究』を発行している。平成5(1993)年度で11号を数えるが、宗教哲学に関するわが国の代表的学術雑誌として斯学の発展に大きな寄与を行っている。

8.　キリスト教学

本講座は、大正11(1922)年5月、宗教学第2講座(基督教学)として設置された。昭和52(1977)年度以後は、表記を「キリスト教学」に改めている。キリスト教神学とは区別されるキリスト教学の名称と専門的学術的教育・研究機関としてのキリスト教学講座とは、世界でも最も早い成立の1つであろう。キリスト教学講座は、わが国の国立大学においては現在なお他に存在しない。

明治40(1907)年に創設された宗教学講座において、既に、ギューリック(Sidney Gulick)講師、続いて日野真澄講師によるキリスト教教理史、教会史の講義が行われていたが、ドイツ留学中に宗教史学派の原始キリスト教研究にふれ、明治41(1908)年に『基督教の起源』を著していた波多野精一(1877～1950)が大正6(1917)年12月に宗教学講座に着任してから、初めて専任者によるキリスト教学の授業が行われることになった。このことは、文学部においてキリスト教研究の重要性が早くから認識されていたことを示している。このような背景で、キリスト教の学術的研究のため寄付された渡辺荘奨学資金により、大正11(1922)年5月本講座が宗教学第2講座として設置され、波多野がこの講座を兼担することになった。波多野は、原始キリスト教、パウロおよびヨハネの宗教思想、宗教思想史等について講じ、退官後発表された

『時と永遠』(1943年)のような、キリスト教の立場に基づく宗教哲学をも構想しつつあった。波多野の厳密なテクスト読解と深い宗教哲学的思索とが、本講座の礎石を据えたといってよい。波多野は、昭和2(1927)年、本講座の兼担を解かれて分担となったが、昭和12(1937)年3月には宗教学第1講座から本講座の担任者となり(第1講座を分担)、本講座は初めて専任教授を持つことになった。しかし同年7月に波多野は停年退官し、昭和23(1948)年まで講座担任者のいない状態が続くことになった。

この間、大正13(1924)年から講師を委嘱されていた山谷省吾と、昭和12(1937)年講師となった松村克己とが講座を護ることになった。山谷は新約学を講じ、『パウロの神学』(1936年)で昭和12(1937)年文学博士の学位を授与された。松村は理論的体系的見地からキリスト教の根本問題の究明に当たり、昭和17(1942)年には助教授に任じられた。その主著は、『根源的論理の探究』(1975年)である。しかし山谷講師は昭和21(1946)年に退職し、松村も同年占領政策に基づく休職を命じられ、やがて退職するに至った。

11年間にわたって担任者を欠いていた本講座は、昭和23(1948)年、有賀鐵太郎(1899～1977)を教授に迎え、再建の道を歩むことになった。教父学を中心とするキリスト教思想史を専門とする有賀は、『オリゲネス研究』(1943年)で教父思想研究の立場を確立するとともに、ヘブライズムとヘレニズムとの歴史的交渉を究明し、キリスト教思想の根底にヘブライズムに発する独特の思想、ハヤトロギアがあることを解明した。『キリスト教思想における存在論の問題』(1969年)はその成果である。有賀の時代から教父学を専門とする学生が出始め、本講座の1つの特徴となっている。また、本講座から専攻学生が出るようになったのも、有賀の時からである。それまでは、キリスト教学を学ぶ学生も区別なしに第1講座に所属していたからである。

有賀が昭和37(1962)年に停年退官した後、同年11月、昭和32(1957)年以来本講座の助教授であった武藤一雄(1913～)が教授に任じられた。武藤は、キェルケゴールの研究で優れた業績をあげていたが、本講座では特にキリスト教思想の根本問題を究明し、『神学と宗教哲学との間』(1961年)で、キリス

ト教学の理念と方法の基礎づけを行った。キリスト教思想の歴史的研究とともにこれを媒介しつつ、単なる神学的研究にとどまらない宗教学的・宗教哲学的研究を行うという本講座の目的と理念は、ここで確立されたといってよい。武藤の時代から専攻学生の数も増え、専攻分野も多彩になった。武藤は退官後も多くの著作で、神学圏を超出することによって諸宗教にも開かれた、聖霊論に基づくキリスト教的宗教哲学の立場を切り開こうとしている。

武藤のもとで昭和50(1975)年助教授に任じられた水垣渉は、昭和52(1977)年停年退官した武藤の後を受けて昭和56(1981)年、教授となった。水垣は『宗教的探求の問題――古代キリスト教思想序説』(1984年)で、キリスト教思想の成立と形成の根本動機を「探求」に求め、ヘブライとギリシアの背景から教父思想に至るその発展を跡づけるとともに、さらに広くキリスト教思想史一般の解釈に及ぼそうとしている。

キリスト教の本質と現象の理解を目指すキリスト教学は、旧約学、新約学、古代から現代に至るキリスト教思想史、神学思想、宗教哲学などの広い分野をカバーするものであるので、ヘブライ語、ギリシア語、ラテン語等の古典語、近代諸国語の習得に始まる幅広いカリキュラムを用意し、これまで学外から多くの講師を迎えて教育を行ってきた。学生の卒業論文や修士論文の題目もこれに応じて極めて多彩である。しかし単一の講座での教育には限界があり、第1講座をはじめとする関連諸講座との密接な協力関係は本講座にとって欠くことができない。また、学問の性質上学部と大学院の一貫教育が望ましいが、大学院からの入学者が多い本講座にとっては、学部教育と大学院教育との関係は常に問題である。

本講座は、学界においてもユニークかつ重要な位置を占めている。有賀は、キリスト教学の総合学会としての「日本基督教学会」(昭和27年発足)の創設および発展に尽力した。本講座の大学院を修了した学生の多くが、この学会を中心にそれぞれの専門分野で活躍している。また本講座関係者によって「京都大学基督教学会」が組織され、雑誌『基督教学研究』(1978年発刊、年1回)が刊行されている。

平成5(1993)年度の在学生は、学部3名、修士課程2名、博士課程2名、研修員1名、研究生1名、聴講生1名である。これまでの統計から平均して各学年1名の学生がいるといってよい。

9. 仏教学

京都大学において本講座が設立されたのは大正15(1926)年6月である。それ以前は文科大学創設以来印度哲学講座を担当した教授松本文三郎およびこれを助けた羽渓了諦(はたにりょうたい)(1883～1974)その他の講師によって仏教学の講義が行われていた。本講座を最初に分担した羽渓は、西域仏教を専門とし、昭和4(1929)年助教授、昭和10(1935)年教授に昇任し、昭和18(1943)年9月停年退官するまで本講座を担任した。

昭和10(1935)年、講師久松真一(1889～1980)が本講座に加わり、昭和12(1937)年助教授に昇任、羽渓の退官後本講座を担任するに至った。久松は昭和21(1946)年教授に昇任し、昭和24(1949)年6月停年退官するまで戦中戦後の困難な時期に講座の発展と学生の指導に献身した。久松は西田幾多郎の門下として哲学を修めるとともに、禅の実践者としても令名が高く、自らの仏教的体験を理論的に解明し、東西の哲学を融合して独自の仏教哲学を創造した。その著書『東洋的無』(1939年)、『絶対主体道』(1948年)、『禅と美術』(1958年)等の業績がそれを如実に示している。

昭和25(1950)年本学人文科学研究所にあった助教授長尾雅人(がじん)(1907～)が本学部に転じ、停年退官した久松を襲って本講座を担任するに至った。長尾は昭和26(1951)年教授に昇任、昭和46(1971)年停年退官するまで講座の発展と学生の指導に努めた。彼は羽渓門下の出であるが、山口益がフランスから導入した仏典の梵蔵漢比較研究をも継承し、中観・唯識の諸論書の精密な文献学的研究を行った。この領域における長尾の研究は学位論文「中観哲学の根本的立場」(『哲学研究』366、368、370、371；英訳1989)、“Index to the Mahāyānasūtrālaṃkāra” 2vols(1958、1961)、梵本“Madhyāntavibhāga-bhāṣya”(1964)、『中観と唯識』(1978年、部分英訳1991)『攝大乗論　和訳と

注解』全2巻(1982、1987年)などの著書および数多くの論文に結晶している。長尾はさらにチベット仏教の研究において『蒙古学問寺』(1947年)、『西蔵仏教研究』(1954年)の2著作に代表されるパイオニア的業績を残している。また長尾はインド美術に対する造詣も深く、昭和33～34(1958～59)年6名の隊員からなるインド仏蹟踏査隊を率いて渡印、4カ月にわたってインドの諸遺跡、博物館を調査、ブダガヤでは発掘も試み、多くの研究資料を持ち帰った。退官後長尾は推挙されて昭和55(1980)年12月12日日本学士院会員となった。

羽渓・久松の時代以来、本講座の授業を助けた山口益・塚本善隆の2講師は、長尾の下でもその活動を続け、前者は昭和28(1953)年まで、後者は昭和35(1960)年度まで在任した。

昭和28～31(1953～56)年にわたってインドのナーランダ研究所の講師であった梶山雄一(1925～)は、帰国後本講座の助手および講師を歴任し、昭和36(1961)年3月からは助教授に任ぜられて本講座に属することとなった。昭和46(1971)年11月教授に昇任、昭和63(1988)年停年退官するまで研究・教育に従事し、多くの優れた研究者を育てた。

梶山ははじめ中観哲学、特にバーヴァヴィヴェーカ(Bhāvaviveka)に深い関心を示したが、後にはダルマキールティ(Dharmakīrti)以後の後期仏教論理学・認識論の分野で次々に新しい研究を発表して他の追随を許さず、さらには般若経を中心とした大乗経典ならびに菩薩思想の研究や、インド仏教思想を基盤にした中国および日本の仏教思想の解明に対しても縦横に研究の歩を進めた。昭和46(1971)年5月、学位論文「ナーガールジュナの哲学」により京都大学文学博士の学位を得たが、『八千頌般若経』全2巻(和訳、1974、1975年)、『仏教における存在と知識』(1983年)等の著書や欧文論文集"Studies in Buddhist Philosophy"(1989)をはじめとする多くの論文を発表した。

昭和50(1975)年12月以来人文科学研究所の助手の任にあった御牧克己は、昭和57(1982)年4月から本学部助教授に任ぜられて本講座に所属し、平成4

(1992)年1月には教授に昇任した。御牧ははじめ後期インド仏教の認識論・論理学に深い関心を示したが、フランス留学中に習得したチベット学の知識を進展させ、特にインド・チベット仏教の宗義文献の解明に大きな貢献をなした。また、ボン教研究やチベット土着語彙集、土着文法の分野においても業績を発表し、チベット学全体を幅広く見渡して研究を継続している。"La réfutation bouddhique de la permanence des choses (sthirasiddhidūṣaṇa) et la preuve de la momentanéité des choses (kṣaṇabhaṅgasiddhi)" (1976)、"Blo gsal grub mtha'" (1982)などの著書および多くの論文がある。

外国諸大学との交流が活発に行われているのも本講座の特徴である。長尾は昭和31(1956)年にセイロン・インド、昭和33～34(1958～59)年にインド、昭和36～37(1961～62)年にインド、ビルマを訪れ、さらに昭和40(1965)年9月から1カ年間、招かれてアメリカのウィスコンシン大学でインドの大乗仏教を講じた。梶山はアメリカのウィスコンシン大学(昭和42年9月～43年6月)、カリフォルニア大学(バークレー校)(昭和49年3～7月、昭和56年3～6月)、ハーヴァード大学(昭和61年2～6月)、英国のケンブリッジ大学(昭和55年5～7月)、オーストリアのウィーン大学(昭和60年2～7月)と世界の諸大学に招かれてインド・中国仏教の諸思想を講じた。御牧は平成5(1993)年8～12月カリフォルニア大学(バークレー校)に招かれてインド・チベット仏教哲学を講じたが、来る平成6(1994)年秋にはフランスのコレージュ・ド・フランス、平成7(1995)年春にはウィーン大学に招かれてインド・チベット仏教の諸思想を講じる予定である。

外国の著名な学者で本講座を訪れて講義、セミナーを担当した者も少なくない。インドのラマナン(V. Ramanan)教授(昭和36年)、スイスのメイ(J. May)教授(昭和38年4月～43年10月、昭和52年9～11月)、ロンドン大学のブラフ(J. Brough)教授(昭和40年9月～41年3月)、ウィーン大学のシュタインケルナー(E. Steinkellner)教授(昭和57年4～6月)などが特筆に値する。

また、従来多くの学生がインド、ビルマないし欧米の諸国に留学し、他方本講座において仏教研究に従う外国人留学生の数も年々増え、現時点では、

フランス、ベルギー、ドイツ、アメリカ、イスラエル、イタリア、台湾、韓国、タイからの外国人共同研究者または研修員・研究生を受け入れている。1994(平成6)年1月1日付で本学部とスイスのローザンヌ大学文学部の学術交流の協定が発効しているが、御牧はローザンヌ大学のインド学仏教学のスタッフ、ブロンクホルスト(J. Bronkhorst)、ティレマンス(T. Tillemans)両教授と密接な関係を保って研究を継続しているので今後も両講座間に緊密な国際交流が維持されることは疑いない。

御牧のもとで本講座はインド哲学・梵語学梵文学講座や人文科学研究所との連繋を深める一方、宗教学講座との間にも親密な交渉を続けている。

第2項　史　学　科

1. 国　史　学

国史学第1講座は明治40(1907)年5月、史学科の開設に伴い、内田銀蔵(1872～1919)を教授として発足、9月に開講された。開設に先立ち内田は明治36(1903)年正月、イギリスに学び、次いでフランス、ドイツ、オランダを歴遊、当時、勃興しつつあった20世紀初頭の最新のヨーロッパ史学の諸潮流を吸収して明治39(1906)年5月に帰国している。内田の学問への関心は広く、歴史学を事件史や個人史からなる旧来の狭い範囲の政治史にとどめようとせず、経済社会の動向や歴史理論に分析の目を向けている。内田の構想では、史学科の中に国史学・史学地理学・東洋史学・考古学を含んでおり、こうした諸学からなる総合的な学問を意図していた。創設以来、国史総論のほか日本経済史、日本近世史を講じ、大正2(1913)年には日本社会史を講義している。内田は大正8(1919)年、にわかに死去するが、死後『日本経済史の研究』『国史総論及日本近世史』『史学研究法及史学理論』(1921年)が刊行された。

第2講座は明治42(1909)年5月に設置され、三浦周行(ひろゆき)(1871～1931)が教授になった。三浦は日本中世史・日本法制史・古文書学概論を講じ、内田に続

いて日本社会史を講義している。本学へ着任する以前、東京帝国大学の史料編纂掛に勤務し、大日本史料第4編(鎌倉時代前期)の編纂を担当、いち早くこれを完成させていた。京都帝国大学では、その教授着任に先駆けて、三浦に歴史資料の蒐集を委嘱しており、この時から三浦を中心にして、近畿をはじめとする各地の寺社・旧家の古文書、古記録の調査、蒐集の努力が開始され、今日に至っている。原文書の検討の上に立つ、地道で本格的な当国史学講座の学風の基礎がこうして築かれた。

両教授の指導のもと、明治43(1910)年夏、第1回卒業生7名を出したが、同年12月学生有志が三浦の指導のもとに史料講読を目的として「読史会」を創設、以後この会が発展して、毎年秋の大会に研究発表を行って研鑽を積み、適時、見学旅行を催して日本各地から時には海外に及ぶ史跡の実地研修を行うようになった。

三浦は大正11(1922)年に初めて渡欧するが、東京帝国大学で直接教えを受けたルートヴィヒ・リースを介して、ドイツ正統史学の巨匠レオポルト・フォン・ランケの学風を崇敬すると同時に、19世紀初頭のカール・ランプレヒトの文化史研究の動向にも深い関心を示している。内田と共に国史学講座の初期の輝かしい歴史を作った三浦は昭和6(1931)年7月に停年退官し、間もなく死去した。『鎌倉時代史』(1916年)、『法制史の研究』(1919年)、『続法制史の研究』(1925年)、『日本史の研究』1・2・新輯(1922、1930、1982年)をその代表作とする。

内田が死去した後、第1講座は西田直二郎(1886～1964)教授と喜田貞吉(1871～1939)講師が分担したが、西田は大正9(1920)年5月から2年間、イギリス、ドイツに学んで大正11(1922)年末に帰国、その間、喜田が大正9(1920)年7月から大正13(1924)年に至る間、教授を務めている。喜田は豊かな文献学的知識と精密な遺物遺跡の調査を基に民俗・土俗および社会史的な研究を精力的に進めた。帰国した西田は大正13(1924)年に「王朝の庶民階級」で学位を得、喜田の後を受けて教授に昇任した。

本講座の第1期卒業生であった西田は内田・三浦の薫陶を受けてヨーロッ

パ史学に関心を持ち、特にドイツにおける傍流史学であるカール・ランプレヒトの文化史の方法に接近し、それの批判的摂取の上に独自の文化史学の方法を打ち立てた。西田の文化史は後年、より純化された形で『日本文化史序説』(1932年)に結実したが、その初心は庶民階級を主題とした初期の学位論文により端的に見られる。西田の学問は方法上、現在社会史として脚光を浴びている学問方法と通底するところが多く、そこには歴史を担う新しい人間集団の形成と、そこにおける新たな人間精神の形成を正面から扱おうとする広い視野が貫かれている。三浦の後、第2講座の教授は空席のまま推移したが、この間、昭和2(1927)年以来、長く中村直勝(1890～1976)助教授が教壇に立ち、古文書学をはじめ、中世の荘園研究、座や供御人研究に多大の業績を収め、学生を指導した。本講座に蒐集された膨大な原本・影写本の集成は三浦の後を受けた中村の努力に負う部分が多い。この間、藤直幹(1903～65)助教授と柴田實(1906～)講師が中世史と民俗史を講じている。

第2次大戦の敗北は国史学講座に激変をもたらした。戦争の間、学業を離れて、戦線に赴いていた学生のある者は戦死し、ある者は生きてキャンパスに戻ってきた。しかし国史学講座では戦争への協力を理由に、昭和21(1946)年に西田が、昭和23(1948)年に中村が公職追放に処せられ、共に大学を去った。同じ頃、藤は大阪大学へ移り、翌昭和24(1949)年、柴田は新設の教養部教授に転じた。

この空席を埋めて困難の中、国史学第1講座の教授として、学問の道統を継いで戦後の斯学を隆盛に導いたのは小葉田淳(1905～)であった。小葉田は昭和24(1949)年に教授となるが、京都で三浦の指導を受け、若くして大著『日本貨幣流通史』(1930年)を著していた。三浦のもとで『堺市史』の編纂に従事した後、台北帝国大学に赴任し、朝鮮、琉球、南海、明代中国などと日本との通行貿易史についての研究に励み、史料を博捜、事実に基づいた実証的な研究を『中世日支通交貿易史の研究』(1941年)にまとめた。けだし中世日本にはもっぱら明からの輸入銭が流通していたのであったから、明との通交貿易が小葉田の研究主題として浮かび上がったのである。戦後、書類も

ノート類もすべて失って台湾から引き揚げた小葉田は一時は東京文理科大学に教鞭を執ったが招かれて母校京大へ移り、新たに堅実かつ清新な学風をここに伝えた。小葉田の研究の重点はその後、貨幣の原材料をなす金・銀・銅を主体とする日本各地の鉱山史研究へと移り、その成果は『日本鉱山史の研究』(1968年)に結実した。16、17世紀に日本産の金銀が世界経済に流通した状態を明らかにして、欧米の学界に注目された。

赤松俊秀(1907～78)は昭和26(1951)年助教授になり、次いで昭和28(1953)年教授に昇任、国史学第2講座を担当した。赤松は長く京都府にあって、文化財調査を担当し、古文書を始め、美術・絵画・彫刻に深い造詣があり、その生涯は文字どおり文化財とともにあった。第2次世界大戦中に京都の文化財を安全な場所に疎開させた際の責任者であり、その苦労をよく口にしていた。赤松の研究は何よりも新発見の資料に基づく厳密な分析を得意とし、親鸞・一遍を中心とする鎌倉仏教の研究、あるいは菅浦文書や東大寺文書による荘園や供御人、惣など中世の京都の町や商業、荘園など社会経済史の研究であった。第1講座の小葉田が京大着任後は、近世史に重点を置いて研究を進めたのに対し、赤松は主として中世史研究を中心とした。晩年の赤松は『平家物語』の研究に力を致していた。

小葉田が昭和44(1969)年、赤松が昭和46(1971)年に退官を迎えるまで、2人は事実に基づいた堅実な学風を自ら堅持しつつ、自由奔放な戦後の若者の学問的成長を温かく見守り、多くの個性的な研究者を育て上げた。国史学講座の中で、古代・中世・近世の専門分化が明瞭になり、学生も意識して自分の専門分野の時代を決め、それを集中して研究するようになったのは小葉田・赤松両教授の時代であった。その当時、小葉田・赤松の下では、岸俊男(1920～87)助教授がもっぱら古代史の新分野を開拓していった。

小葉田・赤松のように昭和初期に学問の道に入った世代は、若き日にヨーロッパの学問に彼の地で直接触れる機会を持たなかった。日本の近代史学がそれなりに成熟したことの反映でもあったが、同時に日本の国家とその学問が広い国際的視野を失いつつあったことの表れと見ることができる。

小葉田の後、教授に昇任し、第1講座を担当したのは日本古代史に大きな業績を残した岸俊男であった。岸はもともと史料に恵まれず、論拠のはっきりしないままであった当時の古代の政治史叙述をいかにして確実な史実に基づく歴史学に転化させるかに心を砕き、これを実施に移行した。岸は古代の籍帳・宮都・文物についての鋭利な分析を行い、古代政治史研究の水準を現在の高みに引き上げることに成功した。1970年代から1980年代にかけて、平城宮跡をはじめ考古学的な発掘が本格化して新発見が相次ぎ、また木簡研究が古代史研究の新分野として登場するが、こうした気運にのって新たに「木簡学会」を組織した全国の研究者たちは、岸に会長就任を要請、岸もこれを受けて、『木簡研究』を発刊、これを軌道に乗せるなど常にその中心となって活躍し、後進を指導した。岸が教授に昇任した前後は、学生運動の昂揚期に当たっており、荒れる学生を前にして、岸は国史学の主任教授として常にこれに誠実に対処しながら、学問のあるべき形を身をもって示した。

昭和43(1968)年に助教授になった朝尾直弘は、第1講座の岸を助け、実質上は小葉田退官の後を受けて、近世史を講じた。当初は幕末期を研究した朝尾はやがて近世初期に研究の力点を移し、『寛永時代の基礎的研究』(1964年)で学位を得た。昭和55(1980)年に第2講座の教授に昇任した朝尾のもとで、「大学紛争」によって中絶したままになっていた読史会の大会が昭和60(1985)年秋に再開された。また長年の懸案であった文学部附属博物館の改築がなり、蒐集の古文書・古記録類は設備の整った新館の収蔵庫に収納された。朝尾は学生部長、附属図書館長などを歴任する一方、織豊政権、鎖国、身分制、都市論など近世社会に関する理論的、実証的な研究によって長く学界の指導的立場を保ち続けた。

赤松が退官した後の中世史は昭和46(1971)年以来、大山喬平助教授が担当した。大山は農村史を専攻し、中世の荘園研究に力を尽くし、領主制、身分制研究を行い、昭和60(1985)年に教授になり、第1講座を担当した。鎌田元一助教授が岸の後を追って、昭和58(1983)年以来、古代史を担当し、平成6(1994)年には藤井譲治助教授が新たに人文科学研究所から赴任して、近世史

を講ずるようになった。

赤松、小葉田の頃にはまだまだ少なかった外国からの留学生は、岸の時代から数を増やし始め、現在ではアメリカ・ヨーロッパの諸大学における日本学の重鎮・新鋭として活躍する者も少なくない。政治的な理由で実現しなかった韓国からの留学生も1980年代の半ばから増え始め、目を見張るような業績を生みつつある。中国からの留学生も多い。

2. 東洋史学

本学に文科大学が創設された明治39(1906)年は、日露戦争が終了した翌年に当たり、日本が欧米列強と肩を並べていこうとする勃興期であるとともに、国民全体にアジアへの強い関心が高まりつつある時期でもあった。そうした時代世潮を背景として、本学は創設時から特に東洋学の研究を重視する姿勢をとったが、その1つの顕著な表れが東洋史学の講座であった。明治40(1907)年5月、史学科の発足と同時に、まず東洋史学第1講座が開かれ、続いて翌明治41(1908)年5月に東洋史学第2講座、さらに明治42(1909)年5月には東洋史学第3講座と、矢継ぎ早に増設を見た。この結果、東洋史学の講座は、開設間もない時点から史学科最大の3講座制をとることとなり、その後長くその形が続くことになった。発足当時、史学科全体の講座数はわずかに4、次いで2年次にわたる増設で合計8講座となったが、そのうち1専攻で3講座を占める東洋史の比重は、まことに突出していた。

もともと、「東洋史」という名称ばかりでなく、広くアジア諸地域の歴史全体を包含して扱おうとする学問分野そのものが、欧米・ロシア・中国などには見られない日本独特のものである。直接の由来は、日清戦争が勃発した明治27(1894)年に、それまで西洋史中心であった中等学校における外国史教育を再編し、新たにアジア各地への視野を開かせようという目的で設けられた学科目「東洋史」にさかのぼる。

その「東洋史」という専攻が、大学において初めて設置されたのが本学であった。これを皮切りに、東京帝国大学でも東洋史学が設けられ、次第に各

大学にも広がることにもなるが、こうした成立の経緯からも、本学における東洋史学の創設と講座数の重点配備の意味あいは、内外ともに格別に重いものがあった。これ以後、今日に至るまで、本学が日本における東洋史学研究の最も主要な拠点となって多くの優れた人材・研究を輩出し、ひいては世界のアジア史研究においても屈指の存在となる機縁もここに求められる。

教官の構成も、本講座にかけられた期待にふさわしい布陣がとられた。まず、明治40(1907)年10月、内藤虎次郎(1866～1934、号は湖南)が新聞界から講師に迎えられて第1講座を担任、明治42(1909)年9月に教授に就任した。次いで、明治41(1908)年9月に富岡謙蔵(1873～1918)が講師となり、明治42(1909)年4月には東京高等師範学校教授で清国留学、華北踏査旅行から帰国したばかりの桑原隲蔵(1871～1931)が本学教授に就任、第2講座を担当した。さらに、同年9月には羽田亨が講師となって、ここに2教授2講師という創業期の陣容が定まった。

内藤は、希有の中国学者として令名が高かったとはいえ、経歴上では大学卒でもなく、官尊民卑が当たり前の当時の通念では、あくまでも在野の言論・文化人にすぎなかった。その内藤が新設なったばかりの帝国大学の、しかも拠点講座に迎えられたのだから、思い切った起用であった。

着任後の内藤は、江戸期以来の漢学の伝統を引く「支那学」を中心に、中国史の古今を覆う幅広い豊かな学識を生かして、中国史学史・絵画史・清朝開国史などの分野を開拓したほか、それまでの中国史に対する見方が王朝ごとの断代史であったのを打ち破り、特に文化史の観点から宋代以後を中国史上の近世とする説を唱えるなど、中国史全体を総体でとらえようと試みた。独特の直観と冴えを持つその学問体系は、「内藤史学」とも呼ばれ、いわゆる「京都支那学」の一方の旗頭となるとともに、その後の中国史研究の潮流にも大きな影響を与え続けた。

一方、東京帝国大学の漢学科の出身であった桑原は、早くから卓抜な歴史学者の資質を発揮し、既に20歳代で今もなお基本的文献としてその名をあげられる『中等東洋史』上下(1898年)を著して、中等教育における新学科目

「東洋史」が、いったいどんな内容・体系のものであるかを明示していた。これは、同時に、新たな学問分野としての「東洋史」の枠組みをも根本から定める極めて優れたものであったから、いわば桑原は当時にあって、「日本東洋史学」の開祖とでもいえる存在であった。その彼が、日本の大学で最初の東洋史学講座の教授として、輿望を担って迎えられるのは当然のことであった。

その頃の日本の研究は、ともすれば方法・対象ともに、在来の「支那学」の枠の中で自足しがちであった。しかし、桑原は西欧における近代学術としての歴史学研究を強く意識し、かつこれに対抗すべく、両者の長所を融合した日本独自のアジア史研究の道を模索した。研究テーマとして、中国史の本質にかかわる主要な命題に挑んだほか、特に東西交通史の解明に心血を注いだのも、そのためである。西方史料の知見の上に、日本人が得意とする漢文史料を駆使したその実証研究は、近代歴史学としての東洋史学のあり方を身をもって示すものであった。なかでも、博覧・精緻を極めた畢世の大作『宋末の提挙市舶西域人蒲寿庚の事蹟』(1923年)は、草創まもない日本東洋史学の傑作といわれ、世界の学界を驚倒させるとともに、大正15(1926)年には帝国学士院賞を授与された。地域の枠を超えて広くアジア史の全体を見渡しつつ、厳密、堅牢な文献史学の道を開いた桑原こそは、名実ともに東洋史学の定礎者ということができる。

内藤・桑原というまったく異なる両輪の強力な指導のもとに出発した東洋史学講座ではあったが、当分の間は支那哲学・支那文学と同一の研究室であり、「支那学会」の盛況や支那史学専攻コースの設置にも見られるように、哲史文の3科が不可分の関係にある「支那学」の雰囲気が創設当初は濃くただよい、学生の数も少なかった。しかし、大正期になると、まず大正元(1912)年9月に矢野仁一(1872～1970)助教授が来任、翌大正2(1913)年3月には今西龍(1875～1932)が講師となり、さらに大正5(1916)年1月に助教授に昇任、羽田も大正2(1913)年4月には助教授となった。創設以来、宋代史や中国金石学を中心に研究・講義に当たっていた富岡は、就任10年後の大正

7(1918)年12月に死去した。こうした教官の顔ぶれの変化もあり、次第に「支那学」をもって一体視する気風が薄らぎ、逆に哲史文の3科独立の傾向となり、本講座も看板どおり東洋史学の色合いを深めた。加えて大正3(1914)年4月、文科大学陳列館が新築されて史学科が各研究室をここに置くと、東洋史学研究室もその1階東南隅に移転した。教官の研究室も同時に移ったので、名実ともに史学科の一員となり、半世紀に及ぶ「陳列館時代」が始まった。また、そうした反映の1つとして、支那史学専攻コースは先細りとなり、結局わずか6名の卒業生を出しただけで、昭和7(1932)年1月には本講座に吸収されることとなった。

東洋史学第3講座は創設時より空席のままであったが、大正9(1920)年2月、矢野が担当教授に任じられ、ここに3講座制の実を備えるとともに、第1講座は古代史、第2は中世史・北方史、第3は近世史という形ができあがった。

矢野は東京帝国大学史学科(後の西洋史学)の出身で近代西洋諸語に通じていた上、漢文も古典文・吏牘・現代文ともに自在であり、洋の東西にわたる厖大な文献を片端から読渉して、外交史を中心に中国近世史の輪郭を浮き彫りにしようとした。『近代支那の政治及文化』(1926年)、『近代支那史』(1926年)、『支那近代外国関係研究』(1928年)、『近代蒙古史研究』(1940年)、『アヘン戦争と香港』(1939年)などの著作をはじめ、矢野の著書は主なものだけでも20冊を超える。矢野は現実の政治外交問題にも深い関心を持ち、特に戦前は言論・外交界を指導するところがあった。そのため、逆に戦後は不遇となったが、旺盛な研究心は衰えることなく、昭和45(1970)年1月に数え年99歳で他界する直前まで、著作を世に送り続けた。

大正13(1924)年4月、羽田が教授となり、西洋史学教授原勝郎が急逝した後の史学・地理学第1講座を兼担することになった矢野と共に、東洋史学第3講座を分担した。朝鮮史を主な研究対象とする今西は、大正15(1926)年5月に京城帝国大学教授となり、本学教授も兼任して朝鮮史を講じた。この結果、同年8月の内藤の停年退官までわずか3カ月間のことだったとはいえ、

それぞれ別の専攻分野の碩学5人が教授として同時に並び立つという空前の状況が出現した。

昭和に入ると、本講座は昭和6(1931)年前後にまず第1の区切りを迎え、昭和20(1945)年と昭和44(1969)年とには大きな変動の波を受けざるを得なかった。

内藤の退官後、昭和2(1927)年からは、桑原が引き続いて第2講座、矢野は第1講座、羽田は第3講座のそれぞれ担当となり、今西は朝鮮史の担当という形がしばらく続いた。昭和4(1929)年4月には那波利貞(1890～1970)が第三高等学校教授から本学助教授に転任した。那波は大正4(1915)年の本講座卒業であったから、東京大学卒業後に本学大学院に入った羽田亨を別とすれば、いわば生え抜き第1号の教官であった。学生数も、大正末期の卒業生である宮崎市定(大正14年卒)の学年以後は切れ目なく次第に増加する傾向となり、研究室全体が活況に向かいだした。

昭和5(1930)年12月、20年以上にわたり本講座の主柱であった桑原が停年退官した。桑原は半年後の昭和6(1931)年5月に死去し、広汎な原典史料蒐集と世界史の模索という生涯をかけた準備と抱負を停年後に実現することはならなかったが、翌昭和7(1932)年6月、子息武夫により桑原の蔵書およそ1万3,000冊が寄贈された。それらはいずれも欧亜の東西を覆う貴重な根本文献ばかりであり、桑原文庫として長く研究に資せられるとともに、とりわけ本講座の学生にとっては無比の宝となった。

桑原の退官・死去を境に、まず昭和7(1932)年5月に矢野が停年退官、その同月には今西が急逝、さらには退官後も昭和5(1930)年11月まで講師となっていた内藤までもが昭和9(1934)年6月に死去するという事態となった。しかし、羽田は本講座を主宰して、よくこの急変に処した。昭和8(1933)年8月、かねてフランス・ドイツ両国に留学中であった那波が在留期間を短縮して帰国し、昭和9(1934)年12月には第三高等学校教授の宮崎市定(1901～)が本学助教授に来任、昭和11(1936)年2月には2年間のヨーロッパ留学に旅立った。昭和13(1938)年3月には那波が教授に昇任、さらに昭和15(1940)年

6月には田村実造(1904～)講師が助教授に任じられた。昭和4(1929)年の卒業生である田村も含めて、那波以下はいずれも本講座の出身者であったから、ここに東洋史学講座は新たな時代に入った。

主任教授の羽田は、フランスのペリオ、ロシアのラドロフら当代最高の欧人東洋学者と伍して世界のアジア史研究を主導する成果を次々と発表し、日本を代表する学者として、既にその評判は内外に響いていた。さかのぼって19世紀末から20世紀初期のヨーロッパの東洋学界では、内陸アジアの各地から陸続と発見・将来された文献・遺物の研究が盛んとなり、一種のブームが起きつつあった。白鳥庫吉の高弟であった羽田は、こうした潮流を鋭敏にとらえ、たぐいまれな語学力を駆使して内陸アジア史を中心にまったく新しい地平を開拓し、日本の東洋史学を西欧・ロシアと肩を並べ、時には凌駕する水準にまで押し上げた。羽田の研究は、印欧言語学に基づく強靱極まるヨーロッパ流の文献学と徹底した現地語主義に貫かれており、新発見の現地出土文献や碑刻など、「生の材料」を利用する点でも際立っていた。この結果、日本の学界も大いに影響を受け、いわゆる敦煌学やウイグル学などの一種の古文書学が誕生する一方、当時「西域学」「塞外学」などと通称された中央アジアや内陸アジアの研究が一挙に力を得て隆盛に向かった。

この頃、専攻学生は急速に増加し、昭和6(1931)年からは毎年10名を超す卒業生を出すこととなり、大学院学生も常時十数名を数えるに至った。それにつれて学生の研究活動も活発となり、既に昭和2(1927)年10月に当時の学生が「支那学会」のあまりの高踏ぶりを不満として「東洋史談話会」を設け、毎月1回の例会を開いたのを受けて、昭和8(1933)年には本講座卒業生を中心として「東洋史研究会」が創設され、主任教授の羽田を会長に昭和10(1935)年10月からは機関誌『東洋史研究』を隔月に刊行した。これと併せて、『東洋史研究会叢刊』として『満和対訳満洲実録訳稿』(1938年)、『吏学指南』(1951年)、『(大蔵本)明令』(1937年)を出版した。

文学部長として行政手腕を発揮していた羽田は、昭和13(1938)年11月に本学第11代の総長に就任、既に緊張の高まっていた時局の中で最小限度の学問

の自由を確保するため精魂を傾ける日々となった。昭和19(1944)年5月には宮崎が教授となり、第2講座を担当した。

昭和20(1945)年8月、第2次世界大戦の敗北は、日本の東洋史学を取り巻く状況を根本から変えた。日本は大陸から撤退し、現地学術調査などの道は絶たれた。

日本の大陸拡張時代には国家政策にすら近い語感を帯びていた「東洋史」は、その言葉の背景にある政治・社会上の要請を失って単なる学術上の用語となった。さらに新教育科目として「世界史」が出現した結果、国民教育上に占めた特殊な意味あいも消え、逆に「東洋史」はここに初めて純粋な学問分野となった。

日本の東洋史学の中心であった本講座も、当然その大きな波を受けざるを得なかった。大陸政策と無縁ではいられなかった委託事業や関連研究は姿を消し、大陸にいた本講座出身の研究者も引き揚げてきた。しかし、幸いなことに本講座そのものは変わることがなく、学問研究の伝統もほとんど揺らぐことはなかった。むしろ、国家からの強力な要請が消えたために、かえって研究にゆとりが生まれ、発想や主題設定も「満蒙」「東亜」「南洋」といった枠組みにとらわれる必要がなくなった。

この間、羽田は本学総長として敗戦の現実に対処し、混乱が一応収まった昭和20(1945)年11月に総長第2期目の任期1年を余して勇退した。その後は総長在任中より兼務していた東方文化研究所長として、その存続に腐心し、昭和23(1948)年3月、京都大学人文科学研究所の名による統合を実現して所長を辞任した。本講座と人文科学研究所東方部とは羽田の教導を受けること実に大きく、これ以後ますます緊密さを加えて今日に及んでいる。

羽田は本学のために尽瘁する激務の中にあっても、史料の蒐集と研究の指導に努め、数多くの後進を育成した。こうした彼の功績に対し、昭和27(1952)年フランス学士院よりジュリアン賞、翌昭和28(1953)年に文化勲章が授与され、次いで第1回京都名誉市民に選ばれ、さらに昭和30(1955)年にはフランス政府よりレジオン・ドヌール勲章を贈られ、同年4月に死去した。

羽田の諸論文は、その没後に門下生たちの手によって『羽田博士史学論文集』全2巻(1957、1958年)としてまとめられた。なお、年来の心友であった三島海雲を会長とする三島記念財団の寄贈になる羽田記念館が、昭和41(1966)年4月に羽田ゆかりの上賀茂の地に完工し、内陸アジア研究施設として文学部に附置された。

田村は昭和22(1947)年5月に教授に昇任、第3講座を担当した。同年6月には大阪外事専門学校教授の宇都宮清吉(1905～)が本学助教授に来任、漢代社会経済史を講じたが、翌昭和23(1948)年9月に名古屋大学教授に転じた。代わって、翌昭和24(1949)年5月に山口経済専門学校教授の佐伯富(1910～)が本学助教授に任じられ、さらに昭和29(1954)年7月には神戸大学助教授の佐藤長(ひさし)(1914～)が本学助教授に来任した。

昭和28(1953)年8月、羽田が総長に就任した昭和13(1938)年以後ひさしく主任教授として困難な時代をしのいだ那波が停年退官した。那波の学風は、儒者の家柄の出身もあって「支那学」の色彩が濃く、中国古代史の研究から進んで、留学中に筆写、将来したペリオ蒐集の敦煌文献を用いて唐宋時代の庶民生活・寺院経済などの研究を推し進めた。

これ以後昭和40(1965)年3月に宮崎が停年退官するまで、宮崎主任教授のもと、田村・佐伯・佐藤の4人体制が固定した。既に昭和24(1949)年度より学部は新制度に入り、昭和29(1954)年度からは新制大学院修士課程の講義も始まった。

この頃になると、敗戦後の混乱も収まり、大学は新生の息吹に満ち、東洋史研究室もまた旧制・新制の学部・大学院をとりまぜた様々な顔触れの学生・卒業生にあふれ、女子学生も初めて出現した。戦後の東洋史学界では、自由な社会風潮に加え、中国における人民共和国の成立やアジア諸国の独立などの国際情勢も手伝って、従来の歴史像の見直しや歴史の理論化への試行が極度に好まれ、論争・論戦が俄然にぎやかとなった。東洋史研究室も無縁ではいられなかったが、文献史学と実証主義の伝統は堅持され、教官・学生ともども研究室全体が厳しさの中にも覇気にあふれて自由闊達に研究・勉学

に励んだ。いわばこの宮崎主任時代は、本講座の歴史の中でも、最も安定、充実した幸福な時期であり、5教授並立を頂点とする内藤・桑原時代の25年、戦中・戦後の苦難と発展とが抱きあわせになっていた羽田主導時代の20年に比べても、東洋史研究室の黄金時代といって差し支えない。

宮崎は最初期の卒業生として、師であった内藤・桑原・矢野・羽田の4名の学風すべてを受け継いだ上に、天賦の才と不撓の精励をもって、空前の規模と水準の巨大な歴史世界をつくりあげた。宋代社会経済史の研究は内藤の近世説を裏付け、飛躍、発展させるためであり、東西交通史・西アジア史への関心と東洋史体系化への志向は桑原の抱負を実現するためであり、雍正硃批諭旨や太平天国などの研究は矢野の継承を秘めたものであり、そして欧米を中心とする国際学界への視野は羽田を引き継ぐものであった。宮崎の研究は、その基礎に「京都支那学」の最も醇良な部分を持ちつつも、桑原・羽田と受け継がれた東洋史学の構想を一身で大成するものであり、その中には世界史への意図が強く込められている。宮崎は『九品官人法の研究』(1956年)によって昭和32(1957)年に日本学士院賞を授与され、『アジア史論考』全3巻(1976年)によって昭和53(1978)年にフランス学士院よりジュリアン賞を授与され、さらに平成元(1989)年には文化功労者として顕賞された。前後70年にも及ぶ全業績を網羅した『宮崎市定全集』全24巻別巻1は、各巻末に解説を兼ねた書き下ろしの自跋を付して、満90歳を迎えた平成3(1991)年秋から刊行を開始し、平成6(1994)年2月に完結した。

なお、宮崎は羽田死去の後を受けて、長く「東洋史研究会」会長を務めた。今や『東洋史研究』は世界屈指の専門研究誌に発展し、毎年1回11月3日に京都で開催される「東洋史研究会」大会はこの分野では国内外で最大の学会となり、そして羽田・宮崎門下の研究者たちの研究成果を集める『東洋史研究叢刊』は50冊を超えて続刊中である。また、宮崎は昭和32(1957)年の西・南アジア史コースの設置、さらには退官後の昭和44(1969)年に結実した西南アジア史学講座の開設にも力を尽くした。

この前後、昭和32(1957)年3月に佐伯が教授となって第3講座を担当、昭

和37(1962)年1月には萩原淳平(1920～)が本学助教授となり、昭和41(1966)年6月には佐藤が第1講座担当の教授に昇任した。さらに、昭和43(1968)年4月に竺沙雅章(1930～)が人文科学研究所助教授より本講座助教授に転じ、同年3月には田村実造が停年退官した。

田村は遼代研究から北アジア諸民族全般の研究へと進み、明清時代の満蒙史に及んだ。昭和14(1939)年に実地調査した遼代帝王陵に関する調査報告『慶陵』全2巻(1953年)によって昭和28(1953)年に朝日文化賞、翌昭和29(1954)年には日本学士院恩賜賞を授与された。『中国征服王朝の研究』全3巻(1964、1971、1985年)は遼金元に関する主要な論文を収載したものである。また、羽田以来の一大修史事業『明代満蒙史料』全18冊(1954～59年)と『明代満蒙史研究』(1963年)をとりまとめ、次いで『元史語彙集成』全3巻(1961～63年)を完成して、いずれも本学部から刊行した。

竺沙が就任した頃より、大学紛争が起こり、本講座は造反有理を唱える者の一拠点となり、研究室は荒廃した。本学全体の混乱が一応鎮まってからも本講座での余震は続き、佐伯主任教授以下の辛苦と研究室全体の打撃は大きかった。

昭和49(1974)年の春、研究室がようやく落ち着きを取り戻した頃、佐伯が停年退官した。佐伯は宋代社会経済史を中心に近世中国の独裁君主制を支えた専売制度の研究に当たり、特に塩法について『清代塩政の研究』(1956年)、『中国塩政史の研究』(1987年)があり、後者によって日本学士院恩賜賞を授与された。

昭和53(1978)年の春に佐藤が停年退官した。佐藤はチベット史研究の開拓者で、蕃漢史料を駆使した『古代チベット史研究』(1957～59年)、『中世チベット史研究』(1986年)の声価は高く、また精緻な言語処理と地名比定を基礎とする『チベット歴史地理研究』(1978年)により昭和54(1979)年度の日本学士院賞を授与された。

佐伯・佐藤の退官頃より教官の異動が頻繁となり、まず昭和50(1975)年10月に人文科学研究所教授の島田虔次(1917～)が第3講座担当の教授として転

任(昭和56年3月に停年退官)、昭和53(1978)年4月には萩原が第2講座担当の教授に昇任(昭和59年3月停年退官)、同年11月には谷川道雄(1925～)が名古屋大学教授より第1講座担当の教授に来任(平成元年3月停年退官)、さらに昭和56(1981)年4月に竺沙が第3講座担当の教授に昇任(平成5年3月停年退官)、昭和60(1985)年4月には天理大学教授の河内良弘(1928～)が来任して第2講座担当の教授となった(平成4年3月停年退官)。

島田は『中国における近代思惟の挫折』(1949年)、『朱子学と陽明学』(1967年)などの著書で知られる中国思想史研究の大家であり、本講座での在任期間は短かったが、中国学全般にわたる深い造詣と卓抜な教育者としての資質で多くの優秀な研究者を育成した。田村の北アジア史研究を引き継ぐ萩原は元明時代のモンゴル史を専門とし、『明代蒙古史研究』(1980年)はその主著である。『隋唐帝国形成史論』(1971年)をはじめ幾多の著書を持つ谷川は、六朝隋唐史を中心とする研究で名高く、各種の学会・研究会を主宰している。河内は女真史・満洲語研究で知られ、『明代女真史研究』(1992年)の大著がある。さらに、中国書誌学・文献学に関する広汎な素養でも知られる竺沙は、敦煌文献の研究や宋代を中心とする社会史・宗教史などの幅広い研究領域を持ち、『中国仏教社会史研究』(1982年)はその成果の一である。25年の長きにわたり、大学紛争をはじめ多事であった東洋史研究室を支えた功績は大きい。

現在のスタッフは、平成2(1990)年4月に滋賀大学教授より来任した秦漢史の永田英正を主任教授に、平成5(1993)年4月に人文科学研究所教授から第2講座担当の教授に転任した隋唐史の礪波護、昭和62(1987)年4月に富山大学助教授から来任した明清史の夫馬進、そして平成4(1992)年4月に京都女子大学助教授から来任したモンゴル時代史の杉山正明の4名である。

文化大革命が終わって中国が門戸を開いてから、日中双方の学者・学生の往来、交流が活発となり、本講座の教官・学生・出身者の相当数が中国に留学、滞在の経験を持つようになった。人文科学研究所東方部も含めて、中国学者の来訪は日常事となり、戦後30年の間、良くも悪くも中国の風土・現実

を夢想しながら研究に励んだ時期とは状況が一変した。それとともに、日本の東洋史学界の全般に、「戦いすんで日が暮れて」の気配が急速に広まりつつある。その一方、ソ連の崩壊とその後の民族純化の嵐は、ユーラシアにおける国家・社会・民族などの既成の概念を根本から揺るがしている。歴史家たちは自信を失い、日本の学界の一部には、地域研究の名による看板のすげかえに熱中する動きも見える。

この時に立って100年の歴史を振り返ると、本講座が貫いてきた東洋史という広やかな枠組みによる発想・研究こそ、人類の叡知と営みの跡を探るにふさわしい。地味ではあるが、確かな根拠を持つ文献史学の道は、時を超えて変わらぬ価値を持つ。近年は、本講座への留学生はアメリカ・中国・台湾・韓国などを中心に常時10名を超し、いずれも帰国後は各国屈指の研究者となっている。東洋史学の世界でも、言語・国境・利害などの壁を取り外した真の意味での学術・研究の国際化は、もはや目の前に迫っている。それは厳しい国際競争の世界でもある。われわれは、本講座100年の伝統に自足することなく、将来を見すえ、優れたものは優れたものとする真剣勝負の時代を自らの力で開いていかなければならない。

3. 西洋史学

本学に西洋史学の講座が「史学地理学第1講座」として設置されたのは、明治40(1907)年5月のことであり、次いで明治42(1909)年には第2の講座が「史学地理学第3講座」として増設された。日本の学界に、国史学、東洋史学に続いて、やや遅れて西洋史学という名称や学問領域が成立したのは、明治20年代以降のことだといわれている。明治20(1887)年にドイツの歴史家リース(L. Riess)が来日し、明治35(1902)年まで東京帝国大学の教師として、とりわけ根本史料に基づく実証主義史学の方法を教えたが、本学の西洋史学を創始した原勝郎と坂口昂は、いずれもリースの弟子である。しかし日本人が西洋史について根本史料に基づいて独自に研究することは、当時は不可能であったから、西洋史研究者の課題は、西洋の学者の研究成果を吸収して、

これを日本の学界に紹介すること、さらには西洋における歴史研究の方法を学んで日本に導入することに限られていたといえよう。

初代の教授原勝郎(1871～1924)は、学生時代から西洋史学を専攻していたが、その最初の著作(博士論文)は『日本中世史』(1906年)である。これは根本史料に独自の解釈を下しつつ、西洋史上の「中世史」の概念を初めて日本史に適用して、新しい日本史像を描いたものである。原はその後直ちに欧米に留学し、明治42(1909)年に帰国して教授に就任し、最近世史を担当したが、少なくとも明治末年には、西洋中世史や宗教改革史についても講義している。しかし原の本領は、先人の研究に頼らず史料から直接に歴史を描き出すことにあった。それゆえ世界大戦の予兆が見え始めると、直ちにその研究に着手し、戦中戦後に関係諸国が公表した外交文書や各国新聞など、厖大な史料を比較検討して、大正9(1920)年4月より大正12(1923)年11月まで連続して「世界大戦史」を講じた。この講義は原の病死により中断され、講義ノートは900頁余りの大著として残された。日本の西洋史家が、根本史料の読解を通じて果たした最初の顕著な成果である。しかし原の最も有名な代表作は『東山時代における一縉紳の生活』(1917年)であり、根本史料の読破により、『世界大戦史』(1925年)とはまったく別の小世界を描き出している。

他方、講座開設と同時に助教授として着任し、3年間のヨーロッパ留学後明治45(1912)年教授に昇任した坂口昂(1872～1928)は、泰西史家の厖大な業績を正面から受容した上で、東洋人として一歩進んだ世界史的立場から、清新な西洋史像を描き出した。その講義ノートに補筆して、『世界に於ける希臘文明の潮流』(1917年)、『概観世界史潮』(1920年)等を公刊し、また生気溢れる講義を行ったため、その名は全国に知れわたった。かくして、その学識と徳望を慕って集まる学生の数も増え、講座の学風も固まりつつあったが、その頂点の昭和3(1928)年1月に坂口は急死した。坂口自身は古代エジプトから近代西欧に至るまで、博大な知識を持って学生を指導していたが、その晩年の門下生の中からは特異な領域の専門研究者が現れることになった。例えば中原與茂九郎はシュメール史の面で、岡嶋誠太郎はエジプト史の面で、

それぞれ根本史料に基づく研究を推進することになる。

坂口教授の没後に残されたのは、植村清之助(1886～1928)と時野谷常三郎(1881～1942)の両助教授だけであった。植村は明治44(1911)年に東大を卒業後、京大の大学院に入学して上記の両教授のもとで勉学し、助教授にまで昇任したが、学位論文「中世初期に於ける国家的社会的変遷の研究」を完成しかけた昭和3(1928)年10月に、数え43歳で早逝した。この論文は、遺著『西洋中世史の研究』(1930年)に収められているが、ドイツを主とする西欧学界における先行学説を再検討し、ラテン語その他の史料をも直接利用して、精密な考証を進めたものであって、日本における西洋中世史研究の最初の堅実な成果であった。

かくして昭和3(1928)年末からは西洋史の教官は時野谷助教授ただ1人となったので、考古学の濱田耕作教授が西洋史学の教授を兼務し、講座の再建を図った。その結果、昭和5(1930)年東北帝国大学から原隨園(1894～1984)助教授が着任し、昭和8(1933)年時野谷と並んで同時に教授に昇任する。時野谷は近代政治史の堅実な研究者であり、主著『ビスマルクの外交』(1945年)はその温厚な学風を偲ばせる19世紀ドイツ政治史研究の労作である。一方、原は昭和32(1957)年停年退官するまで、戦中戦後の多難な時期を含め、27年の長きにわたって研究室を指導し、本講座の発展の礎石を置いた。専門の古代ギリシア史研究においては、欧米の学説の紹介や祖述に甘んじることなく、古典史料に沈潜して個性的に歴史に迫ろうとした。この独特な学風は、論文集『ギリシア史研究』全3巻(1942～44年)によく示されているが、当時としては非常に大胆な試みであった。なお、原が昭和10(1935)年に公刊した『新義西洋史』は、西洋史の大要を鋭い直感によって把握し、格調高く叙述したもので、前述の坂口の『概観世界史潮』に代わって本講座の新しい学風を世に示したものである。

かくして西洋史学講座は陣容を立て直して再出発したが、これと前後して世界情勢も大きく変化したので、昭和8(1933)年という年は西洋史研究室にとって大きな転換点となった。やがて欧米諸国への国費留学が絶え、昭和15

(1940)年から約10年間は洋書の輸入も途絶えるので、半ば鎖国状態での西洋研究となる。しかし他面では、講座開設以来の卒業生の数も増えていたので、同窓生だけでも学会らしきものを組織できるようになった。西洋史研究室では、明治末年以来、正規の授業とは別に「読書会」を組織し、学生による研究発表が行われていたが、昭和8(1933)年からは例会のほかに毎年11月3日に「読書会大会」を開き、教官や同窓の先輩も研究発表することになった。この「読書会大会」は、その後他大学出身者をも交えた研究交流の場となり、第2次大戦後は西洋史研究者の激増とともに専門学会としての存在意義を高めて、今日に及んでいる。

この間、昭和17(1942)年には鈴木成高(1907～88)、翌昭和18(1943)年には井上智勇(1906～84)がそれぞれ助教授として来任し、本講座は一層の充実を見た。鈴木は専門の中世史の分野で大著『封建社会の研究』(1948年)を著したほか、ヨーロッパの史学史や歴史思想に関しても鋭い時代感覚と哲学的理解とに基づく斬新な著作を次々に発表した。不幸にして鈴木は昭和22(1947)年京大を去ったが、その影響は当時の若い学徒に広く及んだ。

昭和23(1948)年教授に昇任した井上の専門は古代ローマ史であり、特にその社会経済的側面について根本史料により研究を深めて、その成果を『ローマ経済史研究』(1948年)として刊行した。井上はまた『地中海世界史』(1947年)などの著書において、古代世界の全体的構造や古代と中世の連関の問題についても独自の明快な解釈を示したほか、京大在職最後の10年間ほどは初期キリスト教とローマ帝国との関係に関する研究に精力を注いだ。

さて、第2次大戦後、旧制大学の末期には、西洋史学専攻の学生や大学院生が急増し、しかも昭和24(1949)年からは各地に新制大学が設置されたため、大学教員として西洋史の研究者となる者も飛躍的に増えた。そのため研究室の内外は活気に満ち、戦後の政治社会状況とも関係して、近代化や民主化の問題が多くの関心を集め、マルクス主義的社会経済史や人民闘争史が盛行を見るというように、学界には共通の問題意識が存在していた。その頃本講座の教授陣は原・井上両教授だけで、古代史に偏していたが、昭和27

(1952)年からフランス近代史専攻の前川貞次郎(1911～)助教授が加わり、昭和31(1956)年からは越智武臣(1923～)が専任講師次いで助教授としてイギリス中世・近世史を講じ始め、さらに昭和34(1959)年にはアメリカ史専攻の今津晃が助教授として大阪大学から来任した。今津は昭和42(1967)年新設の現代史学講座の教授に就任するが、これら近代史専攻教官の清新な講義と熱心な研究指導は、やがてこの分野において多くの研究者を輩出することになった。

なおこれより先、昭和23(1948)年に本講座のスタッフを中心に京大関係の西洋史研究者の尽力によって、西洋史の全国的学会として「日本西洋史学会」が創立され、学会誌『西洋史学』が刊行され始めたことを記しておかねばならない。本誌の編集事務局は、現在は大阪大学にあるが、昭和45(1970)年までは本西洋史研究室に置かれていた。また昭和25(1950)年に京大で始まった「日本西洋史学会」の年次大会は、以後全国の大学回り持ちで開催され、平成6(1994)年現在で44回を数えている。

さて、昭和32(1957)年教授に昇任した前川の研究は、フランス革命史とヨーロッパ近代史学史を中心とするものであった。その主著『フランス革命史研究』(1956年)は、19～20世紀におけるフランス革命史学の展開を各時期の政治や思想との関連のもとに精細に分析した史学史的労作である。前川は、従来わが国では英・独両国史に比べて立ち遅れていたフランス近代史研究の発展に力を尽くすと同時に、伝統的な西ヨーロッパ中心の世界史像を批判しつつ、現代的観点に立った新しいヨーロッパ史像の探究にも精力的に取り組んだ。次に昭和45(1970)年教授に昇任した越智の専門は16～17世紀イギリス史であり、大著『近代英国の起源』(1966年)において近代イギリスの形成を担った社会層としてのジェントリーの歴史的役割を政治・経済・文化の3側面より解明して、第2次大戦後のわが国におけるイギリス史研究に一時期を画した。越智の研究方法の特色は、近代イギリスの形成過程を多面的かつ総合的に把握すると同時に、これを同時代の世界史の動きとも密接に関連づけて理解しようとする点にあり、かかる観点から大航海時代イギリスの海外発

展に関する研究にも力を注いだ。

昭和45(1970)年井上の退官後古代史を担当したのは、同年助教授として来任し、昭和54(1979)年教授に昇任した藤縄謙三(1929～)である。藤縄の専門はギリシア史学史および社会史であるが、ツキュディデスやホメロスの研究に続いて長年にわたりヘロドトス研究に取り組み、その成果を大著『歴史の父ヘロドトス』(1989年)として上梓した。本書はこの古代ギリシア最大の歴史家の著作を徹底的に分析、再整理して、その全体像の解明を試みたもので、古典作品の深い読みと精緻な分析に基づきながら、しかも高度に独創的な解釈を下すという、藤縄の学風の特色をよく示すものである。

最後に、西洋史の教育体制についてふれておくと、昭和28(1953)年新制度の大学院が発足し、従来の大学教育よりも高度の専門教育を目指すことになった。しかし本講座の場合、研究対象は広大であるにもかかわらず、講座の規模は創設以来変化がなく、原則として教授・助教授合わせて3名、助手1名であり、この人員で学部学生に加えて大学院生の研究をも指導し、高度の専門教育を行うことは不可能に近かった。特に新制大学院発足後の数年間(昭和30～34〈1955～59〉年)は表2－3が示すように入学者が多く、しかもその専攻領域は非常に多様であったから、彼らに対して専門的な指導を行うことには多大の困難が伴ったのである。

このような状況を少しでも改善するため、昭和30年代から専門的訓練の場としての大学院演習の充実が図られてきたが、昭和45(1970)年度から次のようなカリキュラムが発足することになった。西洋史専攻生は、3回生で古代・中世・近世・現代に分かれて、各担当教官の演習(ただし現代史演習は現代史学講座提供のもの)に出席し、各時代の研究方法の指導を受ける。4回生は全員集まって卒業論文執筆のための演習を受ける。大学院生は集まって、助手をも含めた教官全員の前で、論文執筆のための研究発表を行い、批判を受ける。この3回生から大学院生に至る3段階の「演習」が教育体系の柱であり、各学生は各自の専門分野に必要なその他の素養を「西洋史学」のカリキュラムの内部または外部の授業で身につけることになる。このシステムは

表2-3　西洋史学大学院生数の変動

年　　度	修士課程修了者	博士後期課程編入学者	左のうち研究職就職者
1955～59年	20	0	16
1960～64年	9 (1)	1	6
1965～69年	14 (3)	0	12 (2)
1970～74年	12	0	9
1975～79年	12 (2)	0	10 (1)
1980～84年	8 (1)	0	8 (1)
1985～89年	12 (3)	0	11 (2)
1990～94年	9 (4)	2	0
計	96(14)	3	72 (6)

注　数字は1994年3月末現在。
　　(　)内は女子で内数。
(資料)　京都大学西洋史研究室編『読書会大会五十年の歩み』(1982年)、同『読書会だより』第25～34号(1982～93年)。

その発足時には大学紛争直後のためもあって学生の出席率が低く、順調に進まなかったが、数年後には軌道に乗り、今日に至っている。現在(平成6〈1994〉年度)では、フランス近代社会経済史専攻の服部春彦教授が近世史演習を、ドイツ中世政治・社会史専攻の服部良久助教授が中世史演習を、帝政期ローマ政治・社会史専攻の南川高志助教授が古代史演習をそれぞれ担当している。大学院進学者の数は、昭和45(1970)年以降年平均2～3名でほぼ安定しているが、近年の現象として、大学院生の専攻領域が一段と多様化し、かつてはまれであったビザンツ史、東欧史、南欧史などの研究者が増加したこと、女子の進学者が著増を示していること、さらに大学院在学中にヨーロッパの大学に留学する者が増加していること、などをあげることができよう。

4. 現代史学

現代史学講座は、昭和41(1966)年4月、文学部史学科においては50年ぶり

の新規講座として設置された。その設立時期は、日本が昭和39(1964)年開催の東京オリンピックを境に、第2次世界大戦後の高度成長時代に突入し、日本経済と世界経済が密接に接合していった時期であった。また国際社会では、アジア・アフリカ等の旧植民地が相次いで独立するなど旧来のヨーロッパ中心的世界秩序が解体し、情報・交通手段また経済・文化面において世界の緊密化が進む一方で、米ソ2大国の優位とイデオロギー的対立が、世界政治になお大きな影を及ぼしていた。そうした国際社会の緊密化と世界政治の緊迫した状況は、「現代史の基本的特徴は世界史の一体化にある」と本講座設置理由書が記したとおりに、従来の東西両地域に分けて世界を眺める歴史研究では現代世界史の把握が困難であるという理解を生み出していた。本講座設置の基本理念であった。

昭和42(1967)年2月、初代の主任教授に当時西洋史学講座助教授であった今津晃(1917～)が昇任した。今津はこの後昭和56(1981)年の退官まで14年間にわたって、草創期の講座を文字どおり全身全霊を傾けて指導しその基礎を築いた。彼の厳しい研究態度とまた温かい人柄は学生を引き付けてやまなかった。20世紀の現代は、ヨーロッパ以外の地域が自己の主体性を主張する多元化した時代であり、しかもそこでは、地域の動向が世界の動静と不断に連関しているととらえる今津の20世紀史研究は、さらに世紀後半の宇宙開発や地球環境問題の発生を視野に入れる過程で、現代世界史を地球規模の人類史としてとらえる視点へと行きついていった。20世紀史へのそうした理解を根底に、今津が第1次世界大戦以降の20世紀世界史を描きぬいた著作が、昭和48(1973)年に上梓された『概説現代史』であった。ちなみに今津は『アメリカ革命史序説』(1960年)によって学位を取得した、元来が独立革命研究を専門としたアメリカ合衆国史研究者であった。が、彼は本講座担当を機に、アメリカ合衆国が世界史に及ぼした大きな影響に関心を寄せ、ひいては20世紀世界史の全体的把握を課題とする研究に挑んだ。今津がたどったこの研究経歴の影響を受けて、講座には以後、たとえ地域史を主たる研究テーマに選ぶにしても、世界的規模で働く政治・社会・文化の影響やそれらの相関性の把

握を通して各地域の歴史態様をより深く理解しようとする、地域史研究の独自の姿勢が引き継がれていった。

講座に7名の第1期専攻3回生が進学し、講義が始まったのは、昭和42(1967)年4月であった。「団塊」と呼ばれる第2次大戦後のベビーブーム世代のうち、特に最大人口であった昭和22(1947)年生まれの学生が専門課程に進学したのが、翌昭和43(1968)年であった点を想起すれば、講座にとって草創の時に当たった昭和40年代半ばから昭和50年代前半の時期が、また大学全体にとっても紛争を伴った大きな変動の時代であった事実が知られるであろう。高度成長に向かう日本経済と社会の激しい変化は大学の大衆化と重なることで、学生に多くの政治・社会問題への関心を呼び起こし、また時代に即応する大学改革の論議を生みだしていった。大学がこうして、変動する社会の影響を全面的に被り、その渦に包含されることが常態化した時代状況の中で、現代史学講座は、その研究対象がまさに変動する「現代」に直接つながる歴史であったがゆえに、多感な多くの専攻学生を抱えるなど、時代の激しい波頭を正面から受けた。

昭和49(1974)年と昭和50(1975)年の両年には14名の新3回生が進学するなど、講座には毎年、収容人員いっぱいの10名あるいはそれを超える学生が進学した。昭和45(1970)年4月に初めて1名の入学者があった大学院学生もその後増加し、昭和50年代からは毎年10名前後が在籍した。その結果、例えば昭和55(1980)年の在籍者数は、学部学生37名、大学院生9名、聴講生4名、研修員2名、合計52名という多人数を数えた。彼らはアメリカ・日本・中国・ヨーロッパなどと実に広い地域に及ぶ現代史に関心を持った。地域的に広がりを持ったばかりか、研究対象も政治史から経済史、社会運動史、思想史、社会・文化史に至るまで歴史研究のあらゆる分野を含んだ。1講座の枠でかかる多数かつ多様な学生を指導することは極めて困難な教育責務であったが、今津、また昭和46(1971)年1月に助教授に就任した松尾尊兊(たかよし)(1929～)は、講座の伝統に太い支柱となる理念を確立すべく多大の努力を払った。彼らがたえず強調したのは、20世紀の歴史をいかなる思想傾向を持って考える

にしても、あくまで史料に即して実態的に把握する、実証的歴史研究の重要性であった。そのためには資料の広範な蒐集が必要であったが、その趣旨で、コミンテルン文書、日本帝国議会議事速記録・同委員会議録、またアメリカ大統領公式文書集などが蒐集された。教育・研究理念の確立と史料蒐集において今津および松尾が残した足跡は大きい。ちなみに松尾は本講座助教授に着任する以前は、人文科学研究所に所属した日本近現代史、特に大正期の専門家であった。彼は周到な調査と緻密な史料読解によって大正デモクラシー研究に新境地を開く、気鋭の実証史家として高い評価を得ていた。

ところで、昭和46(1971)年以降松尾を得たことで現代史学講座は、狭義の専門としてはアメリカ合衆国史と日本近現代史という、異なる2地域の専門家が講座の基本スタッフを構成するという、わが国国立大学史学科において最もユニークな編成を持つ研究室へと展開した。が、今津と同様松尾の視野も、単に狭い領域の日本史に留まるものではなかった。松尾が講座に転じた後に上梓した最大の業績は『普通選挙制度成立史の研究』(1989年)であったが、この普通選挙制度という、20世紀国民国家における民主制の基幹である制度が、近代日本においていかなる政治過程をたどって成立したかを明らかにした彼の研究は、日本史分野の卓越した研究業績であったばかりか、そのテーマの普遍性のゆえに重要な世界史的意義を含んだ研究であった。

松尾は昭和56(1981)年、今津の退官の後教授に昇任した。その後平成5(1993)年3月の退官までの11年間彼は、自らの精力的な研究に加えて、史料の精読を踏まえた創造的議論の構築を学生に目標として説き、講座の学風確立に多大の足跡を残した。なお、今津および松尾の2教官のほかに、昭和42(1967)年の開講以来現代史学講座においては、人文科学研究所あるいは教養部の関係教官が西洋・日本・東洋の現代史講義を毎年担当した。設置から四半世紀の間、現代史学講座が学内におけるそうした多数の教官の協力によって運営されてきた事実も、ここに記されるべきであろう。

松尾の退官後、平成5(1993)年4月紀平英作が助教授より教授に昇任した。紀平は今津退官後の昭和58(1983)年に、本講座の助教授に就任した20世

紀アメリカ合衆国史の専門家であって、主著として『ニューディール政治秩序の形成過程の研究』(1993年)がある。

平成6(1994)年3月、講座設置から26年たった時点で、現代史学講座が学士学位取得者として送りだした卒業生は215名、大学院博士課程修了者は26名を数えた。彼らの専門は日本近現代史から中国を中心とするアジア史、さらにはフランス・ドイツ・ソヴィエト・アメリカ合衆国現代史と実に多様である。

振り返れば、卒業生のそうした地球大に広がった研究対象が、この間現代史学講座が目指した方向と学問的営為の内容を如実に物語っている。

5.　西南アジア史学

西南アジア史学講座は、西アジア・中央アジアの歴史と文化の研究・教育を推進するため、昭和44(1969)年に開設された。イスラーム世界史・オリエント史というわが国では新しい学問分野の開拓と確立を目指す、全国でも唯一のユニークな講座である。本講座の開設、ならびに本講座の母体となった西・南アジア史コースの開設(昭和32年)は宮崎市定(東洋史学)、足利惇氏(梵語学梵文学)、中原與茂九郎(西洋史学)らの尽力に負うところが大きいが、これも本学における桑原隲蔵や羽田亨(共に東洋史学)の先駆的研究活動を継承したものといえる。本講座の歴史はいまだ浅いといわざるを得ないが、本講座は桑原に見られる緻密な考証や羽田に見られる現地語史料重視の姿勢など、本学東洋史の優れた学問的伝統を確実に受け継いでいる。

昭和45(1970)年、本講座の初代担当教授に迎えられたのは、羽田亨の子、羽田明(1910～89)である。羽田はわが国におけるイスラーム化以降の中央アジア史研究の、文字どおりの開拓者であった。若かりし頃パリ大学に留学してトルコ学の泰斗J. ドゥニのもとで学び、帰国後、中央アジア史、トルコ民族史、東西交渉史の領域で多彩な研究を発表したが、とりわけ「明末清初の東トルキスタン――その回教史的考察」は中央アジア史におけるイスラームの重要性を指摘した画期的論文である。羽田の学問は透徹した洞察と雄大

な構想に特色があるが、それを支えたのが史料に対する厳格な態度である。羽田はトルコ語、ペルシア語、アラビア語などで書かれた現地語史料の重要性にいち早く注目し、辞書や文法書も十分にない困難な環境の中で、難解な文献に敢然と取り組んだ。この意味で羽田は中央アジア・イスラーム文献研究の先達であり、羽田の存在を抜きにして、今日のわが国の中央アジア史学界における現地語文献利用の盛況を考えることは不可能である。昭和57(1982)年、羽田の主要な論文を収めた『中央アジア史研究』が刊行され、中央アジア史研究者必携の書となっている。

昭和47(1972)年、羽田教授のもとで助教授に迎えられたのが、東洋史学講座出身の間野英二である。間野は着任までの3年間、ハーヴァード大学に留学し、O. プリツァクのもとでトルコ学を、R. N.フライのもとでイラン学を修めた。間野の専門領域は羽田と同じくイスラーム化以降の中央アジア史、トルコ民族史であるが、特にティムール帝国史の研究者として内外に知られている。ティムール帝国史のわが国最初の専門家でありながら、留学時代に身につけたトルコ系諸語やペルシア語の読解能力をもって実証的研究を積み重ね、その成果は欧米の学界からも注目されている。また主著『中央アジアの歴史』(1977年)は、従来のシルクロード史観と決別し、遊牧地帯とオアシス定住地帯の南北関係を軸に描いた中央アジア通史で、学界に大きな反響を呼び、その後のわが国における中央アジア史研究の趨勢を決定づけた。さらに間野は、ティムール朝の王子でムガール帝国の始祖バーブルがチャガタイ・トルコ語で記した回想録『バーブル・ナーマ』の重要性を看破し、史料として活用すると同時に文献学的研究にも精力を傾けた。間もなく公刊される校訂本、総索引および日本語訳注は、欧米にも類を見ない労作であり、研究史上に特筆すべき業績となることは疑いを容れない。間野は昭和61(1986)年教授に昇任し、現在もその若々しい情熱をもって研究と専門教育に邁進している。

羽田明の後、本講座の担当教授を務めたのが、昭和50(1975)年に北海道大学より招かれた本田實信(1923～)である。本田は若かりし頃ケンブリッジ大

学に留学し、碩学V. ミノルスキーのもとでイラン学を修め、わが国におけるイスラーム化以降のイラン史研究の開拓者となった。特にモンゴル帝国時代のイラン史、イル・ハン国史を重点的に研究し、モンゴル、イラン、イスラームの3要素に着目して明快な歴史像を提示するとともに、イル・ハン国の宰相ラシード・アッディーンの筆になる『ジャーミ・アッタヴァーリーフ』等のペルシア語諸文献の研究に並々ならぬ情熱を注いだ。モンゴル帝国史研究におけるペルシア語史料の有効性がわが国の学界で広く知られるようになったのは、ひとえに本田の功績である。本田の主要論文は平成3(1991)年『モンゴル時代史研究』として再刊されたが、そこに収められた、モンゴル帝国史やイル・ハン国史に関する基礎的研究、文献学的研究は後進学徒の進むべき道を示す大きな道標である。また本田が、その広範な学識と深い歴史理解に基づいて著した『イスラム世界の発展』(1985年)は、東方のイスラーム圏の動向に十分注意を払った斬新なイスラーム史であり、イスラーム世界の研究を志す者にとって最良の入門書である。

本田、間野の指導のもと、本講座では多くの学生がモンゴル侵入期以降のイラン・中央アジア史の研究を志し、現在学界で活躍している者も少なくない。本田と間野に共通するのは、開拓者の名にふさわしく、厳密な史料批判と緻密な文献読解を基礎に、時流から超然として根本的諸問題の解明を目指す研究態度であり、その学恩を受けて本講座から育った研究者たちは、精度の高い実証的研究で内外に知られている。その中で最も将来を嘱望されている久保一之が、平成6(1994)年、助教授に就任し、初めて本講座出身の専任教官が誕生した。久保の専門領域はティムール帝国末期以降の中央アジア史であるが、特に、当時の最大級の都市ヘラートを取り上げて、遊牧軍事集団と定住民社会の接点や学芸保護の実態を研究し、わが国における中央アジア史研究に新機軸を打ち出した。また、久保はわが国の中央アジア史研究者として初めてタシュケントに留学し、手工業研究で知られるR. G. ムクミーノワに師事して史料研究とソ連学界の研究成果の吸収に努めた。本講座出身の研究者としては久保のほかに、羽田正(東京大学)や安藤志朗(羽田記念館)の

ように、ヨーロッパ留学の成果を生かして欧文で研究書を著すなど、ヨーロッパの学界での活躍が目覚ましい者もいる。

本講座における専門教育・研究者育成に関しては、本学出身の研究者たちの協力を抜きにして語ることはできない。トルコ学の小田寿典(豊橋女子短期大学)、濱田正美(神戸大学)、イラン学の勝藤猛、岡崎正孝(共に大阪外国語大学)、主著『初期イスラム時代エジプト税制史の研究』やイブン・ハルドゥーン著『歴史序説』の翻訳など画期的諸業績を誇る、アラブ学の森本公誠らは、いずれも東洋史学講座の出身で、長年非常勤講師として本講座の教壇に立ち、その学識と経験をもって学部学生・大学院生の指導に尽力した。古代オリエント史の分野では西洋史学講座出身の世界的シュメール学者、前川和也(人文科学研究所)という最高の協力者を得ている。前川は、その著作のほとんどが欧文という国際的な研究者であり、独自の方法でシュメール社会を研究し、世界的に極めて高い評価を得ている。また最近では、堀川徹(京都外国語大学)ら本講座出身者も後輩の指導に当たっている。授業以外でも、本講座の助手や大学院生を中心に研究会・輪読会が活発に開かれ、学生たちに鍛錬の場が提供されている。なかでもイスラーム地理書・旅行記研究会は有意義な活動を続け、アブー・ドゥラフ著『イラン旅行記』の訳注という、まとまった成果を学界に発表した。

開設以来しばらくの間、本講座に所属する学生は毎年2～3名にとどまっていたが、社会における西アジア・中央アジアに対する関心の高まりを反映して、1980年代には毎年5名前後、最近は更に増えて、現在(平成5〈1993〉年度)は学部学生23名、大学院生10名という盛況ぶりである。おおむね西南アジア史学を志す学生には、男女を問わず、活発で開拓精神に富んだ者が多い。そのためか、学部卒業生の就職先はマスコミ、官公庁、教員、商社、メーカー、金融関係などあらゆる業種に及び、学生・大学院生があげる個々の研究テーマも極めて多様である。学生数の増加は喜ばしい限りではあるが、本来西南アジア史学における研究領域は多様であり、今後も西アジア・中央アジアに対する関心は強まりこそすれ弱まることはないと思われるから、単

一講座としての本講座の運営を見直す時機に来ているといえよう。

なお、本講座の関連施設としては上賀茂に内陸アジア研究施設(羽田記念館)があり、西アジア・中央アジア関係の文献が備えられている。また関連学会としては「西南アジア研究会」の事務局が置かれ、学術誌『西南アジア研究』が年2回発行されている。

6. 考　古　学

本講座の設置は大正5(1916)年9月で、10年にわたる研究教育体制の整備期間の後に、大正15(1926)年4月から専攻生を持つ講座となった。初代教授となった濱田耕作は、講座設置の7年前に哲学科講師として招かれ、日本美術史を講じる一方で「考古学概論」の講義を始め、また考古資料の収集を開始した。濱田は大正2(1913)年3月助教授となって3年間ヨーロッパに留学し、主としてロンドン大学のペトリー教授から実践的な考古学の方法を学んだ。濱田の留学中に新しく建設された陳列館に「教室」と陳列室が設けられ、講座の運営を補佐する島田貞彦と梅原末治(1893～1983)が相前後して教室員に加わり、帰国後、濱田は大正6(1917)年9月教授に昇任して講座の陣容と設備が整った。

濱田は考古学講座を担当するに当たり、従来の古物偏重の風を排して遺跡の科学的調査に重点を置き、広い視野から考察を行う立場をとった。研究法を講じる「考古学通論」、特定のテーマによる特殊講義、調査に必要な技術を体得させる実習を行って教育面を整え、研究面でも、遺跡の実地調査と報告書のあり方を「京都帝国大学文学部考古学研究報告」既刊16冊(1917～43年)によって具体的に提示し、考古学界の指導的役割を果たした。

昭和4(1929)年には史学科陳列館が完成して、10余年にわたる研究の総括ともいうべき展示が行われ、昭和8(1933)年6月には、梅原が助教授となって、教育研究体制は一層充実したものとなったが、昭和12(1937)年6月濱田は京都大学総長に選ばれて教授の地位を去り(病を得て翌昭和13年7月死去)、昭和14(1939)年7月に梅原末治が教授に昇任して本講座を担当した。

梅原は既に大正初めから教室員として濱田の指導を受け、また濱田を助けて研究を行ってきたので、研究活動の基本方針はほとんど変わることなく、東アジア全般にわたる研究成果を次々と発表した。一方教育面では、梅原が講義、特殊講義、演習、講読、実習の全部を担当する一方、東方文化学院から水野清一・貝塚茂樹両講師を招いて中国考古学を充実し、村田数之亮講師によるクレタ考古学、古典考古学をも開設して、学生に広い知識に基づく研究を求めた。昭和18(1943)年に「京都帝国大学文学部考古学研究報告」第16冊として刊行された末永雅雄・小林行雄・藤岡謙二郎『大和唐古弥生式遺跡の研究』は、それ以後の弥生時代研究の基礎となった。

講義と研究は敗戦前後に一時中断せざるを得なかったが、昭和21(1946)年度から、神話にかわる古代史の研究の方法として社会の大きな期待を担って再開され、敗戦以前にはかなり困難であった古墳の発掘が可能になったことと相まって古墳時代の研究が大きく進展した。古墳の発掘の中でも、昭和22(1947)年に大阪府教育委員会の事業として梅原主査、小林行雄(1911～89)助手担当のもとで発掘した大阪府茨木市紫金山古墳、昭和22(1947)年から昭和26(1951)年まで考古学教室員を中心に小林が責任者となって発掘した三重県上野市石山古墳、昭和28(1953)年に樋口隆康が担当した京都府相楽郡椿井大塚山古墳の成果は小林による一連の「古墳時代の研究」の講義、論文、著書となって日本考古学界・古代史学界に多大の影響を与えた。またこの間の卒業生は、国公立の研究所や各地の大学において活躍し、次の世代の研究者を育成した。

昭和25(1950)年には村田が大阪大学教授(西洋史)となって転出、朝鮮考古学を専攻する有光教一(1907～)が講師となった。有光は昭和27(1952)年に助教授、小林が昭和28(1953)年に講師となって、本講座は教授・助教授・専任講師・助手2名(1名は陳列館担当)と充実した。有光は昭和25(1950)年8月から2年間、カリフォルニア大学において日本文化と美術および朝鮮考古学の講義を行った。

梅原が昭和31(1956)年8月に停年退官して、有光が昭和32(1957)年3月に

教授に昇任し、樋口隆康(1919～)が同年10月に助教授となって3人体制が続き、人文科学研究所の水野清一・長広敏雄両教授が授業担当となって、わが国の考古学講座の中で最も充実したものとなった。有光は朝鮮総督府時代に調査した資料に基づく研究成果を相次いで発表し、専ら朝鮮考古学を講じた。有光時代の特筆すべき考古学講座の事業として、資料リストと写真によるユニークな体裁の『京都大学文学部博物館考古学資料目録』の刊行がある。考古学陳列室収集品の完全な目録の作成は、早くから濱田が熱望していたところであり、小林が担当して写真付きカードによる基礎資料の作成に入ったのは梅原時代であったが、横山浩一助手が担当して第1部『日本先史時代』を出版したのは昭和35(1960)年であった。昭和38(1963)年に第3部『中国』(横山担当)を、昭和43(1968)年に第2部『日本歴史時代』(小野山節担当)を出版した(第4部と全巻にわたる索引を計画したが未刊)。一方、有光が代表者となり、自然科学者と共同して行った文部省科学研究費による「熱ルミネッセンスによる年代測定法の研究」(昭和37～39年)は、その後における考古学と自然科学の共同研究に重要な役割を果たした。また昭和41(1966)年には、長年希望してきた考古学講座の実験講座化がようやく実現し、近藤喬一・都出比呂志両助手が担当して向日丘陵の古墳の発掘調査を始めたが、近年では経費不足から測量調査にとどまっている。さらに有光のもとへ昭和41(1966)年に韓国から留学した韓炳三は、後に韓国国立中央博物館館長として活躍した。

昭和46(1971)年3月に有光が停年退官、小林が昭和49(1974)年11月に教授、小野山が昭和50(1975)年3月講師、小林が同年4月停年退官、同年8月樋口が教授、昭和51(1976)年3月に小野山が助教授と大きく変わって、樋口教授、小野山助教授の時代が8年余り続いた。樋口は東アジアの青銅器、特に銅鏡を中心に研究を進め、多くの成果を刊行したが、水野教授を隊長として京都大学から派遣された「京都大学イラン・アフガニスタン・パキスタン学術調査隊」を継いで、昭和45～53(1970～78)年まで「京都大学中央アジア学術調査隊」の隊長として、中央アジアの重要な遺跡、例えばバーミヤーン

石窟などの調査を行った。

昭和58(1983)年4月に樋口が停年退官すると、同年7月小野山が教授に昇任し、翌昭和59(1984)年4月に山中一郎が助教授に就任した。小野山は比較考古学の方法によって、王陵やシュメール都市の盛衰の問題を研究し講述した。また遺物の型式学的研究を吟味しながら、古墳時代馬具の研究を行うとともに講述した。

山中は広く世界の旧石器時代の研究に従事し、特に石器の形態は製作技術を反映しているとする技術形態学の体系に沿って日本の旧石器資料をも検討している。平成元(1989)年9月から2年間、フランス国立自然史博物館に招かれて、博物館所蔵旧石器の研究、博士論文作成学生の指導、「東アジアの旧石器時代」等の授業を行った。

第3項　文　学　科

1.　国語学国文学

本講座は、明治41(1908)年5月、1講座2専攻(国語学専攻と国文学専攻)をもって開設された。大正8(1919)年に1講座が増設され、第1講座は国文学を、第2講座は国語学を担当することとなったが、国語学と国文学を分けるのは不自然であるとの考え方が強く、昭和7(1932)年に1つの専攻にまとめ、それまで国文学専攻と国語学専攻に分かれていた学生は、国語学国文学専攻という同一の専攻に所属することになった。開設時から現在に至るまで、学生は国文学・国語学の区別にとらわれずに、両分野を併せ学ぶことを理想としてきているのである。

開設当初、教授待遇講師として幸田成行(露伴、1867～1947)、助教授として吉沢義則(1876～1954)が任ぜられたが、幸田は1年後の明治42(1909)年10月に退職、後任として藤井乙男(1868～1945)が同年11月講師を嘱託され、明治44(1911)年9月に教授に就任して、講座を担任した。大正8(1919)年の講座増設により、第1講座は藤井が、第2講座は吉沢(同年8月教授に昇任)が

担任することとなった。

以後、第1講座の担任者は、藤井乙男－沢瀉久孝－野間光辰－佐竹昭廣－日野龍夫と続き、第2講座は、吉沢義則－遠藤嘉基－濱田敦－安田章と続く。

a　第1講座(国文学)

藤井乙男は、古代・中世文学の研究に比して学問としての認知が遅れていた近世文学を専門とし、浄瑠璃・小説・俳諧など広い分野の研究を通じて、黎明期の近世文学研究の基礎を築いた。諺などの近世語に対する著書もあり、紫影と号する俳人としても著名であった。特に芭蕉研究会会長として、俳諧研究に寄与するところが大きかった。昭和3(1928)年8月停年退官。

藤井の後継者になるはずであった穎原(えばら)退蔵(1894～1948)は、昭和3(1928)年4月講師に就任、昭和6(1931)年3月助教授に昇任したが、病を得て昭和11(1936)年4月に退官した。昭和23(1948)年8月12日、助教授に復職したが、病が再発して同月30日に死去した(同日付で教授に昇任)。穎原も近世文学を専門とし、俳諧や小説の研究に多くの業績を残した。若くして死去したが、学識の深さと着実精緻な学風を惜しまれ、後に教え子たちによって『穎原退蔵著作集』全20巻別巻1冊(1984年完結)が編纂された。後述の「穎原文庫」は穎原の旧蔵書である。

沢瀉久孝(1890～1968)は、大正11(1922)年8月助教授に就任、昭和11(1936)年9月第1講座の教授に昇任した。上代文学を専門とし、特に万葉集の研究に力を注いだ。昭和26(1951)年3月停年を待たずに退官して後は、「万葉学会」を主宰して多くの人材を育てた。万葉学会は機関誌『万葉』を発行して、現在も万葉集研究の一中心としての活動を続けている。沢瀉が、没する直前の昭和43(1968)年10月に完成した『万葉集注釈』全20巻は、今日まで万葉集研究の基本図書としての生命を保っている。

野間光辰(1909～87)は、昭和24(1949)年5月助教授に就任、昭和26(1951)年11月第1講座の教授に昇任した。近世文学、特に西鶴の研究を中心とし、『補刪西鶴年譜考証』(1983年)などに見られる、峻厳ともいうべき実証的な

学風で聞こえた。昭和21(1946)年、日本近世文学会の創設に参画し、以後近世文学研究界全体の指導的地位にあった。終生和服姿で通し、文人的風格を漂わせる最後の学者でもあった。昭和48(1973)年4月停年退官。

佐竹昭廣(1927～)は、昭和35(1960)年4月助教授に就任、昭和48(1973)年12月第1講座の教授に昇任した。業績は、万葉集を中心に、広く上代文学、中世文学、近世文学に及び、意味論的方法を自在に駆使した独自の学風によって、国文学研究全般に数々の創見をもたらした。昭和60(1985)年3月、停年を待たずに退官。現在も国文学研究資料館館長として活躍中である。

現在の第1講座担任の日野龍夫は、昭和52(1977)年4月助教授に就任、昭和61(1986)年12月第1講座の教授に昇任した。上田秋成や本居宣長を通して、近世における文学史と思想史を結びつける研究を主とする。また従来省みられることの少なかった近世の漢詩に対しても関心を寄せている。

助教授の大谷雅夫は、平成4(1992)年4月就任。日本漢文学を専門とする。伊藤仁斎の儒学説の研究から始まって、国文学と中国文学の関わりに関心を寄せ、現在は主として万葉集の研究を進めている。

b　第2講座(国語学)

吉沢義則は、文法・文章・文体をはじめとして、歌語や片仮名の歴史などに至るまで、幅広い分野の業績を残している。明治末年、それまでは国語史資料として利用されることのなかった訓点資料の価値を見出し、訓点語・訓点資料研究の基礎を築いた。主著の『対校源氏物語新釈』(1940年完結)は「吉沢源氏」と称されて、今日でもなお源氏物語研究の基本文献として扱われている。また流麗な仮名文字に秀でた書家としても評判が高かった。昭和11(1936)年8月停年退官。

遠藤嘉基(1905～92)は、昭和14(1939)年3月助教授に就任、昭和24(1949)年4月第2講座の教授に昇任した。国語史・中古文学を専門とし、特に吉沢が開拓した訓点資料の研究に力を注いで、訓点語学会を主宰した。同学会は現在もこの分野の研究を推進する強力な母体となっている。遠藤はまた抄物資料に注意を向け、資料目録を作成した。国語教育についても強い関心を抱

き、その方面の著述も多い。昭和41(1966)年3月、停年を待たずに退官。

濱田敦(1913～)は、昭和31(1956)年5月助教授に就任、昭和42(1967)年2月第2講座の教授に昇任した。上代から中世に至る国語史を専門とし、特に朝鮮資料をはじめとする外国資料が国語史研究に有用であることを種々の点から論じた。また独特の功績として、資料は私有するものではないとの信念に基づいて、私費を投じて数多くの国語史資料を公刊し、学界への提供を続けたことがあげられる。昭和52(1977)年4月停年退官。

現在の第2講座担任の安田章は、昭和46(1971)年4月助教授に就任、昭和56(1981)年4月第2講座の教授に昇任した。中世を中心に国語の歴史を文化の背景の中でとらえるという立体的な国語史を作りあげ、中世の辞書や和漢聯句・漢和聯句などの文化面の研究に新生面を開いた。同時にポルトガル語や朝鮮語などの資料を駆使して、濱田の提唱した外国資料による国語史研究を更に深め、1つの分野として確立した。

助教授の木田章義は、平成元(1989)年4月就任。上代から室町にかけての音韻史・文法史を専門とし、アジアの言語全般に対しても関心を向けている。

教室の運営や学生の指導に力を尽くし、本講座の発展に寄与した存在として、他に副手・助手がいる。従来言及されることがなかったので、百年史を機会にまとめておきたい。古い時代については正式な記録が残っている人は少ないが、判明した限りで就任順に記す。

〔副　　手〕(嘱託・任命、有給・無給を区別せず)

井手淳二郎(大正5年？)、宮島弘(昭和7年)、池上禎造(昭和8～14年)、池田(大坪)併治(昭和10～11年)、玉上琢弥(昭和12～23年)、藤枝得三(昭和12年)、小島憲之(昭和13～18年)、濱田敦(昭和15～18年)、森田美明(昭和16年)、阪倉篤義(昭和17～18年、昭和21～22年)、尾田卓次(昭和17～20年)、大浜厳比古(昭和22～23年)、柊源一(昭和23～24年)

〔助　　手〕

玉上琢弥(昭和24～26年)、柊源一(昭和24～39年)、伊藤博(昭和39～40年)、

小泉道(昭和41～42年)、山本利達(昭和43～45年)、下房俊一(昭和46～47年)、新井栄蔵(昭和48～50年)、越智美登子(昭和51～52年)、島崎健(昭和53～55年)、光田和伸(昭和56～58年)、上野英二(昭和59～60年)、大谷俊太(昭和61年)、安達敬子(昭和62～平成2年)、小林直樹(平成3～4年)、山本秀樹(平成5年～)

〔言語学副手〕

三ケ尻浩(昭和10～12年)、小田良弼(昭和13～15年)、朝山信弥(昭和16～18年)、前田正人(昭和22～24年)

〔言語学助手〕

川端春枝(昭和39～40年)

副手は京都帝国大学通則「副手規程」によって、原則無給と定められていた。本講座出身者では、大正5(1916)年卒業の井手淳二郎が最も古いと思われるが、正式な記録はない。言語学講座の新村出教授に命ぜられて副手となったらしく、言語学講座の副手であった可能性が高い。記録のある最初の副手は昭和7(1932)年の宮島弘である。この頃に副手が研究室の構成員として認められるようになったようである。多い時には3名の副手が『国語国文』(後述)の編集や図書整理などを分担した。各時代の教授が卒業生・大学院生の勉学の便宜を図るために、各種の身分に振り替えつつ、副手として勤務させていたようである。助手の期間を含めると玉上琢弥が15年にわたって勤務したが、その間には副手、教務嘱託、教務補佐員、助手と、身分に変化があった。昭和23(1948)年の嘱託制度の廃止によって、無給の副手は有給の副手や教務補佐員に変わる。昭和24(1949)年、新制大学に移行するとともに助手に変わり、以後は助手が研究室業務を担った。

国語学国文学研究室が編集発行している月刊誌『国語国文』は、平成5(1993)年12月現在、62巻、通巻712号に達している。全国の研究者からの投稿があり、東京大学の『国語と国文学』と並んで、全国的な学会誌としての役割を果たしている。本講座卒業生でなくとも、『国語国文』を通して育っていった研究者は少なくない。本誌は初め『国語国文の研究』(1926～30年)

と称し、昭和6(1931)年10月より『国語・国文』と改めた。現在は『国語国文』と称する。発行所も文献書院、星野書店、弘文堂書房、全国書房、中央図書出版と変わって現在に至る。

本講座が所蔵する書籍は約3万8,000冊、貴重書は576冊である。その中で穎原退蔵の旧蔵書の「穎原文庫」は3,778部6,040冊(3,144部4,525冊は夫人の穎原芳枝の寄贈になる)にのぼり、貴重書が97冊含まれている。

以上のような環境と歴史の中で、本講座は多くの人材を生み育ててきた。京都という、長い歴史と伝統を有し、時流の影響を被ることの少ない独自の風土において、学生・大学院生は個性を存分に伸張することができた。さらに本講座では、学生の独創性を重んじて、指導は極力少なくするという伝統的な気風があり、それは現在も連綿として続いている。学生・大学院生は授業や教官との対話を通して、文献を読むときには注釈的に読むこと、できる限り文献が書かれた当時の理解に近づくこと、そして文献の背後の文化史、文学史、国語史の流れをとらえておかなくてはならないことなどの基本的な態度を学び、それを基礎として、自由に研究を展開してきたのである。

2.　中国語学中国文学

明治39(1906)年6月、京都帝国大学に文科大学が開設されるとともに、支那語学支那文学講座が設置された。最初に設けられた6講座の1つである。他の5講座がいずれも哲学科に属するのに対して、唯一の文学科の講座であった。ただし、正式に講座としての授業が始まったのは明治41(1908)年5月、他の文学科諸講座が設置されてからである。初代教授には、文科大学開設委員でもあった狩野直喜(1868～1947)が就任した。後、文学科開設に伴って、鈴木虎雄(1878～1963)が助教授として来任する。時に、狩野41歳、鈴木31歳、共に唯一の国立大学だった東京帝国大学の学風に飽き足らず、実証的で精緻な新しい学術の形成を目指していた。

中国の語学・文学を哲学・史学から独立させて、文学科に所属させたのは、他の諸地域の語学・文学との対比・関連において研究を発展させようと

する用意に基づくものであった。当時、東京帝大が中国関係の諸学を漢学科として一括していたのと対照的である。また語学と文学を組み合わせて1つの講座として発足させたのも、先見性に富む発想であったといえる。明治44(1911)年に最初の卒業生2名を送り出したが、その1人が後に教授に就任した青木正兒である。大正8(1919)年6月、第2講座が設置され、鈴木が教授に昇任して同講座を担当し、以後現在に至るまで2講座で運営されている。

狩野は、本講座の基礎を定めるとともに、従来の漢学とは異なった新しい研究方向への展望を開いた。世を挙げての欧化と中国軽視の風潮は、創設以来大正末年に至る20年間の卒業生がわずか18名であったという事実からも察せられるが、その中にあって本講座の創業者たちの果たした役割は忘れられてはならない。狩野の研究上の功績において特に重要なことは、清朝考証学を祖述して学問研究の方法としたこと、戯曲・小説研究の開拓者となったこと、ヨーロッパのシナ学を紹介して国際的な広い視野に立つ研究を進めたこと、発見されたばかりの敦煌文書の価値を重視して敦煌学の先駆者となったことであろう。これらの諸点はそれぞれ後輩の研究者たちによって受け継がれ、多くの成果を生みだしていった。狩野は退官後の昭和4(1929)年4月、新しく設立された東方文化学院京都研究所の初代所長に就任して、広く中国研究の発展に貢献し、それらの功績によって、昭和19(1944)年に文化勲章を授与された。

鈴木は、六朝・唐・宋の詩および文学批評の研究において、卓越した業績をあげた。大正末期から昭和初期にかけての中国文学研究は、かつての漢学に対する反動もあって、従来正統の文学とは認められていなかった戯曲・小説の分野に人気が集まっていた。その中で終始詩文の文学に対する研究を貫いた鈴木の態度は、1つの見識というべきであろう。鈴木は、生涯にわたって数多くの中国古典詩の訳注を著したが、とりわけ杜甫の詩の全訳は、今日に至るまで他の何人もなし得なかった壮挙である。また、その著『支那詩論史』(1927年)は、中国本土をも含めた文学批評史研究の草分けである。昭和14(1939)年に日本学士院会員に推挙され、昭和36(1961)年には文化勲章を授

けられた。優れた漢詩人でもあった鈴木は、生涯に万首を超える作品を残している。

昭和13(1938)年1月に鈴木が退官した後、青木正兒(1887～1964)が東北帝国大学法文学部から来任して第1講座を担当し、さらに翌昭和14(1939)年、助教授だった倉石武四郎(1897～1975)が教授に昇任するとともに、第2講座担当となった。それ以後、第1講座は主として文学を、第2講座は主として語学を担当するようになったが、その区分は固定的なものではなく、常に両講座の緊密な連携を通じて弾力的に運営する努力がなされてきた。

青木の業績も多方面にわたるが、ことに戯曲文学研究の大成者として知られ、『支那近世戯曲史』(1930年)は前人未到の成果として、中国においても高い評価を得た。文学思想研究の面でも、先進的な役割を果たしている。また青木は、新しい時代の文学の動向に鋭い感覚を発揮し、大正9(1920)年、自ら中心となって創刊した雑誌『支那学』に、胡適・魯迅等の文学革命の動向をいち早く紹介した。青木の提唱した「漢文直読論」は、音読による古典詩文読解への道を開く先見性に富む理論であった。昭和22(1947)年6月に退官して後、昭和28(1953)年に日本学士院会員に任ぜられた。

倉石は、大正15(1926)年に講師として来任した。助教授時代の昭和6(1931)年8月、2年半に及んだ中国留学から帰国すると、初めて現代文学を教科に加えて、魯迅の小説を講読のテキストに用い、古典詩文の読解にも音読法を用いるなど、画期的な試みを実践した。また純粋な意味での中国語学を開講し、清朝小学の方法に基づく精細な語学研究を発展させた。わが国における本格的な中国語学研究への道を開拓した功績は大きい。

第2次大戦後の昭和22(1947)年6月、青木の退官に伴って、東方文化研究所所員であった吉川幸次郎(1904～80)が第1講座の教授に就任した。次いで昭和24(1949)年5月、倉石がかねて兼任していた東京大学に専任として去った後、翌昭和25(1950)年7月、小川環樹(1910～93)が東北大学文学部から来任して、第2講座を担当した。以後、昭和42(1967)年の吉川の退任に至るまで、17年間にわたる吉川・小川時代が続いた。この間、昭和25(1950)年4月

以降、講座の名称が従来の「支那語学支那文学」から、「中国語学中国文学」に改められた。

吉川は、狩野直喜に師事して、清朝考証学の遺風を継ぐ学問を築き、東方文化研究所時代の『尚書正義』定本(1939～41年)およびその国訳の作成に始まって、晩年の『杜甫詩注』(1977年～未完)に至るまで、言語表現に密着した精密な文学研究の方法を確立した。吉川の学問の幅は極めて広く、時代的には先秦から近代に及び、ジャンル上では詩文から戯曲・小説に至る広範な領域をカバーする。また世界文学の視野の中で中国文学を位置付ける姿勢を一貫して保ち続け、その清新な感覚に溢れた多くの著作は、旧来の漢詩漢文愛好者の枠を超えた広い読者層の心をとらえた。昭和39(1964)年に日本芸術院会員に推挙され、昭和44(1969)年には文化功労者に選ばれている。

小川の研究は、中国語学・中国文学の双方にわたっており、語学と文学の造詣が緊密に結び付きあって、研究の精度を極めて高いものにしている。語学関係では、清朝小学とヨーロッパ言語学の方法がみごとに融合した音韻史に関する業績、文学関係では、多面的に通俗小説の発展過程を考察した小説史研究や、表現技法と詩語の分析に特色を発揮した詩文研究など、多彩な成果を残した。蘇東坡をはじめとする宋代の詩文に関する多くの訳注を著したことも特筆に値する。平成元(1989)年には、日本学士院会員に選ばれた。

吉川退官後の昭和42(1967)年７月、高橋和巳(1931～71)が助教授として着任した。高橋はことに六朝文学に関する先鋭な理論によって注目された新進の研究者で、作家としても華々しい活動を続けており、将来を期待されたが、昭和45(1970)年３月、惜しくも病のため辞任した。吉川の後、第１講座教授はしばらく空位のままだったが、昭和45(1970)年10月、長く名古屋大学文学部教授の任にあった入矢義高(1910～)が来任した。入矢は、中古から近世にかけての詩文や俗文学に該博な知識を持つとともに、口語史の研究にも優れて個性的な独自の境地を開いた。言語への興味から禅の語録にも関心を広げ、語学的な緻密さによって禅研究の水準を高めた。80歳を超えた今もなお旺盛な研究活動を続けている。

昭和49(1974)年3月に小川と入矢が退官した後、昭和34(1959)年4月以来助教授の任にあった清水茂(1925～)が、同年11月付で第2講座教授に昇任し、また興膳宏が同年4月付で、名古屋大学教養部から助教授に迎えられた。清水の研究領域は、先秦から近現代に及ぶ詩文・戯曲・小説と多彩なジャンルにわたっており、さらに語学についての学識も豊かで、文学・語学両面の講義を担当してきた。韓愈の全散文の口語訳や、吉川の業を継いだ『水滸伝』の訳など、翻訳の仕事も少なくない。清水は平成元(1989)年3月に退官した。

入矢の退官の後、空席だった第1講座は、昭和57(1982)年4月に興膳が教授に昇任した。それに先立ち、昭和51(1976)年4月には小南一郎が助教授に任ぜられたが、昭和59(1984)年4月、人文科学研究所に転じた。昭和62(1987)年4月に川合康三が東北大学文学部から、また平成元(1989)年4月に平田昌司が山口大学人文学部から、いずれも助教授として来任した。興膳は六朝・唐の詩文および文学理論を、川合は唐・宋の詩文を、平田は中国語史・方言史をそれぞれ専攻分野としている。

講義は、専任スタッフ以外に、教養部(現：総合人間学部)・人文科学研究所の教官、さらに各地の大学からの非常勤講師に出講を仰いで行われており、広範な中国語学・文学の各分野にできるだけまんべんなく目配りがなされるよう配慮されている。学部学生は、多いときには10名を超えたこともあるが、最近は毎年4、5名程度でほぼ安定している。それに比べて大学院学生の数は多く、修士課程・博士後期課程合わせて常時15名から20名が在籍している。学生の関心は古典詩文に集まることが多いが、戯曲・小説などの俗文学や近現代文学、語学では音韻学・文字学等を専攻する者もあり、かなり多様性に富むといえる。学生に対する指導は、伝統的に一種の放任主義が貫かれ、よくもあしくも自由の空気がみなぎっている。戦後長い間、中国への渡航は不可能で、中国留学は夢のまた夢という状況が続いたが、昭和54(1979)年に至ってようやく留学の条件が回復し、近年では博士後期課程学生のほとんどが中国留学の経験を持つ。また中国その他の国々からの学者や留

学生を迎えることも日常的になってきた。長い伝統を受け継いだ多面的な研究の発展を図るとともに、ますます多様化する国際交流の要請にも機敏に対応できる態勢を整えることが今後の課題となろう。

本講座の図書は、創立当初から中国哲学史講座のそれと共同のものとして同じ書庫に蔵されてきており、その中には、狩野文庫(狩野直喜旧蔵書)、鈴木文庫(鈴木虎雄旧蔵書)、十硯山房旧蔵書(田中慶太郎旧蔵書)、唐学斎旧蔵書(吉川幸次郎旧蔵書)等の貴重な漢籍特殊文庫が含まれている。昭和34(1959)年に、『京都大学文学部漢籍分類目録』第1が上梓された。現在、和漢洋合わせて約11万冊の蔵書を存し、これは文学部全体の蔵書の7分の1以上に相当する。

学術雑誌としては、『中国文学報』を定期刊行している。昭和29(1954)年10月に創刊されて以来、長きにわたり吉川・小川の共同編集によって運営され、春秋2回の発行を維持してきた。両教授をはじめとする関係者の努力によって、質の高い多くの論文や書評を掲載し、中国や欧米の学界においても高い評価を得ている。学内事情により一時中断のやむなきに至ったこともあるが、現在では年2回発行のペースに戻り、47冊(平成6年3月現在)を刊行した。大学院学生を幹事役とする「中国文学会」は、毎年夏に例会を開いて、各世代の卒業生による研究発表を行い、常時多数の参会者を得て好評を博している。

3.　梵語学梵文学

本講座は日本で唯一のサンスクリット単独講座として明治43(1910)年に開設され、榊亮三郎(1872～1946)が初代教授として就任して、昭和7(1932)年まで在任した。その後は足利惇氏(1901～83)、伊藤義教(ぎきょう)(1908～)、大地原豊(1924～91)が教授として在任した。

初代教授に就任した時の榊は、3年間のヨーロッパ留学とネパールでの写本収集を終えて帰国したばかりであった。「梵語」という語は日本語の語彙に古くからあったものの、その実体は古代に日本に伝わった「悉曇文字」で

あり、近代になってからも、せいぜい仏教文献の原典を伝える言語としてしか理解されていなかったが、榊の目指したのは比較言語学との関連のもとに19世紀のヨーロッパで成立したサンスクリットの研究であった。さらには、将来的展望として榊の念頭にあったのは、言語的宗教的にインドと起源を共にするイランを視野に入れたインド・イラン研究であり、ドラヴィダ系の言語文化を視野に入れたインド古典文化研究であった。榊の最大の業績は『マハーヴュットパティ』の校訂である。この文献は9世紀のチベットで編纂され、仏教文献に用いられている語を収集分類したサンスクリット・チベット語対応語彙集であるが、中国に伝えられて中国語の対応語が添えられた。榊の校訂本はそれまでのミナエフ本と異なり、中国語の対応語も含めたもので、大正5(1916)年に『文科大学叢書』第3巻として刊行以来、昭和37(1962)年の復刻版を経て、仏教文献の研究者にとって不可欠のマニュアルとして、今でも世界中で使われている。

榊の活躍は教育面でも目覚ましいものがあり、ヴェーダ、叙事詩、プラーナ、戯曲など、サンスクリット文学の中核ジャンルを扱ったほか、仏教への関心も深く、パーリ文献やハイブリッド・サンスクリット文献はいうまでもなく、『アビダルマコーシャ』のような仏教理論書を取り上げることもあり、文化史的関心から『慈恩寺三蔵法師伝』を講じたことさえあった。教育面での成果は入門書の編纂の形で伝えられ、明治40(1907)年に刊行された『解説梵語学』はその後版を重ね、今日でも多くの大学で教科書として用いられている。

榊在任中は、大正4(1915)年から寺本婉雅が講師としてチベット語を担当し、大正7(1918)年からは常盤井堯猷が講師としてヴェーダを担当して、授業内容は次第に充実していった。昭和時代になると、昭和4(1929)年には原真乗が助教授として来任して、チベット語文献とパーリ文献を中心に研究教育活動を行うようになり、昭和5(1930)年には足利惇氏が講師としてサンスクリットを教えるようになった。

足利は昭和17(1942)年に助教授、昭和25(1950)年には教授に昇任して、昭

和40(1965)年に退官するまで、35年にわたって研究と教育を行った。昭和34(1959)年には共同研究『居庸関』で日本学士院賞を受け、昭和40(1965)年には最大の業績である大本『スカーヴァティーヴューハ』(大無量寿経)の校訂が世に出た。これは榊がネパールで入手した古く良質な写本を用いたものであり、インド浄土教研究史に新境地を開くことになった。さらに、榊の志を受け継いだ足利は、サンスクリットの研究に並行してイラン研究にも深く関わったが、なかでも特に注目すべきは昭和16(1941)年に公刊された『ペルシャ宗教思想』であり、これによって学問としてのイラン学が初めて日本に確立した。昭和37(1962)年から2期にわたって文学部長を兼ねたのをはじめ、学内の要職を歴任して大学行政に大きな功績を残した。また、長らく日本オリエント学会の会長の任にあって、学界のために力を尽くし、多くの優れた研究者を育てた。

昭和17(1942)年から昭和41(1966)年まで専任講師として在任した善波周は、パーリ文献とサンスクリット仏教文献のほか、インドの科学文献を担当した。それまで日本では関心の寄せられなかった医学文献や天文学文献の研究に先鞭をつけ、熱心な学生指導とともに本講座の発展に寄与するところが大きかった。

伊藤義教は足利の手ほどきを受けてイラン研究を始め、昭和16(1941)年からはヴェーダ文献と古代・中世イラン語文献を担当した。古代イランの宗教文献『アヴェスター』は最も難解な文献といわれ、その研究はインドの最古層宗教文献『ヴェーダ』との関連のもとに行わなければならないのはいうまでもなく、伊藤は31年にわたる在任期間を通じて、ヴェーダの研究と教育にやむことがなかった。しかしながら、『アヴェスター』研究にとって決定的に重要なのは中世ペルシャ語で伝わる注釈文献であり、伊藤は早くからこの恐るべき分野に挑戦し、150年にわたるヨーロッパ学界の成果を20年足らずで摂取することに成功して、学位論文「マーヌシュチフル書簡集の解読」にその学殖を結晶させた。その後は独創的研究をさらに進めて、'On the Iranism underlying the Aramaic inscription of Asoka'や「ペルセポリス

のダリウス王宮の性格について」など、数多くの論文を発表して、世界の学界に大きな貢献をした。さらに、日本語訳『アヴェスター』と『古代ペルシャ』(1974年)を刊行して、古代イラン文化についての正確で詳細な知識を日本の読書界に提供した。

大地原豊は昭和32(1957)年に助教授として本講座に着任し、昭和47(1972)年には教授に昇任し、昭和63(1988)年に退官するまで、長年にわたって研究教育の両面で計り知れないほど大きな業績を残した。インド学術文化の形成過程で哲学と並んで大きな成果をあげたのは文法学であるが、大地原が来任以来一貫して続けてきたのがインド文法学伝承の中で最高峰に位置するパタンジャリの体系である。主著“La Kāśikā Vṛtti”(1960～62)では訳注の形でパタンジャリの煩瑣極まりない論議を細部に至るまで克明に追い、ヨーロッパで打ち立てられたインド文献学の堅実な方法を極致まで進め、解明した結果を明晰な形で提示して、それまではサンスクリットの専門家でも容易に近づけなかったインド文法学の論議を細部にわたって具体的に明らかにした。フランスをはじめ欧米諸国から指導的研究者を招聘して国際学術交流にも大きな貢献をした。昭和52(1977)年にはフランス政府から教育功労賞を授与され、平成2(1990)年にはフランス学士院碑文文芸部門の客員会員に推挙された。31年にわたる在任期間に熱心に学生指導を行っただけでなく、他大学の若い研究者には激励と協力を惜しまず、日本のサンスクリット研究の水準を画期的に高めた。

昭和48(1973)年に小林信彦が助教授として来任し、アシュヴァゴーシャを中心に初期の古典文学に見られる古典規範の原始形態を研究し、これに関連して仏教説話も扱っている。平成2(1990)年にはヴェルナー・クノーブル(Werner Knobl)が外国人教師として就任し、ヴェーダ・比較言語学と文法学を担当している。“Zwei Studien zu Wortern des Sanskrit”(1981)などでヴェーダ研究に貢献したクノーブルは、着任後数年にして、ヴェーダ、伝統文法学、イラン学の分野で優秀な学生を育て、大きな成果をあげている。

学生は昭和63(1988)年頃から特に大学院課程で急増し、一時は14名に及ん

だが、現在は修士課程博士課程合わせて12名が在籍し、専門分野もイランの宗教文献、後期ヴェーダ文献、碑文、戯曲、古典叙事詩、仏教説話、ジャイナ説話、アワーディー語の中世文学など、極めて多岐にわたって研究を進めている。隣接文化圏への関心も高まり、ヴェーダ研究者は古代イランの文献も併せて読み、説話文学の研究者は漢文の学習にも熱心で、テキスト発展史を跡づけるために漢文資料を積極的に使っている。最近数年の学部学生は一時と比べて少ないが、他大学で隣接分野を専攻した者が1年ないし2年にわたり聴講生として基礎的な学習をした後で大学院へ入る例が増え、学生数は圧倒的に大学院が多い。また、学生の男女比は4対6で女が多い。

4.　フランス語学フランス文学

本講座は大正14(1925)年5月、1講座として設置された。フランス文学という科目名は、文科大学開設当時、既に正科目としてあげられていた。大正10(1921)年10月に、在外研究員としてフランス滞在中であった第一高等学校教授太宰施門(しもん)(1889～1974)が、本学助教授に任命されたとき、実質的にフランス文学講座は芽生えたといえる。太宰は大正12(1923)年2月に帰国し、4月から正科目としてフランス文学を担当した。大正14(1925)年5月、本講座は西洋文学第3講座として正式に設置された。当初は普通講義、特殊講義、講読、演習という科目組織が整備された。

間もなく落合太郎(1886～1969)が講師となり、昭和6(1931)年3月助教授に任ぜられた。太宰は昭和8(1933)年3月教授に昇任。落合は昭和12(1937)年12月、教授昇任とともに言語学講座に転じた。その後は伊吹武彦、市村恵吾、林憲一郎、モンチニー(Montigny)の各講師が太宰を助けた。また、フランスからヴァグネル(Wagner)、ロベール(Robert)、ボノー(Bonot)をはじめ次々と講師が来講した。太宰は当時のカトリック的フランス文学を主要な対象とした研究を樹立しようと努め、17世紀と19世紀に重点を置いて、様々なジャンルの作家と作品を取り上げ、研究を続けた。

この時期の普通講義では、フランス文学の骨格を示す目的のもとに、広汎

で基本的な知識を持たせるように努めた。講読は1回生向けに17世紀古典文学の代表作が、2回生向けに19世紀の主要な作品が取り上げられた。2回生の特殊講義(後の研究)は、限定された特定の問題をめぐってなされた。例えば落合のモンテーニュ、パスカル研究、太宰の古典悲劇総説、比較文学的に見た18世紀とロマン主義時代、バルザックの小説研究など。演習は3回生に卒業論文を準備させるかたわら、原典に対する更に深い読解能力の養成を目的とし、テーヌ、ブリュヌチエールなどの批評が主に選ばれた。

太宰は昭和6(1931)年12月、多年フランス語フランス文学の教育と日仏文化交流に貢献した功績により、レジオン・ドヌール勲章(シュヴァリエ級)を授与され、昭和24(1949)年5月、停年により退官し、本学名誉教授の称号を贈られた。

太宰退官後、当時第三高等学校教授であった伊吹武彦(1901～82)、生島遼一(1904～90)が講師として授業を担当したが、伊吹は昭和25(1950)年4月本学部教授に転じ、本講座を担当することになった。戦後わが国におけるフランス文学研究の著しい進歩を踏まえ、講座の授業内容を充実発展させることが焦眉の急であった。そこで18世紀や現代も含めて、幅広いカリキュラムを組むために、京都大学人文科学研究所教授桑原武夫、同吉田分校(後の教養部)教授生島遼一らを授業担当とした。昭和26(1951)年からは教養部の田中俊一、渡辺明正、林憲一郎、後藤敏雄、本城格の各助教授が加わり、後には同じく教養部から生田耕作、大橋保夫の両助教授も参加して、非常に充実した内容になった。伊吹は主に象徴派の詩や、ジュール・ラフォルグなどの文体論を取り上げた。生島は19世紀小説、また17、18世紀のフランス小説を新しい角度からとらえて論じた。

昭和32(1957)年5月、教養部助教授本城格(1916～90)が本学部助教授に転じ、16世紀プレイヤッド派詩人を中心として演習および研究を担当した。昭和34(1959)年10月、ジュヌヴィエーヴ・フォンチエ(Geneviève Fontier)が本講座に専任外国人教師として招かれ、学生の指導に当たった。この後も、本講座では今日に至るまでフランス人の講師が専任として重要な役割を果たし

てきた。フォンチエの後、ド・ラ・ムッセ(De la Mousset)、ブーリエ・フレシネ(Beulier Frecynet)、マルグリット・ヴィエ(Marguerite Vié)、ジャックリーヌ・ジョジョン(Jacqueline Geogeon)、アニー・プチ(Annie Petit)、ピエール・ドヴォー(Pierre Devaux)、ジャン=ポール・オノレ(Jean-Paul Honoré)と続き、平成5(1993)年度現在ジャン=マルク・サラール(Jean-Marc Sarale)が教鞭をとっている。最近は各教師とも修士論文指導と審査、フランス政府給費留学試験のための特別授業、会話や作文といった語学運用能力の訓練などを担当し、ますますその比重を増している。

伊吹は昭和36(1961)年にフランス政府の招きでフランスに滞在し、同年11月、レジオン・ドヌール勲章(シュヴァリエ級)を授与された。そして昭和39(1964)年、停年退官し、本学名誉教授の称号を贈られた。

伊吹の退官後、教養部教授生島遼一が昭和39(1964)年11月本学部教授に転じ、本講座を担当することになった。この頃から本講座の学生数は非常に多くなったことも特筆に値する。昭和43(1968)年に生島は停年を迎え、本学名誉教授の称号を贈られた。昭和44(1969)年8月に本城が教授に昇任した。昭和46(1971)年4月、当時名古屋大学教養部助教授であった中川久定(ひさやす)が本学部助教授に転じて、新しい講義体制が整備された。

本城はロンサールなどフランス16世紀文学を専門としていたが、その他17世紀の古典文学、さらには現代批評なども積極的に取り上げて、学生の多様な好奇心に対応した。中川はディドロ、ルソーをはじめとする18世紀フランスの思想と文学を主として講義した。また精神分析や心性史、文化史、日仏交流史、演劇論など、幅広い分野において研究を行い、その成果を講義に生かした。

昭和55(1980)年4月に本城は停年退官し、本学名誉教授の称号を贈られた。この年に、長い間の念願であったフランス語学フランス文学第2講座の増設が決まり、中川が第1講座教授に昇任した。第1講座助教授として、当時一橋大学助教授であった廣田昌義を迎えた。廣田は主としてパスカル、モンテーニュを講義している。また演習や講読でカミュなどの20世紀文学、ま

たスタロバンスキーなど現代批評も取り上げて、今日に至っている。

昭和57(1982)年6月、教養部助教授吉田城が第2講座助教授に転じた。吉田は専門であるプルースト研究を中心として、19世紀・20世紀の小説・文芸批評・美術批評などを講義している。昭和59(1984)年4月、廣田が第2講座教授に昇任した。また、平成2(1990)年11月、当時助手を務めていた田口紀子が第1講座助教授に迎えられ、2講座4名の教授陣が整えられた。田口はフランス語学を中心に、散文作品の語りの分析などの講義を行っている。

中川は文学部評議員を経て平成4(1992)年度から2年間文学部長を務め、平成6(1994)年3月停年により退官、本学名誉教授の称号を贈られた。その後を受けて、同年4月、吉田が第1講座の教授に昇任した。

上記に加えて、教養部教授の鈴木昭一郎、大橋保夫、山田稔、山本淳一、三好郁朗、松島征、同助教授の東郷雄二、稲垣直樹、多賀茂、大木充らが授業担当を行い、本講座はかつて見ないほどの充実ぶりを示すことになった(平成5年4月、教養部が廃止され総合人間学部が正式に発足したために、総合人間学部教官による授業担当は毎年4、5名程度となっている)。また人文科学研究所から教授宇佐美齊、助教授大浦康介も来講するようになった。本講座はまた毎年若干名の講師を学外から招いていることも付け加えておかねばならない。

本講座の歴史を語る上で、代々の助手の役割を見落とすわけにはいかない。教務関係の仕事に加えて、学部学生や大学院学生の研究指導と相談に応じてきた。また来講する学外非常勤講師や外国人研究者との折衝・打ち合わせなども助手の日常業務となっている。助手は留学経験のある者やフランスで博士論文を仕上げた者などが務め、この10年ほどに限っても、東京大学・九州大学・静岡大学・青山学院大学などにそれぞれ転出している。

本講座の伝統は、太宰、伊吹、生島、本城、中川、廣田と受け継がれ発展してきた、実証的な文学研究である。西洋文学の単なる紹介・解釈を超え、文献資料の綿密な収集と精確な読解を踏まえて、新しい独創的視点から文学・社会・思想を研究しようとする態度である。中川の一連の18世紀研究

(ルソー、ディドロに関する複数の著書)と吉田のプルースト草稿研究(とりわけフランスのプレイヤッド叢書共同編集作業)の業績に対して、フランスからパルム・アカデミック勲章(それぞれオフィシエ級・シュヴァリエ級)が贈られた。また中川、吉田は、研究論文をフランスの学術雑誌に定期的に寄稿し、国際的な評価を得てきた。なかでも中川の著作“Des lumières et du comparatisme”(PUF、1992)が持つ意味は非常に大きいといわねばならない。このようなフランスの学術に貢献する発信型の研究が、これからますます本講座の大切な課題となるであろう。

学生の状況に目を転じると、昭和50年代・昭和60年代と現代とではだいぶ様変わりしている。昭和50年前後には本専攻の在籍者が極めて多かったが、この10年間ほどで次第に適当な人数で推移するようになった。1学年の定員は20名であるが、3回生でフランス語学フランス文学を専攻する学生数は毎年10名余りである。本専攻では男子と女子の人数も半々ぐらいの年が多い。卒業論文の主題は多岐にわたるが、一般的傾向として19世紀・20世紀散文作品を論じるものが多い。フランス語学、17世紀、18世紀、詩、演劇、中世文学、社会思想、現代思想、批評などを取り上げる者もいる。卒業後の進路は企業、教職、メディア関係、出版社と様々である。

大学院志望者も非常に多い時期があったが、最近では本専攻からは毎年数名程度となっている。だが他大学からの受験者も多いので、修士課程および博士後期課程の入学試験は大変厳しい状況である。大学院には常時10名から20名ほど在籍しているが、修士論文(フランス語で50枚)が終わると、多くの場合留学してさらに研鑽を積むことが勧められている。フランス政府給費留学、サンケイ・スカラシップ(現在は廃止)、ロータリー財団などが主なものだが、ごく最近になって文部省派遣留学生(パリ第7大学との協定に基づく)、サン=クルー・フォントネー高等師範学校国際留学制度も活用されるようになった。また私費で留学する者も学部、大学院を問わず、次第に増えている。

特筆すべきことがらとして、中川(現在「国際18世紀学会」副会長)が数度に

わたる国内シンポジウム・国際シンポジウムを立案企画して実行したこと(「ディドロと18世紀のフランスと日本」、大革命200周年を記念した「革命と文学」、1993年学会における「哲学者とその敵」、国際高等研究所における「翻訳文化」「幸福の条件」など)、近年パリ第7大学から毎年1、2名の外国人研究者が本学を訪れ、本専攻でセミネールや講演を行っていることなどがある。また本専攻卒業生と院生約200名からなる「京都大学フランス文学研究会」が組織され、毎年研究総会を開催し、充実した紀要『仏文研究』(前身が『フランシア』)を発行していることを強調しなければならない。

最後に学会活動であるが、昭和38、42(1963、1967)年に「日本フランス語フランス文学会」秋季大会を本学で催した。また近いうちの開催準備も進められている。本専攻の教官は、学会の各種委員を務めるなど、活発に活動してきた。伊吹、本城、中川は、同学会の副会長などの要職を歴任した。

5.　英語学英文学

本専攻は英語学英文学第1講座および第2講座からなるが、前者は西洋文学第2講座として明治41(1908)年に、後者は西洋文学第4講座として昭和9(1934)年に開設された。本専攻の発足は、当時の文科大学が、外国人でなく日本人による外国文学の研究と教授の重要性を認めたことによるものであった。

初代教授には夏目金之助(漱石)が有力な候補者となったが、この人事は実現に至らず、明治41(1908)年11月、上田敏(柳村)(1874～1916)が教授として着任した。上田は主としてイギリス近代文学、特に詩と劇とについて講義を行った。彼は西洋文学一般に関する該博な知識と豊かな詩才を、教壇のみならず、「京都文学会」の組織やその機関誌である『芸文』の発刊といった活動にも生かし、学界と一般文学界の両方に大きな影響を与えていたが、大正5(1916)年7月、41歳で急逝した。

上田の没後、本専攻は大正5(1916)年9月新たに講師となったエドワード・クラーク(Eadward Clarke、1874～1934)と、既にその任にあった助教授

島文次郎(1871～1945)および講師厨川辰夫(白村、1880～1923)とによって担当されることとなった。クラークは大正10(1921)年教師に、島は大正7(1918)年7月兼任教授に、厨川は同年6月助教授、翌大正8(1919)年6月教授に、それぞれ昇任した。厨川は前任者の上田と同じく、学界と一般文学界との両方で活動したが、大正12(1923)年9月、不幸にも関東大震災の折に生じた津波の犠牲となった。

この間クラークは引き続き在任し、講座の発展に大いに寄与した。本専攻卒業生などが大正14(1925)年10月に雑誌『ミューズ』を創刊したのも、この発展の1つの表れである。クラークは18年の在職の後、昭和9(1934)年3月に満期解嘱となり、イギリスへ帰国しようとしたが、その直前に病没した。没後に夫人によって蔵書5,133冊が寄贈され、「クラーク文庫」として長く利用されることとなった。

厨川の没後、大正12(1923)年11月、石田憲次(1890～1979)が講師として来任し、翌大正13(1924)年12月助教授、次いで昭和9(1934)年教授に昇任して、新たに開設された西洋文学第4講座を担任することとなった。石田は大正5(1916)年に本学を卒業しており、講座開設後26年にして、本専攻は初めて自らの卒業生を教授として迎えた。石田の学風は単なる研究のための研究に満足することなく、作品を周到に味読理解して実践的精神を強調するところに特色があり、それは学位論文である『ジョンソン博士とその群』(1933年)をはじめ、『基督教的文学観』(1932年)、『バーナード・ショオ真髄』(1933年)、『ニューマン評伝』(1936年)、『英国と英国民』(1942年)、『英文学としての聖書とアポクリファ』(1960年)などの数多い著書に表れている。彼は停年に先んじて昭和26(1951)年3月に退官したが、第2次大戦中の困難な時期に講座の担当者として英文学の研究と教育を続けたことは特筆せねばならない。石田在職中の昭和8(1933)年、その2年前に廃刊となっていた『ミューズ』に代わって『アルビオン』が創刊されたが、これは今も本専攻出身者が研究成果を発表する場として学界でも高い評価を得ている。

石田の退官後に本専攻の責任者となったのは中西信太郎(1903～76)であ

る。中西は昭和9(1934)年に講師、昭和13(1938)年3月に助教授となっていたが、昭和24(1949)年に西洋文学第2講座担当の教授に昇任した。彼は主としてシェイクスピアを研究し、この大劇詩人の作品の魅力を十分に把握しつつも、主観的鑑賞に流れることを退け、17世紀から現代に至るシェイクスピア批評を視野に収めて論を立てた。その学風は学位論文『シェイクスピア批評史研究』(1949年)のほか、『シェイクスピア序論』(1939年)、『ハムレット——序説』(1939年)、『シェイクスピアの世界』(1967年)、『シェイクスピア記念日』(1967年)などの著作によってうかがうことができる。中西は昭和42(1967)年3月停年によって退官した。

石田憲次の退官後、西洋文学第4講座は空席となっていたが、昭和32(1957)年10月、工藤好美(1898～1992)が担当することとなった。工藤は昭和36(1961)年1月の停年退官までの間、T.S.エリオット、ウォールター・ペイター、ヘンリー・ジェイムズなどの近代文学を主として講じ、鋭い文学的感性と東西の文芸に関する豊かな知識によって、学生に感銘を与えた。

これより先、広島大学助教授であった御輿員三(おごしかずぞう)(1917～)が昭和26(1951)年6月に、また京都大学助教授(吉田分校勤務)であった菅泰男(1915～)が昭和28(1953)年5月に、それぞれ助教授として着任した。菅は昭和36(1961)年7月教授となり、新たに開設されたアメリカ文学講座の初代の担当者となったが、昭和45(1970)年4月には英語学英文学第1講座を担当するに至り、昭和54(1979)年4月の停年退官までその任にあった。菅はシェイクスピアを中心とするエリザベス朝演劇を専攻し、『シェイクスピアの劇場と舞台』(1963年)によって博士号を得たが、この業績には、演劇を上演の場においてとらえようとする学風がよく表れている。菅の研究は18世紀演劇、現代英米演劇、わが国の伝統演劇などにも及び、その学識は数多くの論文や翻訳において生かされている。また種々の学会で指導的な役割を果たしていることも記しておかねばならない。

御輿は昭和37(1962)年2月に教授に昇任して英語学英文学第2講座の担当となり、昭和55(1980)年4月の停年退官まで在職した。彼は中世から現代に

至るイギリス詩を専攻し、『二十六の群像――キャンタベリー物語序歌訳解』(1959年)、『ことばと詩――英詩考その一』(1969年)、『神と悪魔との間で――英詩考その二』(1970年)などの著書によって研究成果を世に問うた。御輿の学風は文字どおり一言一句をもゆるがせにせず作品を読み解こうとするところにあり、古代や中世の英語、古典語、近代ヨーロッパ諸言語についての学識がその読みには生かされている。なお彼はいわゆる大学紛争の直後の多難な時期に文学部長を務め、公平かつ妥当な判断を常に示して、同僚から大きな信頼を寄せられた。

菅の退官後、第1講座は岡照雄(1930～)が担当することとなった。岡は昭和40(1965)年4月に、京都大学教養部助教授から文学部助教授となり、昭和54(1979)年4月に教授に昇任、平成5(1993)年3月の停年退官まで本専攻の中心となった。岡は元来イギリス小説の研究者であったが、その後17、18両世紀の風刺文学にも関心を広げ、当時の政治、軍事、宗教、思想、科学などに及ぶ知識なしには理解することができない――したがってわが国ではそれまでさほど研究の進んでいなかった――この時代の文学作品を、丹念に分析した。多数の論文や翻訳のほか、現代イギリスの代表的な風刺作家を研究した著書『アンガス・ウィルソン』(1970年)でも知られている。なお、彼は昭和63(1988)年から平成2(1990)年まで文学部長を務めた。

現在の本専攻では、豊田昌倫が第1講座、喜志哲雄が第2講座を担当している。喜志は昭和48(1973)年4月、教養部助教授から文学部助教授となり、昭和57(1982)年4月、教授に昇任した。英米演劇、特にシェイクスピア、王政復古期演劇、現代劇を専攻し、『劇場のシェイクスピア』(1991年)などの著書、演劇論や戯曲の翻訳を発表している。

豊田は昭和58(1983)年4月、同じく教養部助教授から文学部助教授となり、平成5(1993)年4月、教授に昇任した。英語学、特に文体論や現代英語文法を専攻し、『英語のスタイル』(1981年)などの著書や専門分野の文献の翻訳がある。なお本専攻の講座の担当者に英語学の専門家がなったのは豊田が最初である。

平成5(1993)年4月には、奈良女子大学助教授であった佐々木徹が助教授として着任した。佐々木は19世紀と20世紀のイギリス小説、小説論を主に研究している。

本専攻の講義は3名の専任教官とアメリカ文学専攻担当の教官(現在は教授中村紘一)が中心になって行っている。本専攻とアメリカ文学専攻とは学部段階ではそれぞれ独立しているが、大学院段階では「英語学英米文学専攻」として1つになっており、事実上一体となって活動している。講義のほとんどすべても、両専攻に共通のものとなっているのである。両専攻の講義はいずれも教養部(現：総合人間学部)の教官や学外の教官の協力を得て行われているが、他専攻と比べて目立つのは、英米人が英語で行う講義が多いことであろう。もちろん日本人が担当する講義であっても、英語の教材を用いるのであり、両者を通じて学生は英語読解力や英語による表現の能力を徹底的に鍛えられる。もし本専攻の講義に特色があるとすれば、それはおそらく、作品の綿密な読みを重視し、この手続きをおろそかにして作品や作家について空疎な理論を展開する風潮を厳しく戒める点にあるといえよう。

学生の定員は1学年について20名である。本専攻は以前から、文学部の専攻の中では女子学生が多かったが、近年もこの傾向は変わらず、男女比はおよそ半々といったところである。学生は卒業論文を提出することを求められるが、文学部において本専攻とアメリカ文学専攻のみは、既に学部において論文を外国語で書くことを義務づけている。論文の題目は極めて多岐にわたり、特定の傾向を指摘することはできない。

学部卒業生の進路については、近年大きな変化が認められるようになった。かつては本専攻の卒業生の多くは、文学部の他専攻の場合と同じく、教職に就く例が圧倒的であり、新聞・放送・出版等の世界に進む者がいくらか数えられる程度であったが、昭和50年代頃からいわゆる一般企業に就職する者が増え始め、今ではむしろその方が多い。学生の意識にも当然変化が生じており、それは今後本専攻が取り組まねばならない課題となっている。しかし大学院学生には明瞭な専門家意識が認められ、事実、大学院出身者のほと

んど全員が大学に就職する。学生の意識の多様化というこの事態に対応するには、人員の点でも予算の点でも現在の態勢はまったく不十分であり、今後の充実が強く望まれる。

本専攻とアメリカ文学専攻の出身者は「京大英文学会」を組織し、毎年1回の学会の開催、既にふれた会誌『アルビオン』の発行を行っている。また本専攻は当然のこととして国際交流に強く意を用いている。大学院学生には英米に留学する者が多く、他方、英米人の学者の来訪も盛んである。近年の重要な事件は、ブリティッシュ・カウンシルの特別客員教授制度によって、ランカスター大学のジェフリー・リーチ(Geoffrey Leech)とセント・アンドルーズ大学のグレアム・ブラッドショー(Graham Bradshaw)が来学し、講演やセミナーを行ったことである。ただしこういう活動を進める態勢も決して整っているとはいえない。これまた今後の重要な課題であるといわざるを得ない。

6. アメリカ文学

アメリカ文学講座は、昭和37(1962)年度に開設され、それまで英語学英文学講座の中で石田憲次、工藤好美らが担当してきたアメリカ文学の研究・講義は、新設された講座の中で行われることになった。当時、アメリカ文学はほとんどの大学では英文科内で教えられており、独立した講座を有する国立大学は極めて少なかった。現在でもその事情にあまり変わりはない。もっとも、本学でも、本講座が英語学英文学講座と密接な関係を持っていることはいうまでもなく、大学院研究科では英語学英米文学として一括して運営されている。

講座の初代教授に就任した菅泰男(1915～)は、アメリカ演劇、詩を講ずる一方で、教養部の教官の援助を得、また他大学のアメリカ文学研究者を講師として迎えるとともに、フルブライト客員教授としてアメリカ人学者を積極的に招き、本講座の充実を図った。また、当初本講座にはいわゆる「アメリカ研究」を包括する趣旨があったので、西洋史(アメリカ史)講座からの援助

を受けて、その授業を本講座の共通科目にするなどの工夫をした。

さらに、菅は当時「学際的」な目標を持って行われていた「京都大学アメリカ研究センター」における共同研究に教養部のアメリカ研究者とともに参加し、その事業の1つである「京都アメリカ研究夏期セミナー」を同志社大学と共催して、毎年アメリカから一流の学者を招くとともに日本の各大学の教官、研究者の参加を求め、研究の交流および若い学究の養成に努めた(なお、このセミナーは、昭和62年第36回をもって、所期の目的を果たしたとしてその実りある長い歴史を閉じた)。

昭和44(1969)年4月、教養部より青木次生(1932～)が助教授として来任した。こうして、本講座は、後に菅が英語学英文学第1講座に移るまで2名の教官が担当することとなり、一層充実したものとなった。青木は、昭和55(1980)年教授に昇任したが、その後平成3(1991)年3月に退官するまで20余年にわたり講座担任として、アメリカ小説、詩を講じた。その一方で、青木は特にヘンリー・ジェイムズの小説研究に情熱を傾け、とりわけ難解とされている後期三部作『鳩の翼』(本邦初訳、1974年)、『使者たち』(工藤好美と共訳、本邦初訳、1967年)、『金色の盃』(1989年)、さらには、『メイジーの知ったこと』(本邦初訳、1977年)、『聖なる泉』(本邦初訳、1979年)、『厄介な年頃』(本邦初訳、1992年)等の作品の翻訳を精力的に手がけてこれを発表した。その翻訳の特徴は、原文に忠実かつジェイムズ特有の文体を生かすような日本語に移したものであり、その結果として生まれ、それぞれの翻訳に付された作品解説は、それまでのややもすれば正確な読みをおろそかにした抽象的・観念的解釈を排し、ジェイムズが19世紀末のアメリカ風俗を喜劇仕立てに描いたとする説を具体的に実証することによって、ジェイムズ文学研究に新機軸を開いた作品論となった。ほかにも、ジェイムズの紀行文や代表的研究書の翻訳を公にした青木は、これらの仕事によってわが国におけるジェイムズ文学の普及および研究を飛躍的に発展させることとなった。

平成元(1989)年10月、中村紘一が教養部から助教授として着任し、平成5(1993)年、教授に昇任した。中村は『メルヴィルの語り手たち』(1991年)を

著して、ハーマン・メルヴィルの作品の語りや象徴的機能について検討した。

現在、本専攻の授業は、総合人間学部および学外の日本人、外国人の教官の応援を得て、主として19世紀以降のアメリカ文学について多様な領域を網羅するようになっている。また、英語学英文学の授業もほとんど本専攻の単位として認定され、学生は英文学の分野についてもできるだけ広く理解を深めることが期待されている。

学生の在籍数は定員の10名近くになる年度が多く、その中にはほぼ毎年女子学生数名が在籍している。卒業論文はやはり19世紀、20世紀の前半の作家を題目にするものが多いが、最近では1980年代頃の作品を取り上げるものも現れた(卒業論文、修士論文の題目は、毎年発行される「京大英文学会」誌『アルビオン』に掲載されている)。開設以来ほぼ一世代を経た本講座の卒業生は、教職のほかに実に様々な分野において活躍している(就職先については、「京大英文学会」が発行する『卒業生名簿』に詳しい)。また、本学の文学研究科英文学英米文学専攻などに進学して研究職に就き、既に各地の大学で教授、助教授となっている者も多い。本専攻の卒業生は、英語学英文学専攻の卒業生とともに「京大英文学会」を構成し、会員として、学会発表や『アルビオン』の発行を行っている。

平成5(1993)年、総合人間学部が発足し、その国際文化学科ではアメリカ文化・社会論が講じられることとなった。また、文学研究科でもアメリカ文学講座を新たに文献文化学専攻の下に再編する計画が立てられている。これらの現状にあって、本講座も何らかの対応が迫られることは必定であろう。本講座がこれら新設の学科や新たな計画と密接に連携してより充実した教育・研究を図ることはもちろんのことであるが、同時にこれまでも重点的に行ってきた文学作品の読解という基礎的作業を一層鮮明、かつ強力に推進することになるのは間違いない。

一方、アメリカ文学およびその研究自体も変化してきた。従来のキャノンから外れて等閑視されがちであった女性文学やアメリカ少数民族の文学が新

たに評価され研究されるようになった。また、純文学だけでなく、いわゆる大衆文学などのジャンルも積極的に読まれるようになった。これはつとにアメリカという多民族で新興国家の文学の特徴であると同時に、価値の多様化を迎えた今日の世界的な現象でもある。これからは、幸い本学部にある多くの外国文学の講座や国文学の講座とも協力して、それを比較検討する研究も行われるべきであろう。本講座が、そのような研究を含め様々な方法に沿いながらも、やはりアメリカ文学作品の精緻な解読による研究というあくまで基本的な道を歩む限りは、われわれにとって興味深い課題は尽きないと思われる。

7.　ドイツ語学ドイツ文学

本講座は西洋文学第1講座として明治40(1907)年5月に開設され、翌明治41(1908)年9月に最初の授業が行われた。初代教授は藤代禎輔(1868～1927)で、ほかに成瀬清、エーミール・シラー(Emil Schiller)などが講師としてこれを助けた。

藤代は、最初はレッシング、ゲーテ、シラーに始まり、ヘッベル、グリルパルツァーなどを経てヴァーグナー、ハウプトマンに至るドイツ近代戯曲の研究に力を注いだが、次第にゲーテを中心的な研究対象とするようになった。このような藤代の研究方向は以後の本講座の研究と教育の両面における1つの伝統的傾向となった。藤代は『草露集』(1906年)、『文藝と人生』(1914年)、『文化境と自然境』(1922年)などの著作があり、また彼の師フローレンツの協力を得て早くから『万葉集』のドイツ語訳の仕事にも精力を傾けていたが、昭和2(1927)年に病没した。なお、藤代教授時代の大正15(1926)年から講師雪山俊夫によって「ニーベルンゲン」をはじめとするドイツ中世文学の授業が開始され、以後この領域の研究が、研究者の数こそ少ないものの、本講座の伝統の1つになったことを忘れてはならない。

藤代の後を継いだのは成瀬清(1884～1958)である。成瀬は大正8(1919)年8月本学助教授に就任し、昭和5(1930)年10月教授に昇任した。成瀬は、ド

イツ近代戯曲の研究という藤代以来の伝統を受け継ぐかたわら、一方では第1次大戦前後期にドイツの劇壇を席巻した表現主義戯曲に強い関心を寄せ、他方ではその精神的系譜を求めて、グラッベやビューヒナー、更には疾風怒濤(シュトルム・ウント・ドラング)期の文学にまで遡って研究を深めた。その成果をまとめたのが著書『疾風怒濤時代と現代独逸文学』(1929年)である。成瀬にはこのほかに『近代独逸文学思潮』(1921年)、『文芸に現はれた人間の姿』(1947年)などの著作があるが、彼が表現主義戯曲にとどまらず、ハウプトマン、トーマス・マン、ヴァッサーマン、カロッサ、ブレヒト、コルベンハイヤーなど多くの現代作家にも関心を寄せ、授業で取り上げたり、翻訳紹介に努めたことは、本講座の教育研究活動に新たな特色を付与するものであった。むろん、これは時とともに緊密化する日独両国関係の屈折した反映という側面を持っていたと思われるが、その両国の敗戦によって第2次大戦が終結を迎える直前の昭和20(1945)年4月に成瀬は停年退官した。

教授、助教授ともに欠員の状態が1年近く続いた後、昭和21(1946)年2月に大山定一(1904～74)が助教授に就任して、本講座再建の重責を担うことになった。大山は昭和25(1950)年3月教授に昇任し、以後昭和43(1968)年3月に停年退官するまで約20年にわたってその責を全うした。大山が最も心を注いだ研究対象はゲーテであった。そのことは助教授就任の直後に刊行された『文学ノート』(1947年)に既に明らかであるが、大山の長年にわたるゲーテへの傾倒の成果は後に『ゲーテ詩集』(1949年)や『ファウスト』(1960年)の見事な訳業となって結実した。しかし大山は他方でリルケ、トーマス・マンなどを中心とする20世紀ドイツ文学にも強い関心を寄せ、『作家の歩みについて――トーマス・マン覚え書』(1946年)、『リルケ雑記』(1947年)等の著書や、リルケの『マルテの手記』の訳書(1939年)などによって、わが国におけるドイツ現代文学の受容に大きな貢献をなすとともに、本講座に新しい時代にふさわしい清新な気風を吹きこむのに成功したのだった。大山の後を継いだのは谷友幸(1911～81)である。谷は昭和32(1957)年5月に本学教養部助教授から文学部助教授となり、昭和42(1967)年12月に教授に昇任し、翌昭和43

(1968)年4月から本講座の主任教授となった。谷は若い頃は現代ドイツ文学に関心を寄せ、とりわけリルケを主たる研究対象として、この詩人の伝記研究の分野での先駆的な仕事といえる『リルケ伝』(1948年)を著すかたわら、早くから翻訳などによってリルケのわが国への紹介に努めた。しかし、やがて谷はヘルダーリーン研究に専念するようになり、文学部に着任してからは毎年のようにヘルダーリーンを講じた。その長年にわたる研究の成果が学位論文『ヘルダーリーン文学の基礎的研究』(1962年)である。ほかにヘルダーリーン『悲劇エムペードクレス』の訳書(1953年)や論文集『ドイツ文学論考』(1982年)等がある。

谷が昭和50(1975)年3月に停年退官した後を継いだのは平井俊夫(1926～93)である。平井は昭和44(1969)年4月に本学教養部助教授から文学部助教授に転じ、昭和51(1976)年10月に教授に昇任し、本講座を担当した。大山、谷両教授の時代を通じて次第にゲーテ、ヘルダーリーンからリルケに至るドイツ近・現代の抒情詩が本講座の研究、教育の中心的な領域となっていったが、平井はこの傾向をいちだんと推し進めた。すなわち平井は、最初はトラークルをはじめとする20世紀初頭の表現主義詩人たちの研究から出発し、『トラークル詩集』(1967年)の訳業などを世に問うていたが、やがてノヴァーリス、ブレンターノ、ドロステ=ヒュルスホフ等のドイツ近代の抒情詩人たちの研究を経て、教授昇任後は教育者としても研究者としてももっぱらゲーテの抒情詩に取り組んだ。平成2(1990)年3月の停年退官の直前に刊行された『西東詩集――翻訳と注釈』(1990年)は、その成果であった。

昭和54(1979)年4月に本学教養部助教授から文学部助教授に転じ、平成2(1990)年4月に教授に昇任して本講座を担当することになった山口知三は、トーマス・マン研究と反ナチス亡命文学研究を主たる課題とし、トーマス・マンの『非政治的人間の考察』の訳書(1968～71年)をはじめとする多くのマン関係文献の翻訳や、『ナチス通りの出版社』(共著、1989年)、『ドイツを追われた人びと』(1991年)等の著書を出している。また、平成5(1993)年4月に本学部助教授に就任した松村朋彦はゲーテを中心としながらも広く18世紀

ドイツの思想と文化全般に関心を寄せて研究を行っている。

以上、本講座を担当した歴代の教官の足跡をたどってきたが、むろん1講座(教授、助教授各1名)のみからなる本専攻の運営は、本学の教養部ドイツ語教室(現：総合人間学部ドイツ語部会)教官をはじめとする学内学外からの多数の非常勤講師や、多くのドイツ人教師の協力があってはじめて可能であったことを忘れてはなるまい。また、いうまでもないことながら、講座の歴史はなによりもまずそこで学んだ学生たちを抜きにしてはあり得ない。明治40(1907)年の開設以来、平成6(1994)年3月末現在に至るまで約90年の間に本講座に在籍した学生の数は、昭和29(1954)年3月卒業を最後とする旧制度の卒業生が約230名、昭和28(1953)年3月卒業に始まる新制度の卒業生が約270名で、総計約500名にのぼる。しかし、これだけの数の人間が歩んだ軌跡を1大学の1講座の歴史に結び付けて概括するのは不遜にすぎるであろう。特にこの間に日本とドイツ両国がそれぞれに、あるいは手をたずさえてたどった歴史的道程の浮沈の激しさを考えるとなおさらである。毎年10名を超える卒業生を出していた過去のいくつかの時期に比べると、本講座に学ぶ学生の数は近年はかなり減少しているが、果たして今後はどうなることだろうか。

8.　西洋古典語学西洋古典文学

西洋古典学は、ヘレニズム時代のギリシア人自身による文献学的研究に遡るものであるが、ルネサンスの「ギリシア・ローマ再発見」以来、ヨーロッパの最も重要な基礎的学問の1つとなった。この学問の重要性の認識のもとに西洋古典語学が開講されたのは明治43(1910)年のことである。

はじめギリシア語・ラテン語は関連諸講座の教官が担当したが、大正9(1920)年7月、田中秀央(1886～1974)が西洋古典語学担当の講師として着任し、同年11月助教授に任じられた。田中ははじめ言語学講座の一部としてギリシア語・ラテン語をそれぞれ週4時間ずつ(昭和3年からは週6時間)担当したが、昭和6(1931)年教授となって西洋文学第2講座を分担し、ギリシア語・ラテン語のほかに、西洋古典文学普通講義として古代ギリシア文学史を

毎年講じた。

次いで昭和13(1938)年、田中は西洋文学第2講座担当となり、翌昭和14(1939)年西洋古典文学が講座外正科目として開設されるに伴い、ギリシア語・ラテン語(週5時間ずつ)のほか、普通講義として古代ギリシア文学史、特殊講義としてラテン文学史概説を講じた。また昭和16(1941)年からは松平千秋(1915～)が講師としてギリシア語・ラテン語の初歩講読を担当することになった。

昭和21(1946)年、田中は停年退官したが、わが国において最初の西洋古典学の講座創設に尽力し、また西洋古典学の研究と教育に貢献した功績は極めて大きい。その代表的著作として『ギリシア文学史』(1939年、黒田正利と共著)、『ラテン文学史』(1943年)、『羅和辞典(Lexicon Latino-Japonicum)』(1952年)があげられる。訳書はギリシア・ラテンの古典作品を中心に約30冊を数えるが、主なものとしてホメロス『オデュッセイア』(1939年、松浦嘉一と共訳)、3大悲劇詩人の全訳(1941～49年、内山敬二郎と共訳)、ウェルギリウス『アエネイス』(1941年、木村満三と共訳)がある。

田中の退官後、松平は昭和22(1947)年助教授に任じられ、ギリシア・ラテン文学を講じた。昭和33(1958)年教授に昇任し、昭和37(1962)年には「イーリアス第2歌の研究」によって文学博士の学位を得た。また昭和46(1971)年より翌昭和47(1972)年1月までの間文学部長を務めた。この間、昭和28(1953)年8月、西洋古典語学西洋古典文学講座の設置が認可され、これによって本講座は名実ともに1講座として独立することになった。また同年、新制大学院修士課程の発足に伴い、本講座は言語学講座、イタリア語学イタリア文学講座とともに言語学講座を構成し、昭和30(1955)年には博士課程が設置されて新しい教育体制が整えられた。昭和28(1953)年からは、ギリシア語・ラテン語文法の2時間コースのほかにそれぞれ4時間コースが設けられた。

松平は主としてホメロス、ヘシオドス、ヘロドトス、ギリシア悲劇、喜劇を研究し、その独創的な考察方法と緻密な考証によって新しい地平を切り開

いた。またその関心はヘレニズム文学、ラテン文学に及んでおり、わが国ではほとんど未開拓であったこれらの分野において先導的研究を行った。翻訳は、ギリシア叙事詩、悲劇、喜劇、歴史、ローマ喜劇など広い分野に及ぶが、厳正な原典批判に基づくヘロドトス『歴史』(1967年)はとりわけ学界への貢献度の高いものであり、ホメロス『イリアス』(1992年)、『オデュッセイア』(1982年)は清新な名訳として知られる。著書としては主要論文を収めた『ホメロスとヘロドトス』(1985年)がある。

昭和44(1969)年、岡道男(1931～)が助教授に就任し、松平の停年退官(昭和54年)後、教授に昇任した。岡は、松平の学風を受け継いでギリシア叙事詩、抒情詩、悲劇などを講じ、さらにラテン叙事詩、抒情詩、キケロ、詩論(文芸論)に研究対象を広げた。その著書『ホメロスにおける伝統の継承と創造』(1988年)は、昭和52(1977)年に学位論文として提出した「ホメロスと叙事詩の環」をはじめ、ホメロスに関する諸論文を収めたものである。翻訳では、アポロニオス『アルゴナウティカ』(1982年)を初めてわが国に紹介した。

昭和62(1987)年、中務哲郎が助教授に就任し、岡の停年退官(平成6年)後、教授に昇任した。中務はホメロス、ヘロドトス、ギリシア悲劇、喜劇などを講じているが、その研究の特色は古典古代を中心とする説話研究という新しい分野の開拓にあり、その成果の1つとして論文集『物語の海へ』(1991年)が刊行された。

中村善也は昭和60(1985)年死去するまで長年にわたって講師として研究、演習を担当し、専門としたギリシア悲劇をはじめ、ギリシア喜劇、ローマ悲劇、ラテン詩などを講じた。その主要論文は『ギリシア悲劇研究』(1988年)に収められている。

本講座の学部卒業生は、旧制9名、新制39名、大学院修士課程修了者は38名であり、教育界、出版界などにおいて活躍している。本講座の設立以後学位(論文博士)を取得した者は7名である。また昭和55(1980)年以来、本講座の出身者が中心となって「京都大学西洋古典研究会」が設立され、学術誌『西洋古典論集』が刊行されている。

本講座では海外との交流は極めて盛んである。学生、卒業生の多くは海外の大学において留学または研修し、教授の交流、海外の学者の講演もしばしば行われている。松平は昭和38(1963)年にドイツ連邦共和国マインツ大学において西洋古典文学を講じ、また岡は昭和40～41(1965～66)年と昭和63～平成元(1988～89)年に同大学において講義を担当した。一方、昭和57(1982)年には同大学のシュピーラ(A. Spira)教授が来日して本講座で講演、ゼミナールを行った。

終わりに、わが国の西洋古典学研究者が研究活動の場にしている「日本西洋古典学会」についてふれておく。これは昭和25(1950)年に設立された全国的学会であって、その事務局を本研究室内に置き、昭和26(1951)年に創刊された学会誌『西洋古典学研究』は平成5(1993)年度現在42巻に達する。松平はその創設以来中心的な運営委員の任に当たり、昭和48(1973)年より昭和61(1986)年まで委員長として学会の発展に尽力した。

西洋古典学は初めに述べたように長い歴史を持つ学問であるが、文献学の伝統的基盤を忠実に保持しつつ、たえず関連科学の成果を取り入れて新しい発展を遂げてきた。本講座の今後の課題は、先人の輝かしい業績に基づき、より広い視野から古典古代の文学、思想の本質を究明することにあるといえる。

9.　イタリア語学イタリア文学

西欧文明をその文化史的背景の中で理解しようとするとき、この文明の根源にある古典古代と中世末期からルネサンスにかけてのイタリアの文化をまず視野に収める必要のあることは、議論の余地のない「常識」に類することであろう。ところが現代の日本においてどの大学でも学べる西欧の言語は、依然として英独仏の3カ国語に限られている。今もって日本人の描く西欧像の中で圧倒的な地位を占めているのは、この3国にほかならない。西欧の他の多数の国々は、なぜ抜け落ちてしまったのか。この明らかにゆがんだ像の形成には、歴史的な背景があった。富国強兵を旨とする明治政府が、当時の

列強であった3国をたまたま手本にしたためである。もう1つ理由がある。科学・技術の輸入に急であるあまり、その由って来る文化的背景がなおざりにされてきたことである。

こうした日本の状況の中で例外的に本学では、明治39(1906)年の文学部創設以来、早くからイタリア文学の重要性に着目し研究を進めた先人が輩出した。上田敏や厨川辰夫(白村)らの英文学出身の教授たちである。上田は京都大学着任以前に『詩聖ダンテ』(1901年)を世に問い、つとにイタリア文学には深い関心を抱いていたが、明治41(1908)年西洋文学第2講座に来任以来、「ダンテの神曲」を講じ、多くの講演によってイタリア文学の紹介に努めた。上田の薫陶を得て、後に『神曲』の美麗な韻文訳を完成した竹友藻風が輩出している。厨川も総合研究の上からイタリア文学の研究を奨励した。

大正10(1921)年は、ダンテ没後600年記念の年に当たり、坂口昂、新村出、濱田耕作、厨川辰夫、大賀寿吉、黒田正利によって『芸文』の「ダンテ記念号」が編集され、同時にこれらの先学が中心となって、イタリア文化の研究と紹介を目的とする「イタリア会」が結成された。その後本会は新村、濱田、大賀、黒田らが中心となって初期の活動を続けたが、その間『芸文』の「ボッカチオ記念号」も刊行され、また大正13(1924)年にはイタリア総領事アルフォンソ・ガスコ(Alfonso Gasco、1882～1937)および黒田正利(1890～1973)を嘱託としてイタリア語の講習が始められ、数年に及んだ。新村と濱田はかねてから文学科にイタリア文学の1講座を加え、その充実を図ることを望んでいたが、ようやく昭和6(1931)年になってイタリア語が副科目の1つとして加えられ、ガスコに講師を委嘱した。

一方昭和12(1937)年以来日伊両国間の親善は急速に増大し、第1回日伊文化協定が締結され、この協定に基づき日伊両国の代表的大学に、それぞれイタリア語学・文学および日本語学・文学講座を開設することが決まり、イタリアにおいてはローマ大学に日本語日本文学講座の開設を見た。一方日本においては直接この交渉に当たっていた外務省文化事業部が、当時総長であった濱田のかねてからの念願を知っていたので、本学にイタリア文学講座を設

置することに進んで協力しようとし、また財団法人原田積善会はこの事情を了解し、その実現に必要な全費用の寄付を快諾した。

本文学部のこのような恵まれた伝統に育まれつつ、昭和15(1940)年に日本で最初のイタリア文学講座が開設される運びになる。イタリア文学研究の上で、さらにもう1つ本学に幸いしたことは、同講座の開設と軌を一にして、生前大賀寿吉によって収集された日本では他に類を見ないダンテ研究文献の一大蔵書「旭江文庫」の寄贈を受け、これが附属図書館に収められたことである。

講座が開設され、講義は講師として黒田正利とフォスコ・マライーニ(Fosco Maraini、1912～)が担当したが、専攻学生はなお少数であった。寄付講座として誕生した本講座はやがて正式講座となり、終戦を期に、昭和21(1946)年3月からイタリアより帰朝した野上素一(1910～)を専任講師として迎えた。野上は昭和22(1947)年に、助教授、次いで昭和29(1954)年には教授に昇任し、毎年「イタリア文学史」を講ずるほか、幅広く「イタリア近代文学」「イタリア古典文学」「ダンテ研究」「リソルジメント文学」「ゴルドーニ研究」などを研究・演習に取り上げている。その間に「イタリア学会」と「日本ダンテ学会」の設立を見、昭和26(1951)年には『ダンテ学会誌』1号が発刊され、昭和29(1954)年発刊の2号は『イタリア学会誌』と改められ、以後同名のタイトルで両学会が編纂に当たり、平成5(1993)年現在43号に達しており、常にわが国における斯学の中心的地位を占め、その名望を誇ってきている。

昭和40(1965)年にはルネサンス人文主義を主たる研究テーマとする清水純一(1924～88)が助教授として着任し、本講座に新風を吹き込んだ。昭和46(1971)年野上の退官に伴い、清水は昭和48(1973)年教授に昇任したが、その間『ジョルダーノ・ブルーノ研究』(1970年)、『ルネサンスの偉大と頽廃』(1972年)等の著作を世に問い、本講座では、ボッカッチョ、アリオスト、ヴィーコ等の研究・演習を行うほか、「イタリア文学史」の講義を担当した。清水の功績の中で特筆すべきは本講座のために昭和55(1980)年に外国人教師

のポストを獲得したことである。これによってイタリア文学を専門とするイタリア人教師を招聘することが可能となり、ボローニャ大学からペテルノッリ(Giovanni Peternolli)、オスカリーノ(Anna Maria Oscarino)、ザネッリ(Franca Zanelli Quarantiti)、レッチェ大学からサヴァレーゼ(Nicola Savarese)らの優秀な教師が相次いで着任し学生指導に当たり、今日に至っている。

昭和50(1975)年にはイタリア語史を主たる研究テーマとする岩倉具忠(ともただ)が助教授として着任し、「シチリア派」「神曲講読」「ダンテ研究」「解放されたエルサレム」等の研究・演習を担当した。岩倉は昭和62(1987)年の清水の退官に伴い昭和63(1988)年教授に昇任したが、その間ダンテの言語思想に関する研究を深め、『ダンテ俗語詩論』(1984年)、『ダンテ研究』(1988年)等を発表している。

平成2(1990)年に本講座は15～16世紀イタリア文学を専攻し、とりわけレオナルド・ダ・ヴィンチの手稿の解説と分析を主たる研究テーマとする齊藤泰弘を助教授に迎え、一層の充実が図られた。齊藤にはレオナルド手稿の翻訳や『レオナルド・ダ・ヴィンチの謎――天才の素顔』(1987年)等の著作がある。齊藤はレオナルド、アリオスト、ゴルドーニ等を演習・研究に取り上げている。

当講座は旧制時代に17名、新制になってから現在まで70名の学部卒業生を出している。修士号取得者は46名、博士課程修了者28名にのぼる。卒業論文のテーマは、ほぼ半数が現代文学で、その他は中世・ルネサンス、バロック、啓蒙主義、リソルジメント等各時代の多岐の分野にわたっている。

10. 言　語　学

本講座は明治41(1908)年に開設され、現在に至るまで、新村出(1876～1967)、落合太郎(1886～1969)、泉井久之助(1905～83)、西田龍雄(1928～)、宮岡伯人の5名の教授の担任を経ている。

新村出は明治42(1909)年5月に教授に昇任して以来、昭和11(1936)年10月

に退官するまで、27年の長きにわたって初代の担任者として講座の基礎を築いた。講義では主に日本語を中心とする言語研究の成果を述べ、演習ではパウル、サピア等先進の学説の検討によって学生を指導した。新村の業績は国語史、文法学、書誌文献学など多方面に及び、それらは『新村出全集』全15巻(1971～73年)としてまとめられている。また、辞書の編纂の分野でも多くの業績を残し、特に昭和30(1955)年初版で現在も改版を続けている『広辞苑』は、日本語の正しい発展と国民の知識の向上の面で大きな役割を果たしてきた。新村は明治44(1911)年10月から退官まで本学附属図書館長に任ぜられ、また学外では、昭和13(1938)年に「日本言語学会」を全国に主唱して創立し、昭和42(1967)年までその会長として学会の運営と発展に尽くした。

新村の退官後、昭和12(1937)年12月に、落合太郎が教授に昇任し、昭和21(1946)年12月に第三高等学校校長に転ずるまで本講座を担任した。その間、主としてフランス語を対象として音声学、音韻論、意味論、歴史言語学などを講じるとともに、より広い視点から東西の思想史、ギリシア以来の西洋の言語観の歴史などについても講義を行った。また、昭和17(1942)年11月から本学を離れるまで学部長の職にあって、戦時下多端の本学部の行政に当たった。

泉井久之助は、昭和6(1931)年に講師、昭和11(1936)年に助教授に任ぜられた後、昭和22(1947)年4月から昭和44(1969)年3月に停年退官するまで教授として言語学講座を担任し、独自の研究を遂行するとともに、講座の充実と後進の指導育成に尽力した。泉井の主要研究領域はギリシア語、ラテン語を中心とした印欧語比較研究であったが、その言語学的関心の及ぶところは実に広く、ミクロネシアや当時のフランス領インドシナでの現地調査によって南方言語の研究も発展させ、かつ日本語の系統についても積極的に発言した。また、言語の一般的な性格の追究やフンボルトやキケロなどの偉大な先人の人間像の探究にも力を注いだ。主な著書に、『言語の構造』(1939年)、『ヨーロッパの言語』(1968年)、『マライ・ポリネシア諸語』(1975年)、『言語研究とフンボルト』(1976年)がある。泉井は昭和24(1949)年11月から昭和32

(1957)年7月まで本学附属図書館長に補せられ、学外では昭和52(1977)年から、昭和54年まで「日本言語学会」会長を務めた。

西田龍雄は、昭和33(1958)年7月に助教授として着任した後、昭和47(1972)年2月に教授に昇任し、以後平成4(1992)年3月に停年退官するまで本講座を担任した。西田はシナ・チベット語比較研究を専門分野とし、この語族全体に対する幅広い知識と深い理解の上に立って、西夏語、西夏文字の解読をはじめとする膨大かつ緻密な業績を積み重ねた。昭和34(1959)年に『居庸関』(1958年)の共同研究により日本学士院賞を授けられ、さらに昭和43(1968)年には学位論文に加筆を施した『西夏語の研究』上下(1964年)により日本学士院恩賜賞を受賞した。また、文字論の分野でも『世界の文字』(1981年、編著)、『アジアの未解読文字』(1982年)に代表される著作がある。

西田は学内では昭和61(1986)年4月から退官するまで附属図書館長に任ぜられ、また学外では昭和54(1979)年から昭和56(1981)年まで「日本言語学会」会長、昭和52(1977)年から昭和57(1982)年まで「国際言語学者会議」常置委員会の実行委員として言語学の発展に尽くした。

本講座は西田が担任中の昭和51(1976)年度に実験講座として認められた。また、平成4(1992)年度より文学部に文化行動学科が設置され、その中に言語科学講座が新たに設けられた。昭和57(1982)年4月より言語学講座の助教授として研究・教育に従事していた佐藤昭裕は、平成4(1992)年8月にこの新講座に移った。

現在、教授として講座を担任しているのは、平成6(1994)年4月に着任した宮岡伯人である。宮岡は豊かなフィールド経験に基づき、アラスカ南西部のユピック・エスキモー語を主たる研究対象にして、正書法、音声・音韻、形態論、統語論、社会人類学など非常に射程の広い研究を進めている。この分野の著書として『エスキモー　極北の文化誌』(1987年)、“Survey of Yup'ik Grammar”(1991、共著)等がある。また、北東アジアから北アメリカ北西部に連なる環北太平洋地域に蝟集し、系統的にも類型的にも他に類がないほどの多様性を示す言語群に深い関心を寄せており、内外の研究者の協

力を得てこの言語地域の組織的な調査研究を進めている。その現在までの成果は『北の言語　類型と歴史』(1992年、編著)として公刊されている。

宮岡以外に現在、本講座に所属しているのは助教授の吉田和彦である。吉田は昭和56(1981)年から昭和60(1985)年まで米国のコーネル大学に留学し、印欧語比較言語学および一般言語学を修めた。帰国後間もない昭和60(1985)年11月に講師として着任し、平成5(1993)年3月に助教授に昇任した。吉田は印欧語比較研究を主たる専門とし、印欧語族の各語派の重要言語について言語事実の蓄積を着実に進めている。特に、今世紀になってようやく解読されたヒッタイト語を研究の中心に据え、より妥当な印欧祖語の再建を目標にしている。コーネル大学に提出した博士論文は、後に“The Hittite Mediopassive Ending in *-ri*”(1990)としてドイツから出版されている。

言語学講座が設置されて間もなく90年になろうとしているが、言語学の飛躍的な発展を受けて、本講座が対象とする学問領域も拡大した。現在、記述言語学、理論言語学、歴史比較言語学、ならびにそれらに基礎を置く個別言語および言語群の具体的な分析など、現代言語学のほとんどの領域にわたって研究・教育が行われている。また、これに対応して学生数、特に大学院生の数が著しく増加し、大学院修了者の多くはわが国の言語学研究の高度化に重要な役割を果たしている。国際交流の面でも、海外の研究者や関係諸機関との連携の緊密化、留学生の受け入れはいうまでもなく、大学院生のほぼ半数が長期にわたり外国に留学することが常態になった。教室活動の成果の一端は昭和57(1982)年から年1回発行している『言語学研究(Linguistic Research)』から知ることができる。近年急速に発展する学際化、国際化の時代にあって、報告されたばかりの新言語、新しく発掘された文献資料、消滅の危機に瀕している少数民族の言語に関わる問題への寄与、あるいは認知科学や情報科学の分野からの協力の要請などに代表されるように、学界および一般社会の本講座に対する期待はますます増大しつつある。

第4項　文化行動学科

1. 心　理　学

心理学講座は明治39(1906)年6月文科大学創設と同時に開設され、7月初代の担任教授に東京高等師範学校教授松本亦太郎(1865～1943)が任命された。イェール大学や、世界最初の心理学実験室といわれるライプツィヒのW. ヴントの実験室にも留学した松本は、明治41(1908)年独立棟の心理学実験場を創設し、心理学の実験的研究を興した。木造平屋建て108坪のこの建物は、昭和20(1945)年に戦時疎開で一部を失ったが、昭和39(1964)年文学部東館増築に伴って取り壊されるまで半世紀以上にわたり本学の心理学研究の中心となり、その「たまり」は、そこで育った卒業生たちの心の故郷ともなった。松本は、内観心理学でとらえ得ない精神活動の側面を反応時間等の指標によって明らかにする精神動作学の構築を目指し、書字や用箸運動など実験的研究の実績をあげて、動作研究の先駆者の1人となった。また、幼児や児童、青年の発達的研究に加えて、老人研究の先鞭をつけ、能力の個人差や種族差、芸術心理学的研究にも成果をあげた。『精神的動作』(1914年)、『素質の心理』(1929年)、『絵画鑑賞の心理』(1926年)等の著書がある。

野上俊夫(1882～1963)は、講座開設の年の9月から文科大学雇の職名で助手を務め、明治41(1908)年講師、明治44(1911)年には助教授に就任した。松本が大正2(1913)年、東京帝国大学に転出、野上は海外留学中だったので、西田幾多郎教授が講座を兼担、深田康算教授、桑木嚴翼教授、千葉胤成講師らも、心理学の哲学的基礎に及ぶ講義を行った。野上は大正5(1916)年に帰国、翌大正6(1917)年教授に昇任、以後昭和17(1942)年の停年退官まで講座を主宰した。野上は、G. S. ホールやT. A. リボ等アメリカやフランスの心理学に興味を持ち、実証的具体的な学風を採った。主として心身の発達を研究し、『青年の心理と教育』(1937年)等の著書がある。生理学や、精神病学、人類学などとの提携を重視し、副科目として医学部の教授による授業を提供

した。野上の教授昇任と同時期に千葉が助教授に就任したが、大正9(1920)年海外留学に出発し、さらに東北帝国大学教授として転出した。

大正11(1922)年岩井勝二郎(1886～1937)が講師に嘱託され、昭和4(1929)年には助教授になって同年よりドイツに留学、昭和11(1936)年帰国した。岩井は実験法と数理的解析など研究法を専門にしていたが、ゲシュタルト心理学をわが国にいち早く紹介し、また、乳幼児の形の認知を子どもの対象物との関わりの中でとらえて、今日の生態学的知覚論の考え方を先取りする実験的研究を行った。惜しくも昭和12(1937)年に病没、その前日付で教授に任ぜられた。岩井の留学中から第三高等学校教授高木貞二が講師として学生の指導に当たったが、昭和9(1934)年東京帝国大学に転出した。昭和13(1938)年園原太郎(1908～82)が講師に嘱託された。野上の停年退官後は教育学の木村素衛教授が講座を分担した。

昭和19(1944)年矢田部達郎(1893～1958)が九州帝国大学から教授として迎えられ、講座を担当した。翌昭和20(1945)年には、園原が助教授、八木冕が講師となった。矢田部は、九州大学在任中の『意志心理学史』に引き続いて主著『思考心理学』全4巻(1946～59年)および『思考心理学史』(1948年)を著し、また、心理学全般にわたる独自の体系を樹立して後進に大きい影響を与えた。心理学を広く精神の生物学ととらえて、その課題を、精神の形態学、生理学、生態学に区分し、例えば知的生活の法則に関する精神生理学では、知覚、記憶、思考の諸領域を通じて代表と体制化の高次法則を抽出するなど、次元の高い総合的な見地を展開した(『心理学序説』1950年)。

昭和27(1952)年、八木が東京大学に転出、本吉良治(1921～)が専任講師となり、翌昭和28(1953)年には園原が教授に昇任した。昭和30(1955)年には教養部から柿崎祐一(1915～94)が助教授として来任した。昭和32(1957)年矢田部の停年退官後は、園原が講座を担当、本吉は助教授に任ぜられた。園原は、極めて広い視野を持って、認知発達をはじめとする精神発達とその障害を研究し、発達における機能間の連関性の分析と、その体制化に関する独自の理論を発展させた。園原を代表者とする共同研究では、人格診断法、音声

や音韻の分析とその言語教育への応用、行動発達における機能連関、発達障害の診断と分類法、行動発達における経験の体制化等が取り上げられ、その理論の幅と生産性をよく示している。著書・編著書に『自殺の心理』(1952年)、『認知の発達』(1980年)等がある。

昭和47(1972)年、園原が停年退官、柿崎が教授に昇任した。柿崎は、両眼視野闘争現象等の精緻な実験的研究を通して、知覚判断における種々の系間の相互作用を追究した。さらに、知覚を生体の活動全体の中に位置づける立場から、知覚の現象、機能、および機構に根本的な考察を加え、心理学的知覚論を樹立した。『知覚判断』(1974年)、『心理学的知覚論序説』(1993年)等の著書がある。

心理学の研究領域の深化・拡大と専攻学生の大幅な増加に、創立以来の1講座では対応しきれなくなっていたが、昭和48(1973)年待望の第2講座が設置され、柿崎が第1講座、本吉が教授に昇任して第2講座の担当となった。両講座は一体となって研究・教育に当たる体制をとった。本吉は、ネズミの弁別学習機構に関する厳密な実験的研究で大きな成果をあげ、認知の様々な問題について、矢田部の代表機能の枠組みに基づきつつ、実験行動分析の成果を踏まえて深い洞察を与えた。『学習』(1969年)、『心と道具』(1994年)等の編著書がある。

昭和50(1975)年、平野俊二(1929～93)が、大阪市立大学から助教授に迎えられ、柿崎の停年退官後、昭和55(1980)年第1講座担当の教授に昇任した。平野は、動物の学習と記憶の行動学的および生理心理学的研究、ことに記憶における海馬の機能を明らかにする精緻な実験的研究で知られている。『行動の生物学的基礎』(1981年)等の編著書のほか、その論文の一部は『記憶痕跡の探求』(1993年)に収録されている。平野は、停年を前に病に侵されつつも停年退官まで激務をこなしたが、平成5(1993)年退官の18日後に死去した。

昭和57(1982)年に清水御代明が奈良女子大学から助教授として来任、本吉の停年退官後の昭和61(1986)年教授になった。清水は、概念表象とその獲得

について、言語文脈による概念の獲得や、語句連想反応間の連関構造の実証的検討を試みており、共著書『認識の形成』(1982年)等がある。昭和62(1987)年、追手門学院大学から苧阪直行が助教授として着任し、平野退官後の平成6(1994)年教授に昇任した。苧阪は、知覚の実験的研究を専門とし、周辺視の精神物理学的特性の定式化と、周辺視が読みなどの視覚情報処理に果たす役割を中心視との関わりの中で明らかにする研究を進めている。著書に『周辺視機能の精神物理学的研究』(1983年)等がある。平成4(1992)年に文化行動学科が設置されて心理学専攻も哲学科から新学科に移り、それとともに、第1講座は基礎心理学講座、第2講座は実験心理学講座と改称したが、両講座一体の研究・教育体制はそのまま引き継がれている。平成4(1992)年、国際電気通信基礎技術研究所から乾敏郎が助教授に迎えられた。乾は、視覚の心理物理学的、計算論的研究や視覚と記憶の神経回路網モデルの研究を中心に、認知科学的研究を進めている。著書に『視覚情報処理の基礎』(1990年)、『Q＆Aでわかる脳と視覚』(1993年)等がある。

文字どおり一対一の指導を必要とする実験実習や動物の飼育を含む実験室の管理運営など、本専攻にとって助手の果たしてきた役割は大きく、教室の研究の活性化に貢献してきた。

本専攻は、教育学部や教養部(現：総合人間学部)および大学院人間・環境学研究科の心理学関係教室と緊密な関係を持ち、研究面や教育面で相互に協力してきた。専門的分化の著しい心理学の広範な領域について水準の高い教育を行うため、これまでも全国の優れた研究者に講義を依頼してきたが、大学院の指導強化の要請の高まりなど、部局の違いを超えて、より密接な協力体制を追求する時期に至っている。

本専攻周辺には早くから活発な研究会活動が組織されてきた。講座開設後間もない明治41(1908)年に「心理研究会」が創立され、大正3(1914)年には大学院生で組織される「心理学研究会」と広く専攻生を包含する「心理学読書会」とに分かれたが、やがて「心理学読書会」に一本化され今日に至っている。専門の分化を反映して、現在では、分野別の研究会の活動が盛んに

なっている。昭和9(1934)年には卒業生有志が「京都実験心理学研究会」を結成、機関誌『実験心理学研究』を発刊した(昭和16年まで12冊発行)。昭和22(1947)年八木らの尽力によって部外者にも開かれた雑誌『心理』が発刊された(昭和24年まで5冊発行)。昭和24(1949)年には講座から“University of Kyoto Studies in Psychology I”を世界各国に送り反響を呼んだ。その後、昭和52(1977)年には柿崎らの努力で英文の研究速報誌“Brief Report from the Laboratory of Psychology, Kyoto University”が創刊され、教官や大学院生などの研究を世界に発信している。園原、柿崎、本吉らが中心となり、全国の研究者に呼びかけて作られた理論誌『心理学評論』は昭和32(1957)年に創刊され、今も当教室に本拠を置いて全国の研究者に理論的成果の発表と討論の場を提供している。昔は心理学の初級実験実習は各教室手作りの教材によっていたが、柿崎らの呼びかけで、関西の多くの教室の力を集めて「心理学実験指導研究会」が結成され、昭和35(1960)年に実験指導書『実験とテスト』の初版が発行された。その後も改訂を重ねて声価を高めるとともに、指導書以外の教材の試作にも取り組んでいる。本吉は内外の研究者との交流を重視して、在任中から外国の研究者に講演の機会を提供していたが、本吉の退官を機に京都心理学セミナーと京都国際心理学セミナーが開設された。両セミナーとも学外にも公開され貴重な交流の場となっている。

「関西心理学会」はわが国最古の心理学会であるが、野上が創立時から24年間、引き続いて矢田部が6年間、その後も平野が4年間会長を務め、その間事務局が当教室に置かれるなど密接な関係を持っている。「日本心理学会」では、松本が初代会長となり、歴代の教授が評議員や理事、編集委員などを務めている。また、第2回、第19回、および第46回の大会を当教室が主催して、そのつど大会運営に新しい機軸を出した。

本専攻の卒業生は、旧制大学は、第1期卒業の明治42(1909)年から昭和29(1954)年までの46年間に188名、新制大学は、昭和28(1953)年以降平成6(1994)年春までの42年間に583名、合わせて771名にのぼる。昭和30(1955)年を第1期とする新制大学院修士課程修了者は平成6(1994)年春までに195名

に達して、旧制大学学部卒業生数とほぼ等しい。修士修了者の大部分は博士(後期)課程に進学し、結局は大学や研究所などの研究・教育職に就く者が多い。詳細な比較は困難であるが、旧制学部出身者のうち勤務先等が比較的調べやすい1940年代以降の卒業生については、研究・教育職経験者の比率は、新制修士修了者のそれと大きい差はない。新制の学部卒業生は、旧制の卒業生に目立つ社会福祉施設や家庭裁判所、官公庁などのほか、中学高校、報道、広告、電機通信をはじめ多様な職場に進出している。

2. 言語科学

本講座は、平成4(1992)年4月、文化行動学科の創設に伴い開設された。同年8月、助教授佐藤昭裕が文学科言語学講座から移って担当者となり、さらに平成6(1994)年度より専攻の学生を迎え、名実ともにその活動が始まった。

本講座では、文学科言語学講座と密接な連繋を保ちつつ、現代言語学の多様な領域の中で、近年、特に重要性を増しつつある語用論、談話分析、テクスト言語学、社会言語学など、自律的な体系としての言語とその使い手としての人間、さらには社会との関係に力点を置いた諸分野の研究と教育が行われている。

佐藤は、スラヴ語の文法論、意味論を専門とし、近年は特にテクスト言語学の立場から、中世ロシア語、古教会スラヴ語を対象に精密な研究を発表している。主な論文に「『過ぎし年月の物語』と『ノヴゴロド第1年代記』の語りの構造とテクスト形成手段」、『第11回国際スラヴィスト会議日本寄稿集』(1993年、原文はロシア語)等がある。

3. 社　会　学

本講座は明治40(1907)年5月に設置された。そして、同年9月米田庄太郎(1873～1945)が講師となり、講座の基礎が築かれた。米田は大正9(1920)年7月に教授になり、大正14(1925)年3月に退官している。米田の在任中の社

会学専攻卒業生は37名を数える。米田は精力的な著作活動を行っており、当時わが国で最も活躍した社会学者の1人であった。米田は多年欧米にあってギディングスやタルドに直接学び、社会学のみならず神学、経済学、社会政策学、憲法学、統計学、言語学、生物学等にも習熟しており、博学な知識と抜群の語学力を生かして、欧米の社会思想や最新の社会学説を日本に導入した。その成果は『輓近社会思想の研究』(1919、1920年)、『ドイツ新理想主義の歴史哲学』(1920、1921年)、『現代社会問題の社会学的考察』(1921年)、『続現代社会問題の社会学的考察』(1921年)、『リッケルトの歴史哲学』(1922年)、『歴史哲学の諸問題』(1924年)、『歴史哲学体系』(1924年)等に結実している。

同時に米田は自己の社会学理論の構想を深め、理論的・経験的な分析解明に努めたが、その深い学識は最初の1人の専攻学生であった高田保馬に受け継がれることとなった。すなわち米田の理論が、当時の世界的水準を凌駕した高田社会学展開の土壌となったのである。米田は、自らの純粋社会学を「心と心の相互作用及び相互関係」を対象とする学問と規定し、それが成立し展開する一般的形式と過程および原動力、その結果である社会意識、社会意識と個人意識との関係の分析解明に力を注いだ。米田はさらにこうした理論的視点の提示にとどまらず、具体的な文化現象や社会意識や社会問題を精力的に研究し、様々な評論活動をも行った。こうした分野での成果の一端は『民族心理講話』(1917年)、『現代人心理と現代文明』(1919年)、『経済心理の研究』(1920年)、『現代文化人の心理』(1921年)、『現代文化概論』(1924年)、『現代人口問題』(1921年)等に見ることができる。米田のこの理論と経験的研究を統合する研究姿勢は、社会学講座の1つの伝統として継承されていくことになる。米田は昭和20(1945)年死去したが、その蔵書は米田文庫として収められ、貴重な文献として今も広く活用されている。

米田の退官後、本講座はしばらく専任教官を欠いていたが、昭和2(1927)年米田に教えを受けた五十嵐信(1899～1928)が講師になった。彼は形式社会学の意欲的な研究者で、大いに将来を期待されたが、在任わずか1年半、ド

イツへの留学を前に昭和3(1928)年病没した。その業績はジンメルの『社会的分化論』(1927年)の翻訳のほか『五十嵐信遺稿集』(1930年)に収められている。

昭和3(1928)年11月には臼井二尚(1900～91)が講師となり、欧米への留学を経て昭和7(1932)年に助教授、昭和19(1944)年9月に教授に昇任した。彼は昭和38(1963)年8月の停年退官まで、35年にわたって講座を担当した。臼井は戦前の講師・助教授時代には社会学方法論の研究に力を入れ、マックス・ウェーバーからフッサールに至るまで渉猟し、わが国で現象学を社会学に導入した先駆者の1人であった。こうした分野の主要な業績は、社会関係・集団形象や具体的な社会現象を論じた他の論稿とともに『社会学論集』(1964年)に収められている。臼井は方法論と同時に、民族問題や身分や人種問題にも関心を払っていたが、戦後の新制大学発足後は社会学の実証科学化の趨勢の中で一段と経験的な研究に力を注ぎ、農村の継続的な研究を組織した。臼井を中心にして行われた村落調査は、京都府をはじめ、島根・山口・岡山・広島・高知・愛媛・宮崎・長野・岩手の諸県に及び、膨大な資料が蓄積されている。臼井の著『村落調査細目』(1972年)に従って統一的にかつ継続的に遂行された調査は、日本の社会学の研究史において貴重な財産となっている。

昭和34(1959)年に社会学講座に関連するものとして文化人類学のコースが一時期設けられた。棚瀬襄爾(1910～64)が助教授に就任し、マレーシアをはじめ東南アジアの民族宗教の研究に取り組んだ。しかし、昭和39(1964)年現地調査から帰国後急逝した。棚瀬の遺著『他界観念の原初形態』(1966年)はこの分野の古典とみなされている。

臼井の退官後昭和39(1964)年11月に、池田義祐(1915～92)が教授に昇任し、昭和53(1978)年3月まで講座を担当した。池田は昭和29(1954)年9月に助教授として赴任以来、24年弱研究と後進の指導に専念した。池田の研究は理論的な分野ではジンメルやウェーバーの支配関係の緻密な再解釈と自己の支配理論の構築にあった。その成果は『支配関係の研究』(1978年)および『社会

学の根本問題』(1985年)に体系化されている。また、池田は農村社会や宗教社会学の分野での経験的研究に取り組み、いくつかの興味深いモノグラフを残した。

池田の退官後は中久郎(1927～)が昭和53(1978)年から平成3(1991)年3月まで講座を担当した。中は昭和41(1966)年に文学部に着任し、以来精力的に社会学講座の発展のために取り組んだ。中はデュルケームの社会理論の学説史研究に打ち込み、その成果は大著『デュルケームの社会理論』(1979年)に結実している。引き続き「共同性」に関する幅広い学説史的研究を踏まえて、『共同性の社会理論』(1991年)を上梓した。同時に中は経験的な研究も中心となって推進し、日本の国会議員などのパワーエリートの実証的研究や民族問題の研究で大きな成果をあげた。臼井・池田両教授以来、ドイツの社会学理論が本講座の理論的伝統であったが、中はそれにフランスの社会学理論を加え、この分野の研究者を育成する上でも大きな役割を果たした。

臼井が平成3(1991)年2月、池田が平成4(1992)年3月に相次いで死去したが、講座の方は歴代教授の尽力によって徐々に発展している。まず、昭和51(1976)年に大学院に比較社会学客員講座が設置され、以来東南アジアをはじめとする諸外国の地域社会の研究が促進されるようになった。同講座の歴代教授・助教授は、フィールドで感染した肝炎がもとで46歳で急逝した水野浩一教授(在任昭和52年7月～54年10月)をはじめ、新睦人助教授(在任昭和54年4月～55年3月)、浜口恵俊助教授(在任昭和58年4月～60年3月)、坪内良博教授(在任昭和56年～)、筒井清忠助教授(在任昭和62年4月～平成元年3月)である。坪内教授はタイやマレーシアをフィールドにする人口学や家族社会学の専門家であるが、長年講座を担当し、有能な東南アジア研究者を育成している。

さらに、昭和61(1986)年に社会人間学講座が増設され、社会学講座も待望の2講座となった。この講座の教授にはそれまで社会学講座助教授であった宝月誠が就任した。そして、社会学講座助教授には平成元(1989)年4月、筒井清忠が就任し、平成6(1994)年1月からは同講座教授に昇任している。社

会人間学講座の助教授には平成5(1993)年4月に松田素二が着任した。

宝月は理論的には社会的相互作用論を、経験的研究では社会問題、特に逸脱行動を対象にしており、最近は、プロフェッションの逸脱としての医療問題、組織の逸脱としての企業犯罪の研究に力点を置いている。主な研究成果としては、『薬害の社会学』(1986年)、『逸脱論の研究』(1990年)等がある。

筒井は政治・文化社会学の理論研究と近代日本の歴史社会学的研究を行い、近年は特に文化や社会意識の領域に関する日本とヨーロッパなどの諸外国との比較歴史社会学的研究に重点を置いている。編・著書に、『昭和期日本の構造』(1984年)、『「近代日本」の歴史社会学』(1990年)等がある。

松田は人類学的な方法を動員してアフリカ都市・農村の社会移動の研究に取り組んでおり、特に出稼ぎ民社会の動態や民族生成のメカニズムを研究している。主な論文として、"Urbanization and Adaptation" (African Study Monographs, vol. 5, 1984)、"Soft Resistance in the Everyday Life" (Senri Ethnological Studies, No. 31, 1992)等がある。

社会学講座は平成4(1992)年4月から文学部の改組に伴いそれまでの哲学科から新設の文化行動学科に移行した。この移行によって、社会学の研究・教育を一段と経験科学として遂行する条件が整備されてきた。さらに、目下、大学院重点化の計画が進展しているが、それが社会学の経験科学としての性格を損なうものであってはならない。本講座がこれまでの伝統を踏まえて今後の研究・教育において一層推進しようとしていることは、歴史や比較社会的視点を重視し、社会生活の特定の具体的な現象を理論的・経験的に統合して研究することである。そのために、講座やカリキュラムは今後は、①社会学理論・方法論、②歴史社会学、③比較社会学、④現代社会・社会問題研究、に再編成され、学生・大学院生はだれもが①を学習した上で、さらに②～④の中から1つを専攻するようになる。

こうした変化を達成することは、本講座がこれまで学界で果たしてきた役割から見ても望まれることである。初代の米田教授は日本のわが国最初の全国的な社会学会である「日本社会学院」の創設(大正2〈1913〉年)に尽力し、

臼井教授は日本社会学院の後を継いで大正12(1923)年創設された「日本社会学会」で長年理事を務め、戦後には日本社会学会の会長、関西社会学会委員長を歴任した。同様に、池田・中両教授も学会の理事・委員長として活躍し、学会の発展や社会学研究の推進に貢献した。本講座は一大学内部での役割にとどまるものではなく、学会活動を通じて広く学界に影響を及ぼしている。さらに研究の点でも、本講座出身者を中心にした社会学の専門誌『ソシオロジ』が昭和27(1952)年に発刊されたが、それ以来講座は編集事務を担い、この雑誌を媒体にして社会学の研究が促進され、会員相互の交流も深まった。

本講座の卒業生は、旧制時代に総数246名、新制になってからの昭和28(1953)年から現在平成5(1993)年3月までの学部卒業生は626名に達する。新制度での修士修了者は107名、博士課程学修者は97名を数える。卒業生は近年女子学生の数も増えてきているが、教育・研究分野のみならず、マスコミ・出版社・公務員・メーカー・金融機関などで幅広く活躍している。こうした卒業生が一層活躍していくためにも、彼や彼女らが時代にふさわしい社会学の内容を修得できる環境を整えることが本講座の使命である。

4. 地　理　学

京都帝国大学文科大学に史学科が創設されるに際し、開設委員であった内田銀蔵教授の卓見により、史学地理学第2講座(地理学講座の前身)が地理学の独立した講座として、明治40(1907)年5月に開設された。本講座初代の小川琢治教授(1870～1941)は、明治29(1896)年に東京帝国大学地質学科を卒業し、明治41(1908)年5月の来任までの間は農商務省地質調査所技師を務め、その間に「日本群島地質構造論」を世に問うなど、まず地質学の分野で活躍した。また小川より早く、明治40(1907)年10月から着任した石橋五郎助教授(1877～1946)は東京帝国大学史学科の出身であった。本講座が開設されて数年後に東京帝国大学にも地理学の講座が開設されたが、それは理科大学に設置されており、この時点で既に東西における地理学の位置付けが大きく異な

っていた。小川は着任の後、自然地理学特に地形学を中心に講義を行い、石橋が地理学史・人文地理学・講読などを担当、ほかに人類学・日本歴史地理が開講された。小川は一方で漢籍に関する深い理解を有し、中国歴史地理の多くの著書を生み出した。さらに、礪波平野の散村や大和盆地の環濠集落の研究に先鞭を付け、集落の発生・歴史的展開の解明という今日に至る論点を地理学に取り込んだ。大正10(1921)年12月、小川は地質学鉱物学教室を創設して理学部に転出したが、それまでの14年間に地理学教室の基礎が築かれた。同時に古地図・地形図等の収集にも意を注ぎ、多くの古地図を購入する一方、地形図・地質図の寄贈を受け、それらが今日の教室・文学部博物館のコレクションの重要な部分となっている。この時期には、民族資料の収集も開始された。小川在任中の卒業生は13名であったが、その学風を受けて、中国や近畿諸地域について歴史性を重視しながらその特性を論じる形の卒業論文が多かった。一連の広範な活動を反映し、例えば昭和5(1930)年に刊行された『小川博士還暦祝賀記念論叢』には56編もの論文が寄せられたが、理学部系の人々の論文が多いことはもとより、文学部系の中でも、地理に次いで東洋史の論文が多かった。

小川の転任の後、教授として講座を担任した石橋は当初ラッツェルによって講じたが、やがて時代変遷的に地理を見るという立場を鮮明にした。地人相関を基調とする人文地理学こそ地理学の本体であるとし、歴史的要因が重要な役割を占めること、時には歴史的説明が地人相関の解釈の大半を占めることを論じた。この歴史性を重視する考えは、古地図類のコレクションと相まって、教室出身者による研究の1つの伝統的な姿勢となった。

明治43(1910)年に小川の発起で創設された「地理学談話会」は、次第に活発な活動をするようになっていたし、史学科卒業者などが中心となって大正4(1915)年に始められた「史学地理学同好会」も、機関誌『歴史と地理』を刊行していた。さらに大正13(1924)年には、小川・石橋のほか理学部の中村新太郎教授が中心となって「地球学団」が発足し、雑誌『地球』を刊行し始めた。また、小川・石橋によって、地理学の普及を目指した多くの叢書が監

修・編纂された。この時期に注目されるのは、これらに加えて、教室独自の研究成果の発表のために、昭和7(1932)年に『地理論叢』第1輯が刊行されたことである。巻頭論文において、石橋は上述の地理学観を述べ、その後随時刊行が続けられた。石橋の教授在任中には、旧制高校の増設もあって地理学専攻の卒業生は著しく増加し、大正11(1922)年から昭和11(1936)年の停年退官に至る間に、計57名に達した。そのほとんどが、国内の特定地域を対象として人口・歴史・集落・経済・交通等の現象を取り上げ、着実に資料を収集し、綿密に叙述する手法を継承していた。とりわけ昭和に入ってからは、毎年5～10名が卒業し、その多くが教壇に立った。『地理論叢』第8輯は石橋の還暦記念論文集に当てられたが、同書に収められ、献呈された論文は32編に及んだ。

昭和6(1931)年から着任していた小牧実繁助教授(1898～1990)は、昭和13(1938)年教授に昇任し、講座を担当した。小牧の専門は先史地理学であり、主著『先史地理学研究』(1937年)等において、歴史地理学を過去の任意の「時の断面」における景観復原を目的とするものと論じた。また、多くの海外地理学者の論著をも紹介し、昭和12、13(1937、1938)年には、『地理論叢』のほかに『京都帝国大学文学部地理学研究報告』も出版した。しかし、『歴史と地理』は昭和9(1934)年、『地球』は昭和12(1937)年に廃刊となり、『地理論叢』も昭和18(1943)年に事実上廃刊となった。

小牧はやがて日本地政学の樹立を提唱し、第2次世界大戦下の時局が緊迫するとともに、この立場を強く推進した。昭和11(1936)年から昭和20(1945)年に至る間の卒業生は61名に達したが、その前半には地理思想史や方法論、人口や経済地域の問題など、従来の傾向を引き継いだ卒業論文が多かった。しかし後半には、教授の影響の下に地政学的研究が大半を占めるようになり、またアジア諸地域の民族問題や資源を論じたものも増加した。太平洋戦争下の政策と強く関連しつつ構築された日本地政学を核とする教室運営は、敗戦によって大きな転換を迫られた。学生は戦陣から相次いで復学したが、小牧は昭和20(1945)年12月に職を辞し、翌昭和21(1946)年には室賀信夫助教

授と野間三郎講師も辞職した。教室には専任教官がいなくなり、講座は存亡の危機に瀕したが、東洋史学講座の宮崎市定教授が地理学講座を兼担し、その見識に支えられて教室の再建が始まった。小牧の受講生等が中心となって、古稀を祝う論文集『人文地理学の諸問題』が刊行されたのは、ずっと後の昭和43(1968)年のことであった。これには40編の論文が収載された。

昭和21(1946)年から非常勤講師として講義を担当し、昭和22(1947)年に就任した織田武雄助教授(1907～)によって、教室の再建はようやく軌道に乗り始めた。織田は昭和25(1950)年には教授に昇任して地理学講座を担任し、この頃から毎年、4～5人の卒業生を送り出すようになった。さらに昭和32(1957)年頃からは、若干の年を除けば6～8人程度の卒業生を数えるようになり、昭和34(1959)年には水津一朗助教授(1923～)が着任した。

織田の専門は地理学史・地図史であり、主著『古代地理学史の研究』(1959年)をはじめ、昭和46(1971)年の停年退官後のものも含む多くの著作でこの分野の研究を推進している。織田はまた、文学部関係者を中心とした地域調査や、国史学教室・教養部人文地理学教室との共同調査などを実施した。昭和24(1949)年から3年間にわたって行われた湖東平野の調査は、日本における共同調査の先駆であり、昭和40(1965)年には門真市の調査結果が京都大学文学部地理学教室研究報告第1輯『大都市近郊の変貌』として刊行された。この間、昭和34(1959)年には織田は京都大学イラン・アフガニスタン・パキスタン学術調査隊に参加し、その成果を『西南アジアの農業と農村』(1967年)として公刊した。この頃から地理学教室の卒業生・大学院生で東南アジア・南アジア・西アジア・太平洋諸島などの調査に出かける者が増加した。

戦後の卒業生は昭和46(1971)年の織田の停年退官までに157名に達し、ほかに大学院修士課程のみの修了者が3名あった。卒業論文には、地理学史・地図史をはじめ歴史性を重視したものが多いことに加え、文化人類学や社会経済史学などの方法を導入したものも増加した。昭和46(1971)年に刊行された『織田武雄先生退官記念　人文地理学論叢』には、62編もの献呈論文が収

載されたが、前述のような伝統的な傾向はもとより、様々な外国の地域をフィールドとした論文が多いこと、テーマが広く地理学の各分野に及んでいることに特徴がある。

このような卒業生の増加とともに、「地理学談話会」もまた従来のように同窓の親睦の核としての役割を果たし続けたが、昭和21(1946)年にはより広範な地理学者に呼びかけて「西日本地理学会」が結成された。昭和23(1948)年にはこれが発展的に解消されて「人文地理学会」が創設された。同学会は機関誌『人文地理』を刊行し、当初の季刊から昭和25(1950)年には隔月刊となり、平成6(1994)年初頭までに46巻を重ねている。同学会は創設以来事務所を地理学教室に置き、会員数約1,700名、機関誌刊行数2,100部を数えるに至り、また海外の諸学会と機関誌の交換を行っており、わが国の代表的学会と評価されている。昭和59(1984)年には独立の事務所に移転したが、『人文地理』の水準は地理学教室の発展とも深く結び付いたといってもよいであろう。

昭和46(1971)年からは水津が教授に昇任して地理学講座を担任した。水津は独自の「基礎地域」概念を提示し、主著『社会集団の生活空間』(1969年)をはじめとする多くの著書において、基礎地域・結節システム・地域を論じた。また、ヨーロッパ地理学史、ヨーロッパ歴史地理学、位相地理学などの著作も次々と刊行し、伝統的な分野に加え新しい分野をも開拓している。水津もまた教室の学生・大学院生を中心とした地域調査を実施して『中心集落とその背域』(1975年)を刊行し、さらに教室関係者による論文集『地理の思想』(1982年)、『空間・景観・イメージ』(1983年)等をも公刊した。これらはいずれも京都大学文学部地理学教室研究報告の続編とされているが、このうち『地理の思想』は、昭和55(1980)年に京都で開催された第24回国際地理学会地理思想史部会での成果を基礎としたものであり、内外の地理思想とその接触を取り上げたものであった。水津は昭和61(1986)年に停年退官を迎えたが、それまでの16年間に79名の地理学専攻卒業生があり、ほかに2名の大学院生が水津の下で学んだ。退官に際して刊行された『人文地理学の視圏』に

は、71編もの論文が収められた。これらに見られる学風は、基本的には織田時代のそれを継承しているが、前述のような学史的・理論的なものの比重が相対的に高くなっている。

昭和47(1972)年には應地利明助教授が着任していたが、昭和61(1986)年からは教授として地理学講座を担任し、平成2(1990)年には新設された地域環境学講座の担任となった。地域環境学講座が新設されたことにより、地理学専攻は2つの講座によって運営されるようになった。應地は、農業・農村研究、比較居住生態論、南および西アジア地域研究、空間認識論など、広範な分野において次々と研究成果を発表し続けてきたが、平成6(1994)年に東南アジア研究センター教授として転出した。

應地の異動に伴って、地理学講座には平成3(1991)年から成田孝三教授が着任し、昭和62(1987)年から同講座助教授に就任していた金田(きんだ)章裕が、平成6(1994)年教授に昇任して地域環境学講座の担任となっている。成田は都市経済地理学を専門とし、インナーシティ問題、ジェントリフィケーション、エンタープライズゾーン等について論究した『大都市衰退地区の再生』(1987年)や都市発展段階説、世界都市論、リンケージ政策等を論じた『現代大都市のリストラクチャリング』(1992年)等、特に日英米都市の機能・構造・政策の比較研究に関する著作が多い。金田は、歴史地理学、オーストラリア地域研究などを専門とし、『条里と村落の歴史地理学研究』(1985年)、『古代日本の景観』(1993年)等をはじめ、主として日本・オーストラリアに関する研究成果を発表している。

本地理学教室は日本で最も長い歴史を歩んできたが、この間多くの教室出身者が、助手としてその運営を助けてきた。また、教養部人文地理学教室教官をはじめとする学内外の多くの研究者による、様々な講義が開講されてきたのも1つの大きな特徴である。それによって多様・多彩な研究者を輩出すると同時に、マスコミその他の実業分野にも多くの人材を供給してきた。伝統的学風の1つが歴史性を重視する姿勢であることは既に述べたが、これが文科大学史学科に設置された地理学の講座の当初の目的に深く関わっている

ことは改めて繰り返す必要がないであろう。しかし平成3(1991)年から、創設以来の史学科を離れ、地理学専攻は文学部に新設された文化行動学科に移り、また、地理学・地域環境学の2講座によって構成されるという新しい段階を迎えている。

5. 科学哲学科学史

科学哲学科学史講座は、文化行動学科の新設に伴って設置され、平成5(1993)年4月に内井惣七が倫理学講座から転じて担当教授として着任した。内井の研究業績は、論理学、確率基礎論、19世紀の物理学と生物学や、科学方法論の歴史などにわたり、『論理学』(共著、1976年)、『科学と哲学』(編著、1988年)、『シャーロック・ホームズの推理学』(1988年)、『真理・証明・計算』(1989年)等の著書がある。

本講座設置に至る前史としては、長年構想されてきた文化行動学科の一分野として「科学・文化論講座」が盛り込まれていたことをあげなければならない。実際の設置に当たっては名称と教育研究内容がかなり改められたが、構想段階では関連講座であった哲学哲学史第1講座と第4講座による講義等の実績と準備とに負うところが大きい。

本講座は科学哲学と科学史を両輪とした研究を目指す。平成5(1993)年度に「科学哲学概論」の講義が始まり、平成6(1994)年度からは、科学史概論のほか専攻生向けの本格的な研究講義と演習科目が提供されている。